視聴覚教材の利用に関するアンケート

結果報告書

1991年2月

国立国語研究所 日本語教育センター

日本語教育教材開発室

499

目次

はじめに 1
Ⅰ．種類別に見た日本語教育機関の概要 3
　１．学習者数 3
　２．学習者のレベル 5
　３．学習者数で見たレベルの内訳 7
　４．使用している教科書 9
Ⅱ．視聴覚教材一般について 13
　１．各種機関における視聴覚機器の保有状況 13
　２．各種視聴覚教材の利用状況・視聴覚機器の活用状況 16
　３．視聴覚教材の準備 21
Ⅲ．日本語教育におけるビデオ・ＬＤの利用状況 24
　１．学習者のレベル別に見たビデオ使用状況 24
　２．週ごとのビデオ使用時間数 27
　３．レベル別のビデオ使用目的 29
　４．ビデオの利用の仕方 34
　５．使用しているビデオ教材 39
　６．ビデオの補助教材 46
Ⅳ．ビデオに関する意見等 48
　１．学習者の反応 48
　２．ビデオの長所 52
　３．ビデオの不便な点 57
　４．今後のビデオ教材に望むこと 62
　５．その他、ビデオ教材についての感想 70
Ⅴ．ビデオを使用していない機関の意見等 73
　１．ビデオを使用しない理由 73
　２．ビデオの不便な点、今後に望むこと 75

Ⅵ．日本語教育における視聴覚教材の利用：分析とまとめ 76
1．視聴覚機器の保有と活用 76
2．各種視聴覚教材の利用 78
3．日本語教育におけるビデオの使用状況 79
（1）レベル別使用率 79
（2）使用時間数 80
（3）使用目的 81
（4）利用の仕方 82
（5）使用教材 83
（6）補助教材 85
4．ビデオに関する意見 86
5．ビデオを使用しない理由 87
（補）教材一般についての感想等 88
おわりに 91

資料：調査票

＜グラフ目次＞

グラフⅠ－１－１　機関の学習者数 3
グラフⅠ－１－２　各種日本語教育機関の学習者数 4
グラフⅠ－２－１　学習者レベル（機関種類別件数） 5
グラフⅠ－２－２(a) 初級クラスのある割合 6
グラフⅠ－２－２(b) 中級クラスのある割合 6
グラフⅠ－２－２(c) 上級クラスのある割合 6
グラフⅠ－３－１　レベル別学習者数 7
グラフⅠ－３－２　学習者数によるレベル別構成比 8
グラフⅠ－３－３　レベル別学習者所属内訳 8
グラフⅡ－１－１　視聴覚機器保有状況 13
グラフⅡ－１－２(a) 視聴覚機器保有状況（大学） 15
グラフⅡ－１－２(b) 視聴覚機器保有状況（高専） 15
グラフⅡ－１－２(c) 視聴覚機器保有状況（日本語学校） 15
グラフⅡ－２－１　種類別視聴覚教材使用状況 16
グラフⅡ－２－２(a) 視聴覚教材使用状況（大学） 17
グラフⅡ－２－２(b) 視聴覚教材使用状況（高専） 17
グラフⅡ－２－２(c) 視聴覚教材使用状況（日本語学校） 17
グラフⅡ－２－３(a) テープレコーダー活用率 19
グラフⅡ－２－３(b) スライド映写機活用率 19
グラフⅡ－２－３(c) ＯＨＰ活用率 19
グラフⅡ－２－３(d) ＶＴＲ活用率 20
グラフⅡ－２－３(e) ＬＤＰ活用率 20
グラフⅡ－３－１(a) 視聴覚教材の準備（大学） 22
グラフⅡ－３－１(b) 視聴覚教材の準備（高専） 22
グラフⅡ－３－１(c) 視聴覚教材の準備（日本語学校） 22

グラフⅢ－１－１　レベル別ビデオ・ＬＤ使用状況 24
グラフⅢ－１－２(a) レベル別ビデオ・ＬＤ使用率（大学） 25
グラフⅢ－１－２(b) レベル別ビデオ・ＬＤ使用率（高専） 25
グラフⅢ－１－２(c) レベル別ビデオ・ＬＤ使用率（日本語学校） . . .25
グラフⅢ－２－１(a) 初級ビデオ使用時間数（週） 28
グラフⅢ－２－１(b) 中級ビデオ使用時間数（週） 28
グラフⅢ－２－１(c) 上級ビデオ使用時間数（週） 28
グラフⅢ－３－１　初級ビデオ使用目的 30
グラフⅢ－３－２　中級ビデオ使用目的 30
グラフⅢ－３－３　上級ビデオ使用目的 30
グラフⅢ－３－４(a) 初級の目的別ビデオ使用率（大学） 31
グラフⅢ－３－４(b) 初級の目的別ビデオ使用率（日本語学校） 31
グラフⅢ－３－５(a) 中級の目的別ビデオ使用率（大学） 32
グラフⅢ－３－５(b) 中級の目的別ビデオ使用率（高専） 32
グラフⅢ－３－５(c) 中級の目的別ビデオ使用率（日本語学校） 32
グラフⅢ－３－６(a) 上級の目的別ビデオ使用率（大学） 33
グラフⅢ－３－６(b) 上級の目的別ビデオ使用率（日本語学校） 33
グラフⅢ－５－１　使用ビデオ教材 39
グラフⅢ－５－２　録画ビデオ教材の内容 43
グラフⅢ－６－１　ビデオの補助教材（自作） 47
グラフⅤ－１－１　ビデオを使用しない理由 74

はじめに

「視聴覚教材の利用に関するアンケート」は、平成２年６月に、国立国語研究所日本語教育センター日本語教育教材開発室が国内の日本語教育機関の御協力をいただいて行なったものである。

近年、視聴覚教材、特にビデオは、ＶＴＲ機器の普及やソフトの多様化に伴って、日本語教育においてますます大きな役割を果たすようになっている。しかし、教育現場での利用状況についての調査は、管見の限りでは、これまであまり行なわれていなかったように思われる。当日本語教育教材開発室でも、昭和49年以来『日本語教育映画 基礎編』『日本語教育映像教材 中級編』を企画・制作してきたが、それらが実際にどのように使用されているか、また現場の先生方がビデオ教材についてどのようなお考えをお持ちなのか、詳しく知る機会がほとんどなかった。そこで、中級編ビデオの４ユニットを完成した時点で、日頃ビデオ教材をお使いの先生方がどのようなご不満、ご感想を抱いておられるか、またこれからのビデオにどういったことを望んでいらっしゃるかをうかがうべく、このアンケートを企画した。

今回の調査の対象としたのは、日本国内の日本語教育機関（大学、高専、日本語学校）である。大学と高専については、留学生を受け入れて日本語教育を行なっていると当日本語教育センターで把握している限りでの全ての機関、そして日本語学校については認定校を中心に対象を決定した。その結果、調査対象となったのは、296機関（大学176校、高専28校、日本語学校92校）であった。

調査は、郵送調査で行なった。平成２年６月初旬に調査票を対象機関に送付し、ご記入の上、返送していただいた。調査項目の詳細に関しては、巻末に調査票を添付したので、そちらを参照されたい。調査票の回収は、７月末日到着分までで締め切り、集計・分析を行なった。回答をお寄せ下さったのは計179機関、回収率は約60.5％であった。その内訳は、以下の通りである。

大学　　100校（国公立35校、私立65校）
高専　　25校
日本語学校　54校

※大学には、学部と、予備教育の別科等の両方が含まれる。日本語学校というカテゴリーの中には、大学と高専を除いたもの、すなわち民間の日本語学校の他に技術者研修機関など、各種の日本語教育機関が含まれている。

この報告では、アンケートのほとんどすべての設問について、集計結果をまとめてある。調査用紙の質問には、選択肢を複数回答する方式と、記述式の自由回答の方式が含まれていた。前者については、集計・分析した結果をグラフにし、簡単な補足説明とともに示した。後者については、現場の生の声を伝えられるよう、項目ごとにまとめて、できるだけ多くの回答をそのまま紹介するよう努めた。なお、データの入力指導・集計・分析には、情報資料研究部第二研究室研究員熊谷康雄の協力を得た。

今回の調査では、国内における利用状況といっても、現状の一部を知り得たにすぎないのかもしれない。しかし、このような冊子の形をはじめとして、いただいたお答えをできるだけ多くの場で発表し、今後の教材づくりに反映させたり、新たな情報流通、意見交換の糸口へとつなげたりできるよう、活かしていきたいと考えている。

調査に御協力いただいた各機関、そしてお忙しい中をアンケートに回答して下さった先生方に、心より御礼申し上げます。

平成３年２月

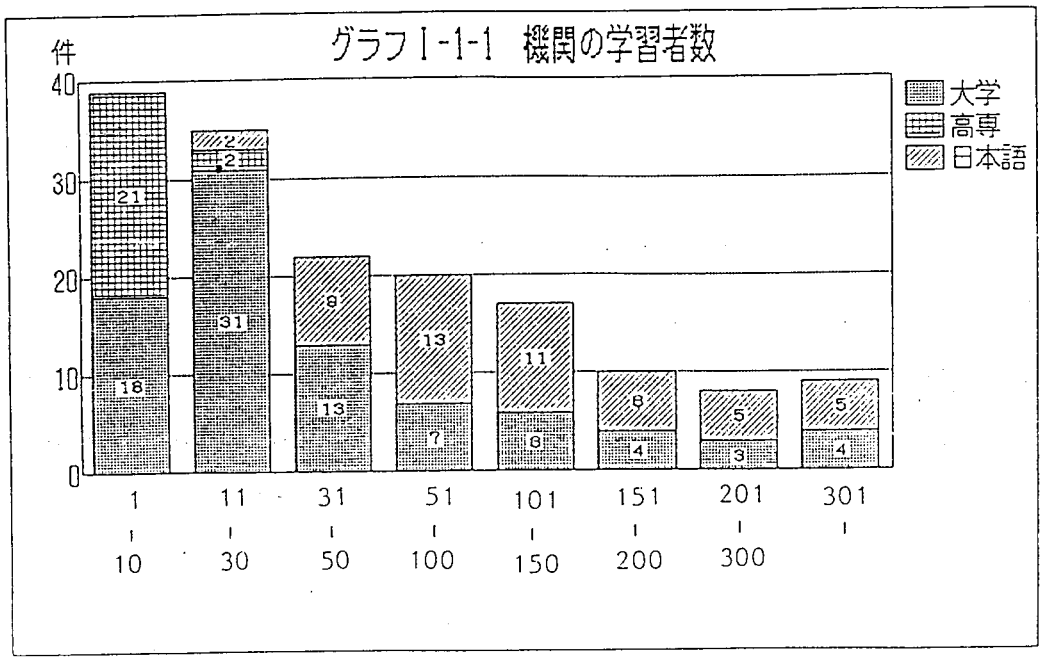
国立国語研究所　日本語教育センター
日本語教育教材開発室

Ⅰ．種類別に見た日本語教育機関の概要

今回の調査対象となった日本語教育機関は、大学・高専・日本語学校の３種類に大別できる。この調査は元来これら三者の比較を目的としたものではないが、機関の種類によって傾向の違いが認められることは予測されるので、以下の各項において回答を集計・分析するにあたり、機関の種類別の検討をたびたび行う。そこでまずはじめに、在籍学習者数や初級・中級・上級のレベル別の内訳などを通して、３種類の機関の性格を概観してみる。

１．学習者数

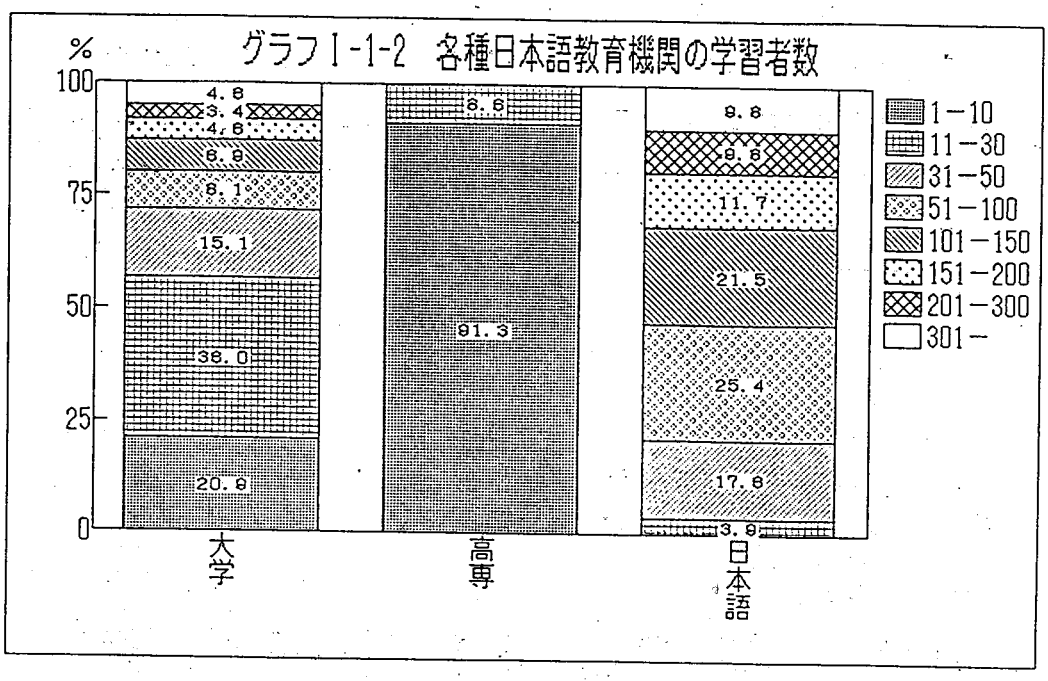
機関の性格づけをする一つの方法として、まず、在籍する日本語学習者の数によって、各校の日本語教育機関としての規模を概観する。回答機関数は、大学（学部および予備教育）が100件、高専が25件、日本語学校が54件であったが、そのうちで学生数の回答欄に記入のあったのは、大学86件、高専23件、日本語学校51件である。集計結果をグラフⅠ－１－１に示す。



これは、１本の棒の中に大学・高専・日本語学校の回答を含む積み上げ棒になっており、全体の傾向を知るとともに、棒の中での内訳から各種機関別の回答数も見ることができるようになっている。たとえば、学生数が10人以下と回答した機関は全部で39件あり、うち大学が18件、高専が21件、という具合である。

全体的には、左に行くほど棒が長く、つまり学生数の少ない機関が多く、学生数30人以下の機関が全体の50％近くを占めている。特に高専は、学習者10人以下のところが殆どである。大学は、すべてのカテゴリーに回答が分布しているが、11人～30人の部分がピークになっている。日本語学校は、学生が10人以下のところはなく、31人～150人あたりが主となっている。学生数から見た日本語教育機関としての規模は、全体的に日本語学校が大きく、次は大学、そして高専は小規模ということになる。

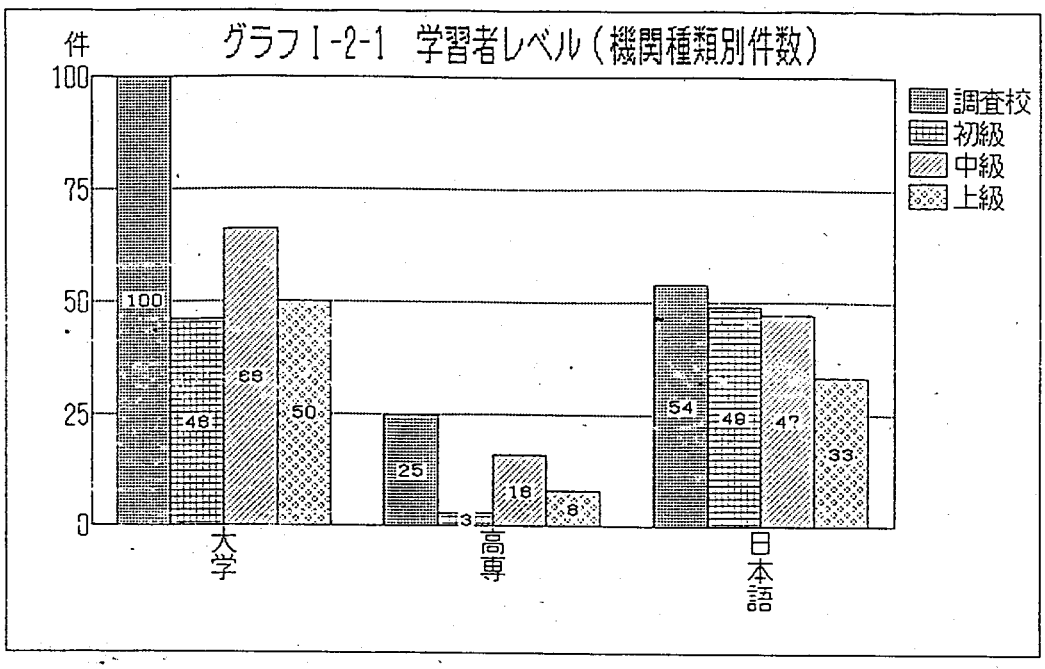
次に、機関の種類ごとに、学習者の人数別カテゴリーの構成比を見る。



大学は、10人以下、および11人～30人のカテゴリーに入るものが50％以上を占める。一方日本語学校では、学生数30人以下というのは全体の3.9％にすぎない。100人を超えるカテゴリーの比率の合計は、大学の19.5％に対して、日本語学校では52.8％となっている。

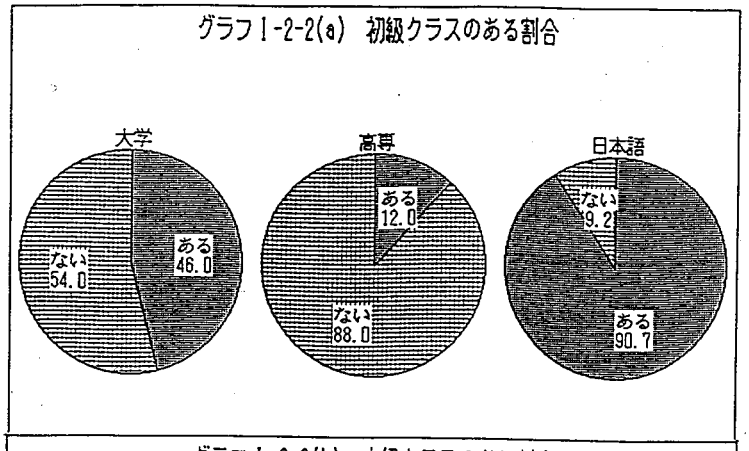
2．学習者のレベル

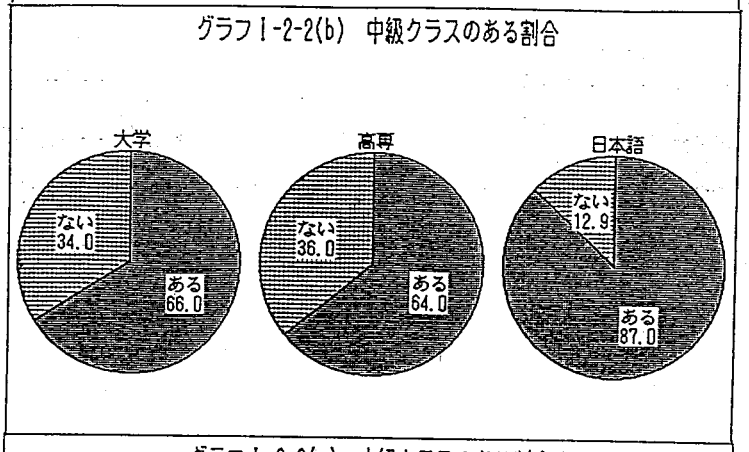
学習者総数に続いて、初・中・上級の各レベルのクラス数および学習者数について質問した。そこにクラス数なり人数なりの記入があれば、その機関には当該レベルのクラスがある（学習者がいる）とみなし、機関件数をレベルごとに集計した（グラフＩ－２－１）。ただし、「初級」「中級」「上級」のレベルの定義は、設問では特にせず、各機関でそれぞれのレベルとして扱っているクラスを回答するということで、回答機関の判断にお任せする形にした。

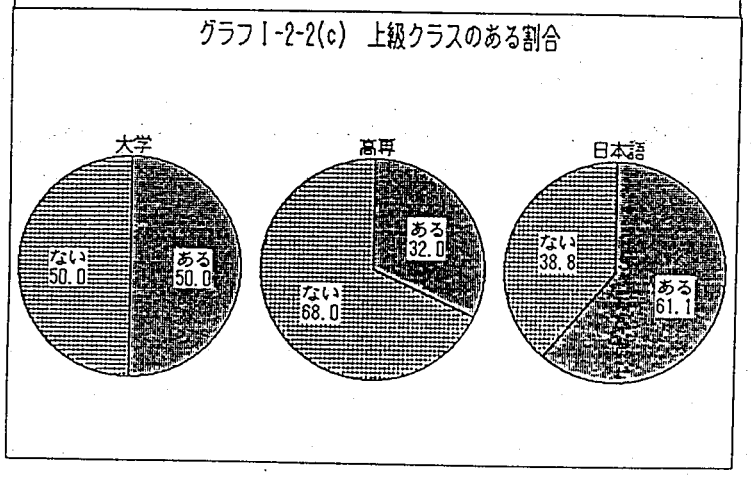


各々の棒の集まりのうち、一番左の棒「調査校」とは、その種別の回答機関数全体のことで、たとえば大学なら全部で100件回答が寄せられたうち、初級クラスがあるのが46件、中級が66件、上級が50件となる。機関の種類別に見ると、それぞれに３レベルの棒の長さのパターンが異なる。大学では、中級クラスのある件数が最も多く、少し低くなる形で上級・初級がある。初級の46件は、おそらく予備教育にあたるものかと考えられる。高専も中級の件数が最も多いが、ここで目につくのは、初級クラスがあると回答した件数の少なさである。ある高専からのコメントに、「留学生は、原則として日本人学生と一緒に授業についてこられる程度の日本語力を入学前につけている」というものがあった。日本語学校は、初級と中級のあるところが、各々54件中49件と47件というように多い。

各々の件数を調査校数で割って、初級・中級・上級の各クラスがおかれている割合を出した。それを円グラフで示したのが、グラフＩ－２－２(a)～(c)になる。

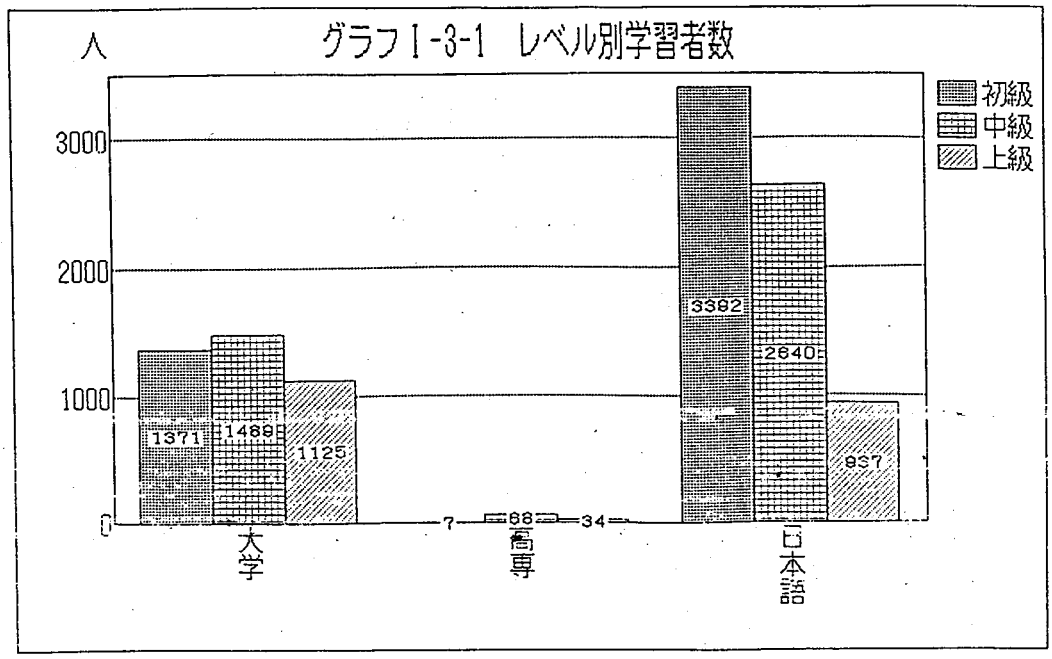






3．学習者数で見たレベルの内訳

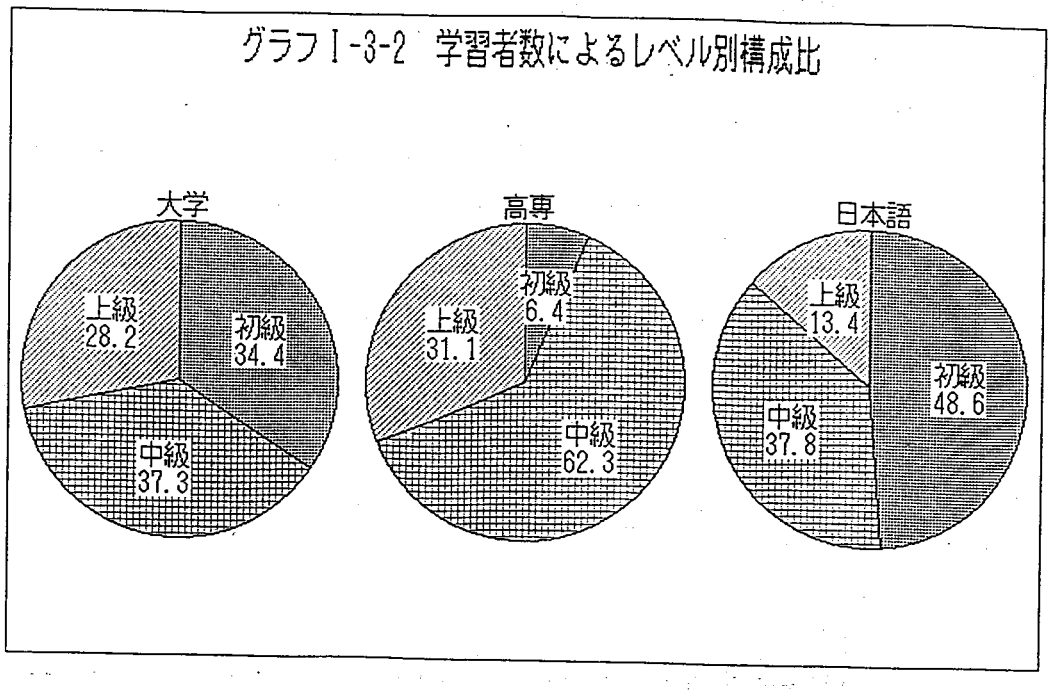
今度は、機関件数でなく、学習者の人数で３つのレベルに関する内訳を見てみよう。グラフＩ－３－１のデータは、レベル別の学習者数の回答欄に記入のあった大学78件、高専19件、日本語学校51件分のものである。



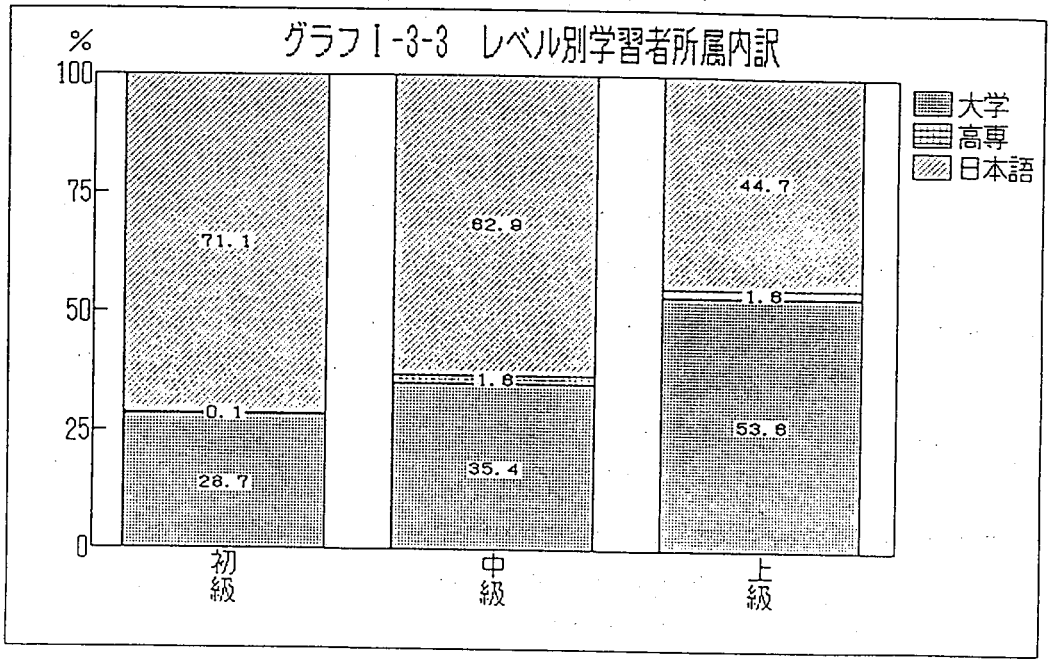
グラフＩ－２－１と比較すると、大学は学習者数では初級が少し伸びて上級を抜き、中級とあまり変わらない程度までになっている。高専は、人数が少ないので見づらいが、パターンとしては件数のグラフとほぼ同じである。日本語学校は、初級・中級・上級の順に多いというパターンは変わらないが、レベル間の差は学習者数で見るとはるかに大きくなる。特に、上級の学習者の少なさが目立つ。

次に、やはり学習者数のデータを使って、大学・高専・日本語学校各々の中で見たレベル別の内訳を、グラフＩ－３－２に示す。

大学は、３つのレベルに学習者がほぼ均等に分布している。高専は、人数自体が少ないので、単純にパーセンテージで大学や日本語学校と比較することは問題があるが、全体の2/3近くが中級の学習者で、1/3弱が上級、残り6.4%が初級となる。日本語学校では、約半分の学習者が初級、1/3強が中級、上級は他に比べて少なく、13.4%となっている。



グラフⅠ－３－３は、初級なら初級の学習者のうち、何％がどの種類の機関で勉強しているのかという、レベルごとの所属内訳である。レベルが上にいくほど大学の割合が大きくなり、逆に初級にいくほど日本語学校の割合が大きくなる。



4．使用している教科書

今回の調査のテーマは視聴覚教材の利用だが、使用教科書についての設問も入れた。集計結果を、レベルごとに以下に示す。まず、全体集計で回答の多かったものを、次に、機関の種類別に集計した結果の上位を挙げる。全体集計については５件以上から「使用している」という回答の寄せられたものを、機関種類別では上位５種の教科書を挙げる。ただし高専は、初級では複数校が共通して回答した教科書はなく、中・上級でも使用の多いものはあまりなかった。

（カッコ内は、回答件数）

＜初級＞

全体：

『日本語初歩』	国際交流基金	(22)
『日本語の基礎Ⅱ』	海外技術者研修協会	(21)
『日本語の基礎Ⅰ』	海外技術者研修協会	(20)
『AN INTRODUCTION TO MODERN JAPANESE』	ジャパンタイムズ	(10)
『文化初級日本語Ⅰ，Ⅱ』	文化外国語専門学校	(8)
『日本語Ⅰ』	国際学友会日本語学校	(6)
『日本語かな入門』	国際交流基金	(6)

大学：

『日本語の基礎Ⅱ』	(7)
『AN INTRODUCTION TO MODERN JAPANESE』	(7)
『日本語初歩』	(6)
『日本語の基礎Ⅰ』	(6)
『A COURSE IN MODERN JAPANESE』	(4)

日本語学校：

『日本語初歩』	(16)
『日本語の基礎Ⅱ』	(14)
『日本語の基礎Ⅰ』	(14)
『文化初級日本語Ⅰ，Ⅱ』	(6)
『日本語かな入門』	(5)

＜中級＞

全体：

『日本語表現文型中級Ⅰ，Ⅱ』　筑波大学日本語教育研究室　(44)

『現代日本語コース中級』　名古屋大学出版会　(20)

『実践にほんごの作文』　凡人社　(10)

『日本語中級Ⅰ』　東海大学出版会　(8)

『日本語Ⅱ』　国際学友会日本語学校　(8)

『AN INTRODUCTION TO ADVANCED SPOKEN JAPANESE』
アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター　(7)

『INTENSIVE COURSE IN JAPANESE』　ランゲージ・サービス　(7)

『ニュースで学ぶ日本語』　凡人社　(7)

『総合日本語中級前期』　凡人社　(7)

『日本語作文Ⅰ』　専門教育出版　(6)

『自然な日本語――中級用会話教材――』　凡人社　(6)

大学：

『日本語表現文型中級Ⅰ，Ⅱ』　(13)

『現代日本語コース中級』　(13)

『実践にほんごの作文』　(10)

『AN INTRODUCTION TO ADVANCED SPOKEN JAPANESE』　(4)

『INTENSIVE COURSE IN JAPANESE』　(4)

『ニュースで学ぶ日本語』　(4)

『総合日本語中級前期』　(4)

高専：

『日本語表現文型中級Ⅰ，Ⅱ』　(6)

『高専留学生の日本語』　(4)

日本語学校：

『日本語表現文型中級Ⅰ，Ⅱ』　(25)

『日本語中級Ⅰ』　(8)

『現代日本語コース中級』　(6)

『日本語Ⅱ』　(5)

『自然な日本語――中級用会話教材――』　(5)

＜上級＞

全体：

『外国学生用日本語教科書　上級Ⅰ，Ⅱ』
早稲田大学日本語研究教育センター　(15)

『はじめての専門書』　凡人社　(7)

『日本語作文Ⅱ』　専門教育出版　(7)

『ニュースで学ぶ日本語』　凡人社　(6)

『日本語表現文型中級』　筑波大学日本語教育研究室　(6)

『「朝日新聞の声」を聴く』　くろしお出版　(6)

『実践にほんごの作文』　凡人社　(5)

大学：

『はじめての専門書』　(4)

『日本語作文Ⅱ』　(3)

『日本語表現文型中級』　(3)

『「朝日新聞の声」を聴く』　(3)

『実践にほんごの作文』　(3)

高専：

『日本語作文Ⅱ』　(2)

日本語学校：

『外国学生用日本語教科書　上級Ⅰ，Ⅱ』　(12)

『はじめての専門書』　(3)

『ニュースで学ぶ日本語』　(3)

『日本語表現文型中級』　(3)

『「朝日新聞の声」を聴く』　(3)

日本語教育用教科書以外の記入もあった。初級については、高専の数件が数学や物理の教科書、中学の国語の問題集などを使用していると回答している。中級になると、新聞（社説、天声人語、など）や雑誌記事、一般書など生の読み教材の利用も増えてくる。高専では、専門の勉強をするための準備として工学系の読み物や電気・電子用語事典を使うなどのケースも見られる。上級では、新聞、本、

雑誌などの利用がさらに伸び、その他にも生の教材をアレンジした自作教材などが多くなっている。

日本語教育用の教科書は全く使っていない機関もあった。その数は、初級と中級では各８件あった。いずれの場合も、大学が６件、高専が２件で、日本語学校は含まれていなかった。教科書の代わりに使うものは、初級の場合、大学では教師作成のプリントや新聞・雑誌の記事、高専では物理や数学の教科書であった。中級になると、大学ではプリントや新聞に加えて一般書（日本事情や経済などの教養関係、および文学）も使われる。高専では、電気・電子用語事典や新聞、高校の国語教科書が使われている。

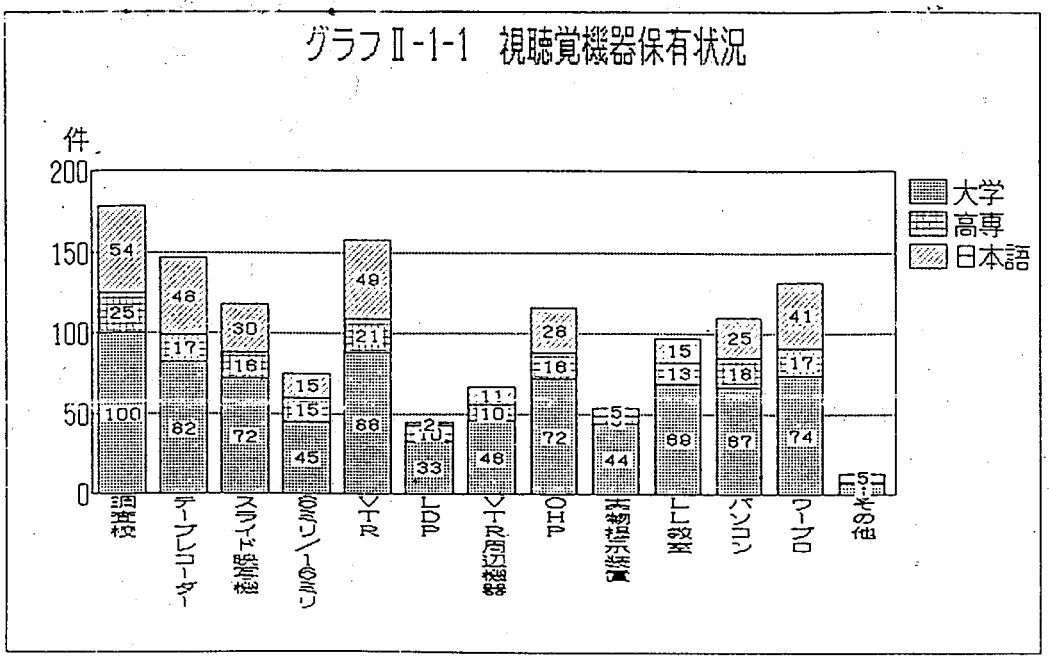
上級にいくと、日本語教育用教科書は使っていないところが22件に増える（大学16件、高専４件、日本語学校２件）。日本語学校も入っているが、大学・高専に比べると、やはり何らかの教科書を使っているところが多い。教科書の代わりに使っているものは、機関の種類を問わず、新聞・雑誌・本などの生教材やプリントが主になっている。

Ⅱ．視聴覚教材一般について

ここでは、各種の視覚・聴覚・視聴覚教材の利用状況についての調査結果をまとめる。

1．各種機関における視聴覚機器の保有状況

「貴機関で保有しておられる機器に○をつけて下さい」として、選択肢を複数回答する形式の質問を設けた。集計結果をグラフⅡ－1－1に示す。選択肢にしたものは、グラフの横軸の項目の通りである。「ＬＤＰ」はレーザーディスクプレーヤー、「ＯＨＰ」はオーバーヘッドプロジェクターをそれぞれ指す。「ＶＴＲ周辺機器」とは、ビデオプリンター、テロップマシン、編集機器その他を指している。



全般的に見ると、まず、保有している機関の数が最も多かったのはＶＴＲである。近年ソフトの多様化とともに普及がめざましいのは周知の事実だが、聴解や発音練習のための教育機器としてこれまで大きな位置を占めてきたカセットテープレコーダーよりも、回答件数が多くなっている。ＶＴＲとテープレコーダーの次には、ワープロ、スライド映写機、ＯＨＰ、パソコンが続く。ＬＤＰは、まだあまり設置されていない。「その他」として記入されていたのは、ビデオやテープのダビング機器、ＣＤ・レコードプレーヤー、電子黒板、などであった。

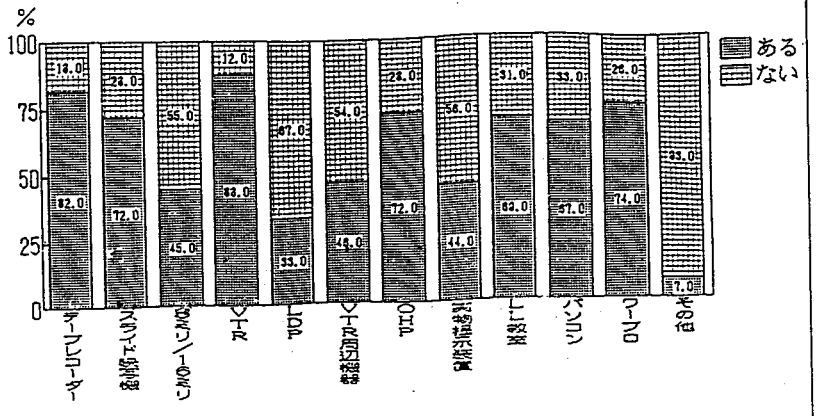
ただし、このグラフ、および次のグラフⅡ－１－２を見る際には、これらはあくまで保有状況、しかも１台でもあればチェックがなされた件数だということに留意されたい。同じように「保有している」とチェックがあっても、たとえばＯＨＰとテープレコーダーでは、保有台数が異なるであろうことは想像に難くない。

グラフⅡ－１－２(a)～(c)は、大学・高専・日本語学校それぞれにおける視聴覚機器の保有状況である。３つのグラフをたてに比べれば、特定の種類の機器についての保有率の違いも観察できる。

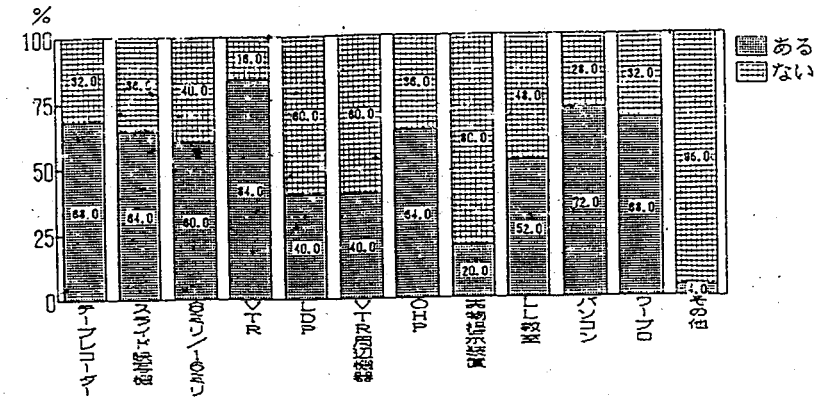
まず、ＶＴＲは３種類の機関のどれをとっても最も高い保有率があることが確認される。その次に高いカセットテープレコーダーは、高専の保有率が少し低いが、大学と日本語学校では80％以上が保有している。これら２つに続いて、ワープロも各種機関を通じて70％前後の保有率がある。

次に、ＬＤＰやＶＴＲ周辺機器、パソコンなどについて見ると、大学や高専に比べ、日本語学校での保有率が低い。実物提示装置も日本語学校では保有率が低いが、この場合、実物提示装置と一口に言ってもＯＨＰより以前からあったようなものも、新式の解像度の高いものも、いろいろな種類があるので、機器としての新旧は一概には言えない。今回の調査では、それを確定する設問にはなっていなかった。

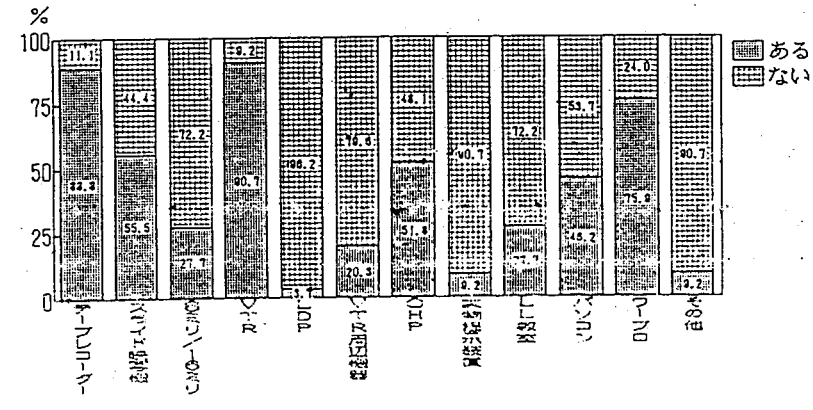
グラフⅡ-1-2(a) 視聴覚機器保有状況（大学）



グラフⅡ-1-2(b) 視聴覚機器保有状況（高専）

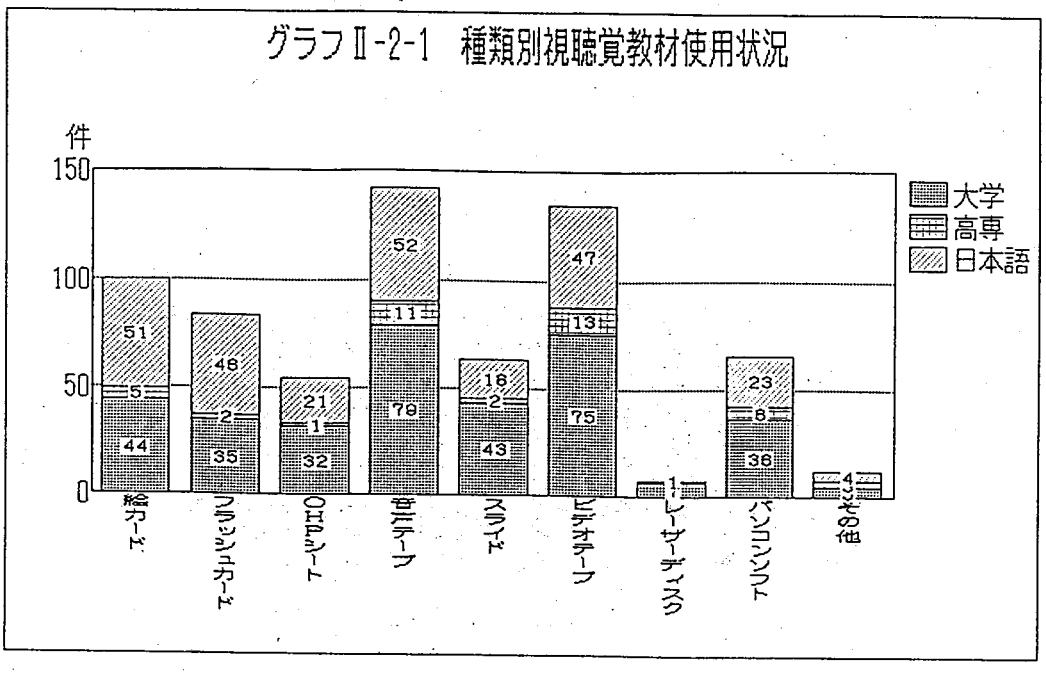


グラフⅡ-1-2(c) 視聴覚機器保有状況（日本語学校）



2．各種視聴覚教材の利用状況・視聴覚機器の活用状況

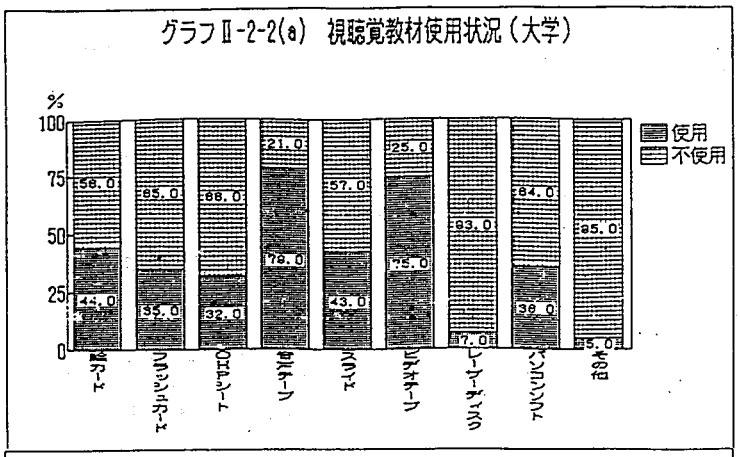
どのような視聴覚教材がどの程度使われているかを、まず見ていく。文字教材以外の使用教材を、複数選択で質問した。選択肢としては、「絵カード」「フラッシュカード」「ＯＨＰシート」「音声テープ」「スライド」「ビデオテープ」「レーザーディスク（ＬＤ）」「パソコンソフト（ＣＡＩソフト・ワープロソフト）」「その他」を挙げた。種類ごとの使用件数をグラフⅡ－２－１に示す。

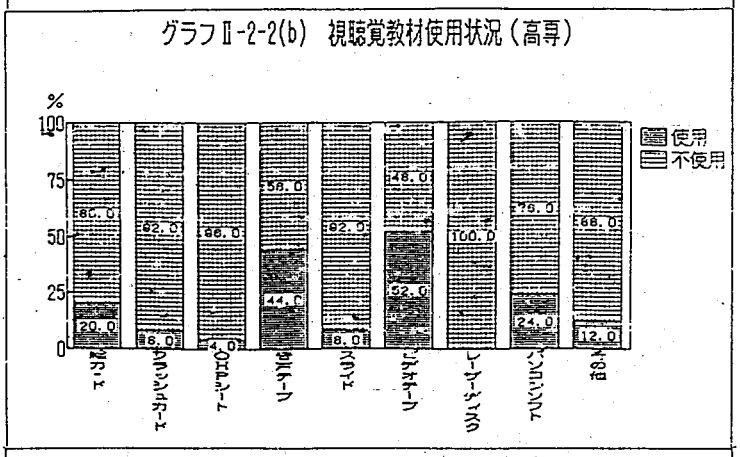


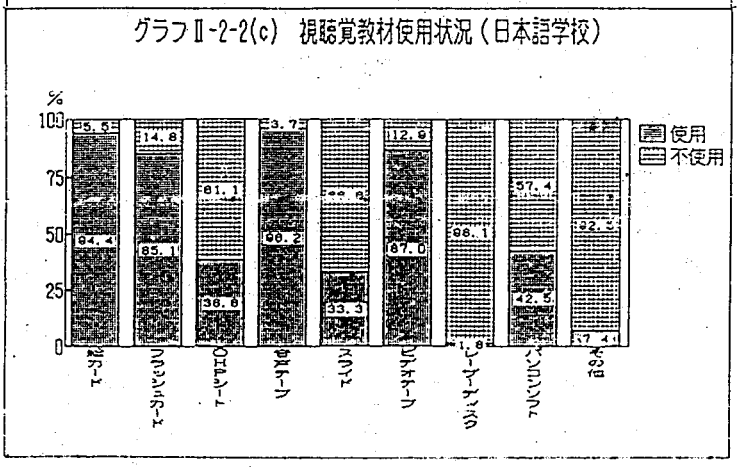
利用の多いのは、音声テープとビデオテープである。特に日本語学校の場合、テープレコーダーの保有件数が48件であったのに、音声テープを使用している機関はそれより多く、52件にのぼった。映写機やＶＴＲと異なり、テープレコーダーなら教授者が個人的に教室に持ち込んで手軽に利用することも可能であろう。

それに続くのが、絵カード、フラッシュカードの類で、視覚教材として非常に重要な位置を占めている。パソコンソフトは、ここでの件数のうち、かなりの部分がプリント、ワークシート作成などのためのワープロソフトの利用ではないかとも想像される。ＬＤの使用が非常に少ないが、まだ機器もあまり普及しておらず、教育用ソフトもない上、録画や編集もできないといった事情を考えれば、無理もないことであろう。なお、「その他」として記入されていたのは、地図・年表などの掛図類、写真、実物、紙芝居などであった。

グラフⅡ－２－２(a)～(c)には、機関種類別に見た各種教材の使用率を示す。







教育機関の種類にかかわらず、やはり音声テープとビデオテープの使用率が高い。それ以外で目につくのは、日本語学校で絵カード・フラッシュカードの使用が非常に多いことである。使用率は音声テープやビデオテープと同程度になっている。絵カードとフラッシュカードに関して３種類の機関を比較すると、三者における初級の割合（グラフＩ－２－２(a)、Ｉ－３－２参照）との相関が読みとれる。すなわち、初級のクラスの多いところではカード教材の使用率が高くなる。

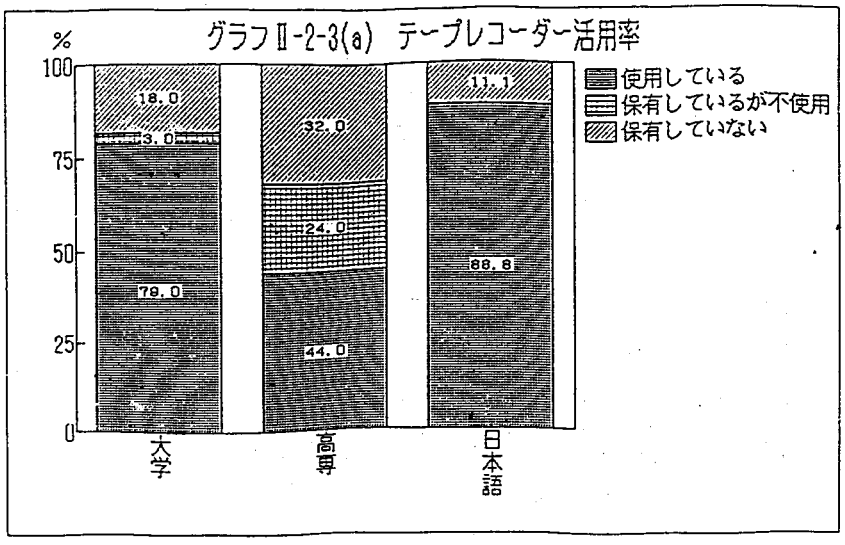
カード類以外の各教材については、大学・高専・日本語学校はほぼ同じパターンを示している。しかし、高専の場合、全体的に視聴覚教材の使用率が低い。

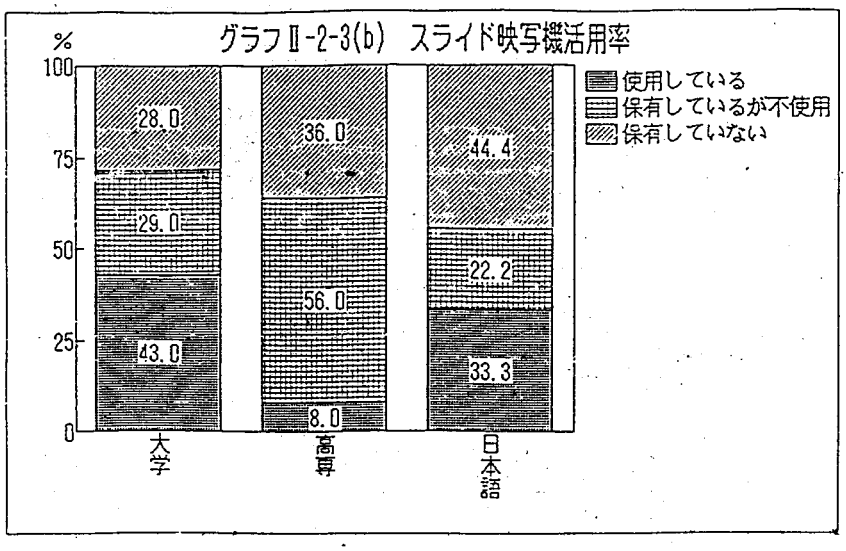
次に、前節で保有率を見た視聴覚機器の幾つかについて、それがどれだけ活用されているかを調べることにする。ある機器を保有していることと、実際に教室で利用することとは、別の問題である。機器はあっても、台数の不足や教室の関係でなかなか思いどおりに使えない場合もあれば、操作の繁雑さやその他の問題点のために使用をひかえている場合もあろう。

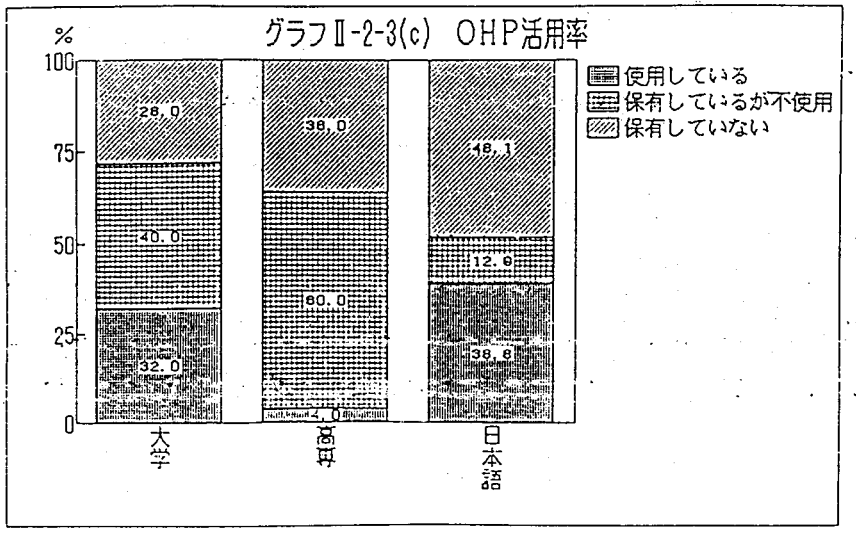
視聴覚機器の活用率は、機器保有に関するデータと視聴覚教材の使用に関するデータから試算することができる。たとえば、「テープレコーダーを保有している」という回答が50件あり、「音声テープを使用している」という回答が25件あったとしたら、テープレコーダーを実際に活用しているのは保有機関の50％、ということになる。ここでは、前節で保有について質問した視聴覚機器のうち、グラフⅡ－２－１で見た視聴覚教材利用のデータと組み合わせることによって活用率が割り出せるテープレコーダー、スライド映写機、ＯＨＰ、ＶＴＲ、ＬＤＰの５種類について、活用状況を示す（グラフⅡ－２－３(a)～(e)）。

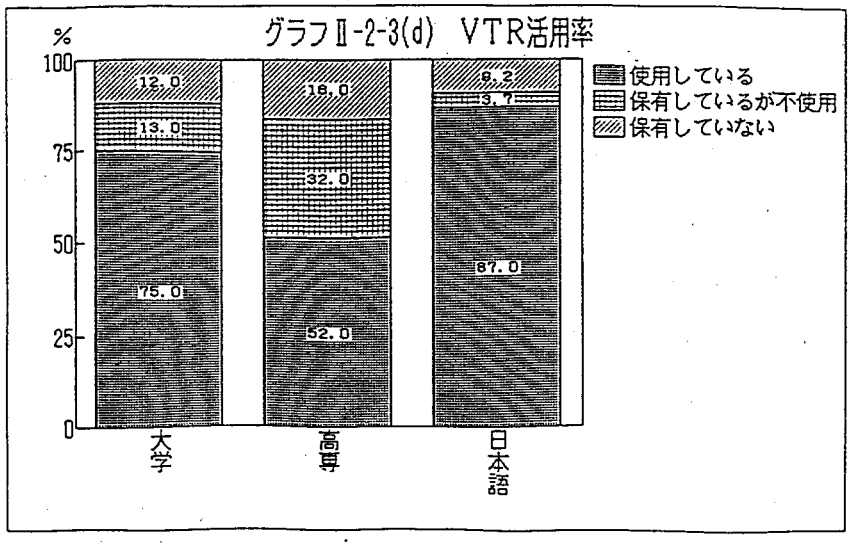
５種の機器について、「実際に使用している」「保有しているが使用していない」「保有していない」の３つのカテゴリーに分け、機関の種類別にパーセンテージで示した。以下で言及する「保有率」とは、「保有しているが不使用」と「使用している」を足したもの、「使用率」は「使用している」の部分を指す。また、「活用率」は、「保有しているが不使用」の部分が小さければ高いということになる。

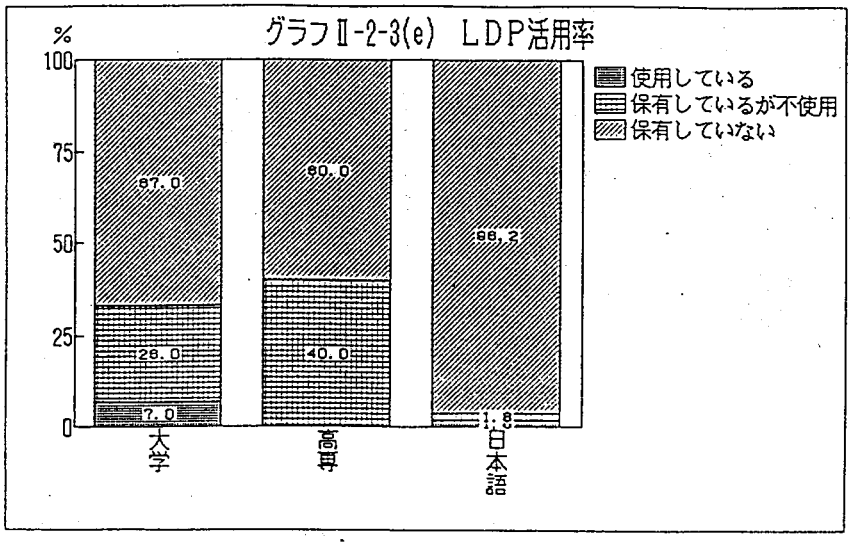
全般的な観察としては、ＶＴＲとテープレコーダーは、いずれも活用率が高い。保有率も高かったが、設置された機器が実際によく使われている。特に、テープレコーダーは持ち運びが容易だという大きな長所がある。ただし、高専では24％（25件中6件）が、テープレコーダーはあるが使っていないと回答している。


グラフⅡ-2-3(a) テープレコーダー活用率
%
100
75
50
25
0
18.0
3.0
79.0
32.0
24.0
44.0
11.1
88.8
使用している
保有しているが不使用
保有していない
大学
高専
日本語


グラフⅡ-2-3(b) スライド映写機活用率
%
100
75
50
25
0
28.0
29.0
43.0
36.0
56.0
8.0
44.4
22.2
33.3
使用している
保有しているが不使用
保有していない
大学
高専
日本語


グラフⅡ-2-3(c) OHP活用率
%
100
75
50
25
0
28.0
40.0
32.0
38.0
60.0
2.0
48.1
12.6
38.6
使用している
保有しているが不使用
保有していない
大学
高専
日本語





一方、スライド映写機とＯＨＰは、あまり活用されていない。両者の活用率が低いのは、使用の際に部屋を暗くするため、学習者が他の資料を同時に見たり、ノートをとったりするのに不便だということも関係しているかもしれない。

ＬＤＰは、保有率がまず低い。そして、活用率も低い。機材の普及やソフトの多様化、およびそれらに伴う利用の増加は、今後の問題であろう。

教育機関の種類別で見ると、設置機材を最大限に利用するということでは、三者の中で日本語学校が一番になっている。高専は、大学・日本語学校と比べて、活用率がいずれの機器に関してもかなり低い。

3．視聴覚教材の準備

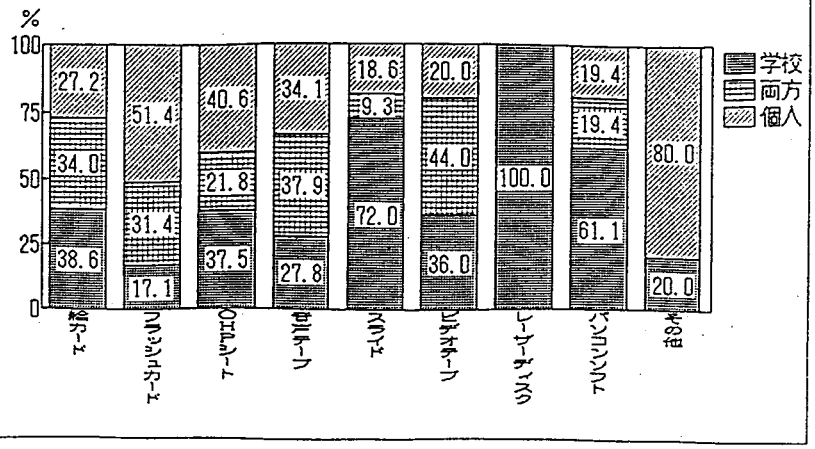
授業で使う教材は、複数のクラスの共用物として学校側が用意する場合もあれば、教授者が個人で工夫して準備する場合もある。前節で使用率を見た各種視聴覚教材について、どのような形で準備がなされるかを、「学校が準備」「個人が準備」のあてはまる方（あるいは両方）にチェックする方式で質問した。集計結果は、以下の表の通りである。表の中で「学校」「個人」とあるのは、「学校が準備」あるいは「個人が準備」のどちらか一方だけにチェックのあった件数である。

	大学			高専			日本語学校			全体		
	学校	個人	両方	学校	個人	両方	学校	個人	両方	学校	個人	両方
絵カード	17	12	15	1	4	0	29	0	22	47	16	37
フラッシュカード	6	18	11	0	2	0	20	8	18	26	28	29
ＯＨＰシート	12	13	7	0	1	0	20	0	1	32	14	8
音声テープ	22	27	30	4	4	3	28	0	24	54	31	57
スライド	31	8	4	2	0	0	18	0	0	51	8	4
ビデオテープ	27	15	33	6	2	5	24	2	21	57	19	59
レーザーディスク	7	0	0	0	0	0	1	0	0	8	0	0
パソコンソフト	22	7	7	6	0	0	18	0	5	46	7	12
その他	1	4	0	0	3	0	2	0	2	3	7	2

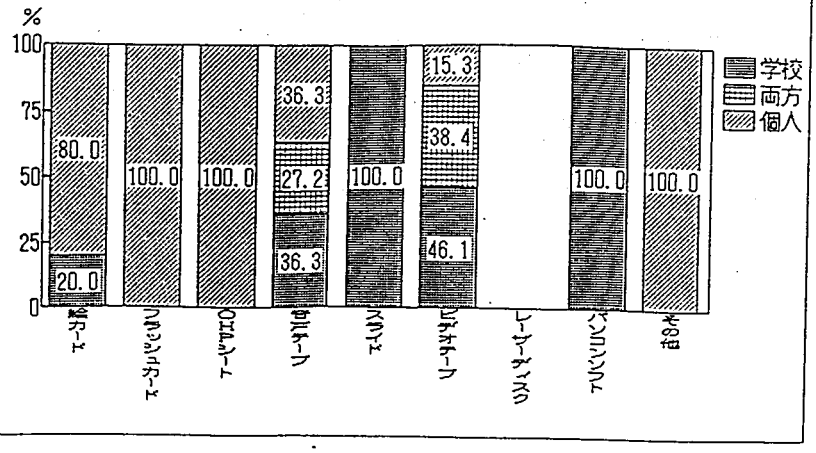
これらを、３種類の機関の比較のために構成比に直したものを、グラフⅡ－３－１(a)～(c)に示す。

スライド、レーザーディスク、パソコンソフトは、学校側が準備する場合が多い。フラッシュカード、音声テープ、ビデオテープは、先生が個人的に用意する場合もよく見られる。特に、音声テープとビデオテープについては、大学・高専・日本語学校の別を問わず、学校と先生個人の両方によって教材の準備がなされていることがわかる。

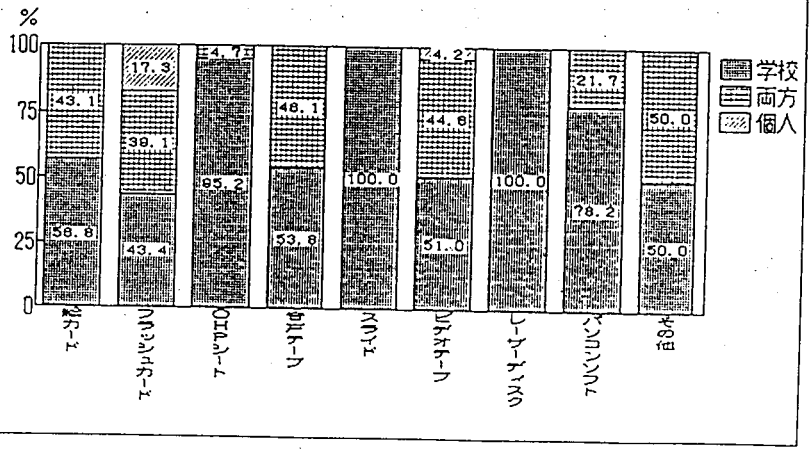
グラフⅡ-3-1(a)　視聴覚教材の準備（大学）



グラフⅡ-3-1(b)　視聴覚教材の準備（高専）



グラフⅡ-3-1(c)　視聴覚教材の準備（日本語学校）



機関の種別では、まず「学校が準備」の部分について３つのグラフを見比べると、どこが多くてどこが少ないといったおおよそのパターンは、ＯＨＰシートの所を除いては、大学と日本語学校が似ている。もっとも、日本語学校は、大学や高専と比較して、学校に教材が準備されている率が全体的に高い。個人が準備するもののみ使用していると回答した機関は、フラッシュカードとビデオテープにわずかに見られる程度である。

日本語学校で、個人も準備に関わっている率が比較的高い教材は、絵カード、フラッシュカード、音声テープ、ビデオテープで、これらは日本語学校で使用率が非常に高い視聴覚教材（グラフⅡ－２－２(c)参照）と一致している。

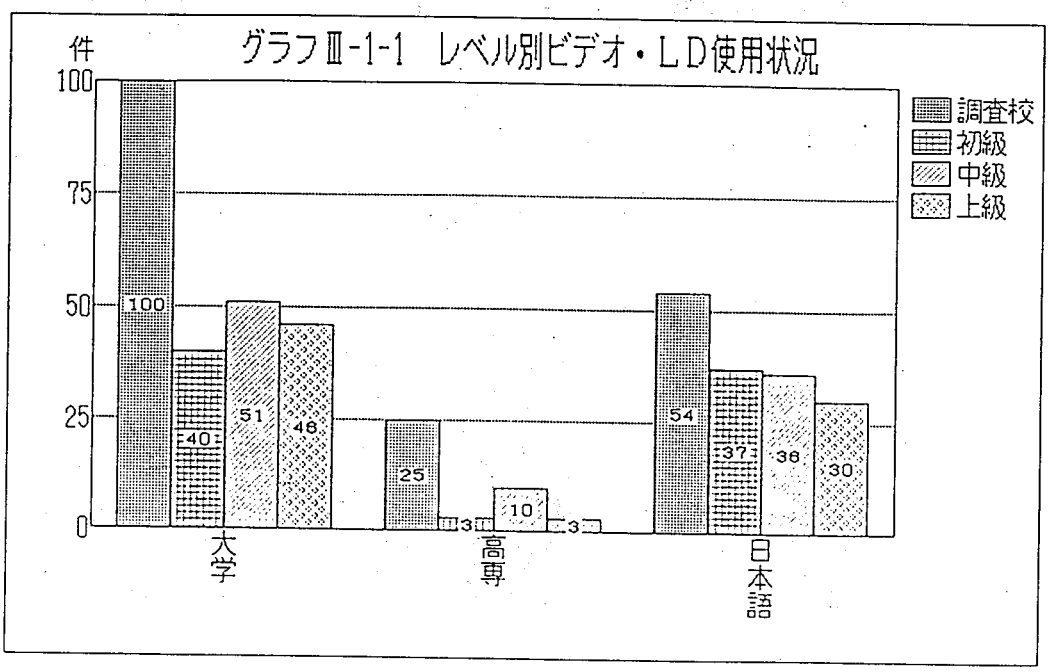
高専は、教材の種類によって、学校と個人のどちらが用意するかという偏りが極端に出ているが、実数表からもわかる通り、記入のあった件数自体が少ないので、大学や日本語学校と並べてパーセンテージで表わすのは必ずしも適切でないことをお断りしておきたい。

Ⅲ．日本語教育におけるビデオ・ＬＤの利用状況

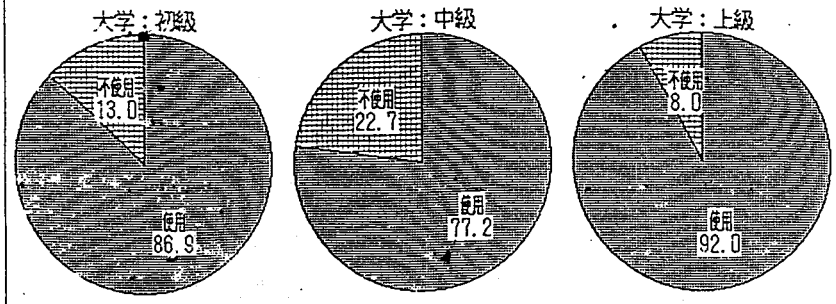
前節では、各種の視聴覚機器や視聴覚教材について利用状況を述べたが、ここでは特にビデオおよびＬＤに焦点をあてた調査の結果を示す。視聴覚教材の利用に関して、ビデオまたはＬＤを使用していると回答した機関135件（大学75件、高専 13件、日本語学校47件）に、さらに使用状況に関する一連の質問をした。それらの回答をもとに、日本語教育の授業においてビデオやＬＤがどれぐらい、またどのように使われているのかを見ていく。ただし、前節で見たようにＬＤの使用は非常に少ないので、ここであげる数字はほとんどビデオに関するものと考えてよいであろう。従って、以下ではビデオ・ＬＤの両方を含めた意味で「ビデオ利用状況」とする。

１．学習者のレベル別に見たビデオ使用状況

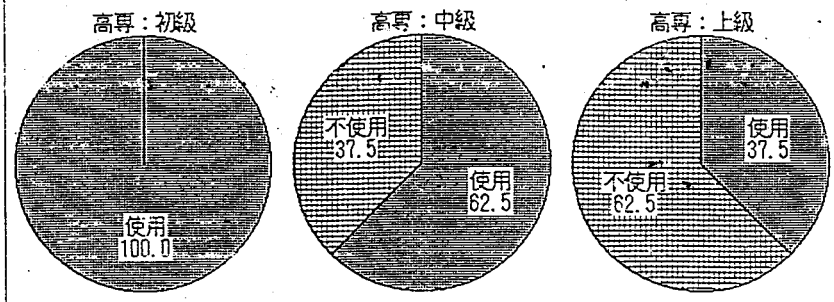
ビデオを使用していると回答した機関には、使用対象としている学習者のレベルを質問した。レベルごとの使用件数を、グラフⅢ－１－１に示す。



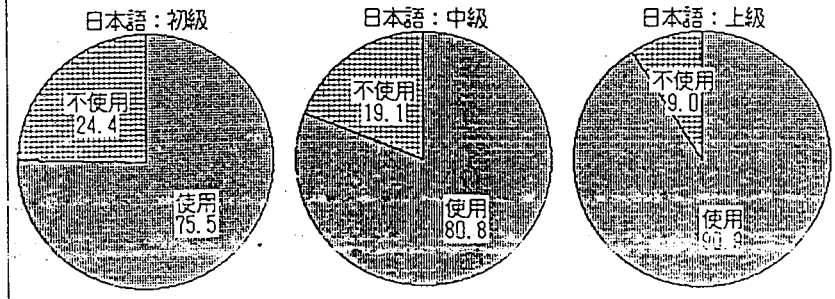
グラフⅢ-1-2(a)　大学　レベル別ビデオ・ＬＤ使用率



グラフⅢ-1-2(b)　高専　レベル別ビデオ・ＬＤ使用率



グラフⅢ-1-2(c)　日本語学校　レベル別ビデオ・ＬＤ使用率



レベル別のビデオ使用率をより明確につかむために、各レベルのクラスを置いている件数で使用件数を割った。すなわち、初級なら初級がある機関の中で、何%がビデオを授業で使っているかという数字を出した。それを、大学・高専・日本語学校についてまとめたのが、グラフⅢ－１－２(a)～(c)である。

大学と日本語学校では、初級・中級・上級の各レベルを通じてよく使われていることが確認できる。日本語学校は、上のレベルへいくほど使用率が高くなる。高専は、回答件数がグラフⅢ－１－１にあるように少ないので、このような円グラフでパーセンテージを表わすのはあまり意味をなさないが、一応レベルごとで比べると、上のレベルへいくほどビデオを使う率が低くなっている。特に上級では、大学と日本語学校が３レベル中最高の使用率を示すのに対し、高専での使用率は50%を大きくきっている。

2．週ごとのビデオ使用時間数

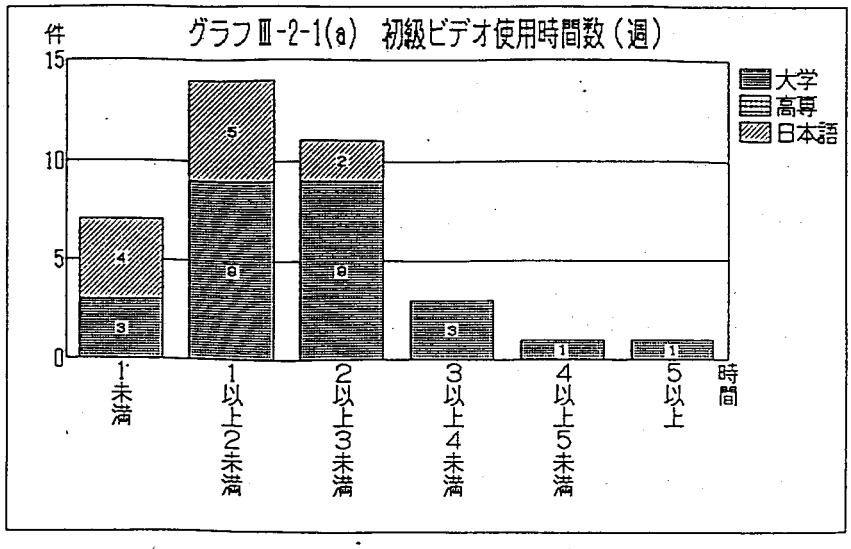
ビデオをどの位の時間数使用しているかということに関して、初級について37件、中級48件、上級41件分のデータが集まった。自由記入であったため、「週に3回」「月に8回」など様々な単位での回答が得られたが、それらを週単位（1ケ月＝4週とした）にそろえて換算し直し、次ページのグラフⅢ－2－1(a)～(c)のようにグラフ化した。「（週に）1時間未満」「1時間以上2時間未満」…「5時間以上」という6つのカテゴリーに分けて、回答件数の実数を各種機関の積み上げ棒の形で出している。

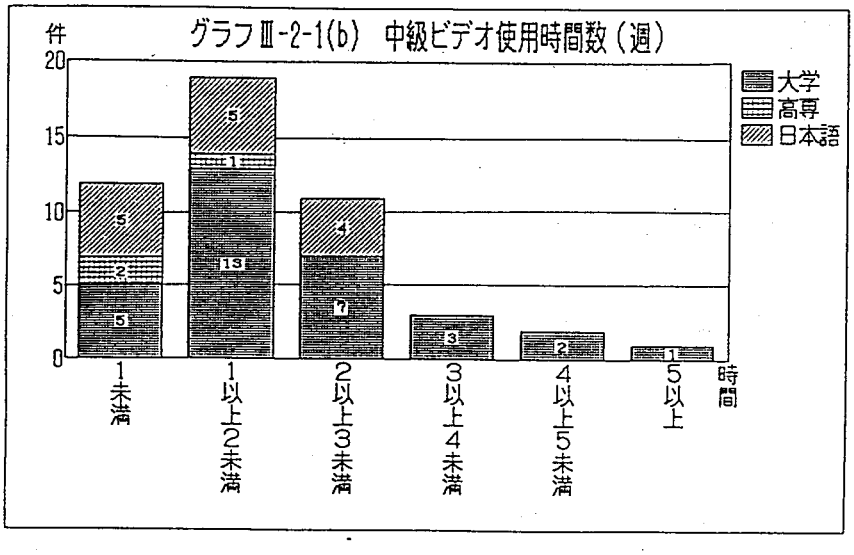
全体を通して見ると、3つのグラフはほぼ同じパターンを示している。どのレベルでも、週に1時間以上2時間未満がピークで、その前後が次に高くなっている。そして、3時間以上4時間未満のところから、目立って件数が少なくなる。

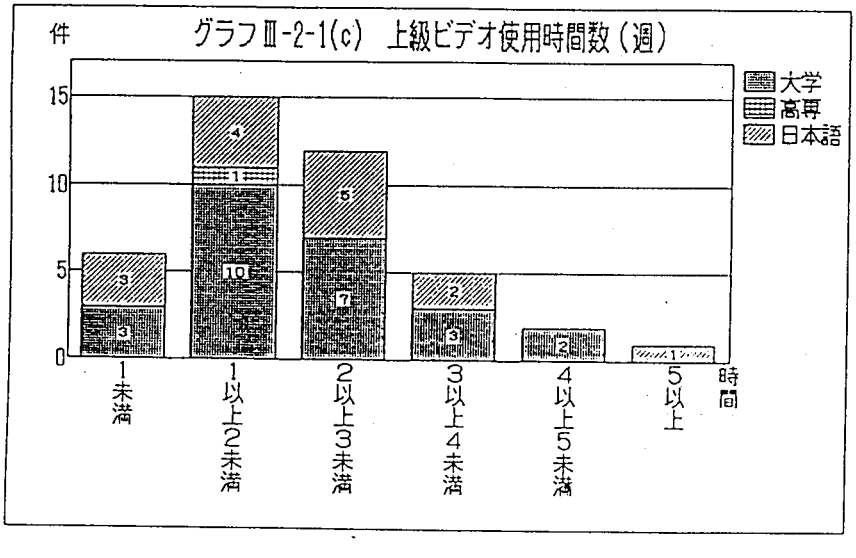
機関の種類別に見ると、大学は、初級から上級までを通じて時間数の多いカテゴリーにも回答が見られるが、日本語学校は初級・中級では多いところでも「2時間以上3時間未満」のカテゴリーまででおさまっている。しかし、上級になると、3時間以上のカテゴリーに入る日本語学校も出てくる。

ビデオの使用時間数については、次のようなコメントも寄せられている。

- もっと使ってほしいと要望があるが、1週1コマの文型学習時間の枠内なので、あまり時間がとれず困っている。（大学）
- 学習者は、もっとビデオの時間を増してほしいようである。（日本語学校、初級、週に2-3回使用）


グラフⅢ-2-1(a) 初級ビデオ使用時間数（週）
件
15
10
5
0
大学
高専
日本語
1未満
1以上2未満
2以上3未満
3以上4未満
4以上5未満
5以上
時間


グラフⅢ-2-1(b) 中級ビデオ使用時間数（週）
件
20
15
10
5
0
大学
高専
日本語
1未満
1以上2未満
2以上3未満
3以上4未満
4以上5未満
5以上
時間


グラフⅢ-2-1(c) 上級ビデオ使用時間数（週）
件
15
10
5
0
大学
高専
日本語
1未満
1以上2未満
2以上3未満
3以上4未満
4以上5未満
5以上
時間

3．レベル別のビデオ使用目的

ビデオをどのような目的、すなわち指導内容に関して用いているか、初・中・上級のレベルごとに質問した。回答形式は、選択肢の複数回答である。選択肢として挙げたのは、「導入」「復習」「聴解」「内容把握練習」「タスク練習」「応用練習のモデル」「ディスカッションの題材」「ロール・プレイングのモデルまたは契機」「語彙教育」「日本事情文化の紹介」「時間調整」「その他」であった。

「その他」の内容としては、「作文・感想文の題材」「スピーチ・コンテストのモデルの提示」「読解教材の補助」「ノートをとる練習（大学の講義などを想定して）」「非言語伝達行動の認知」などの記入があった。

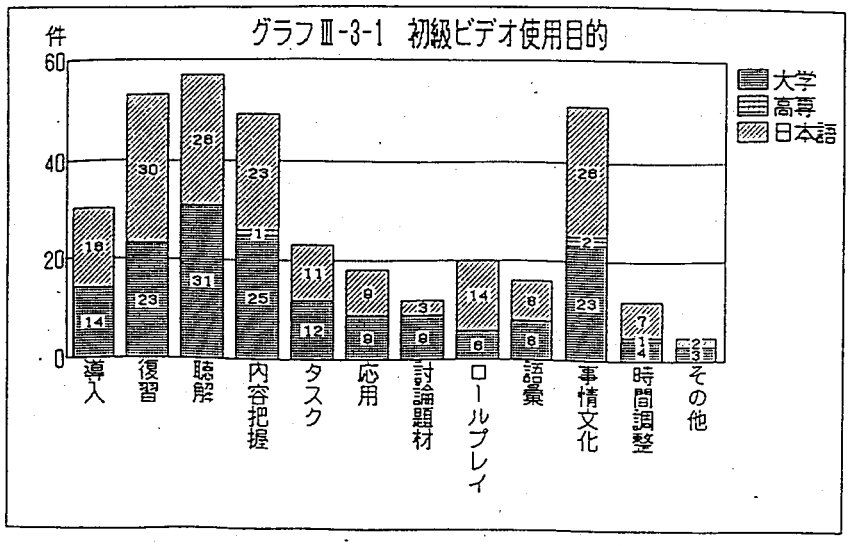
レベル別の使用目的を、グラフⅢ－３－１～３に示す。

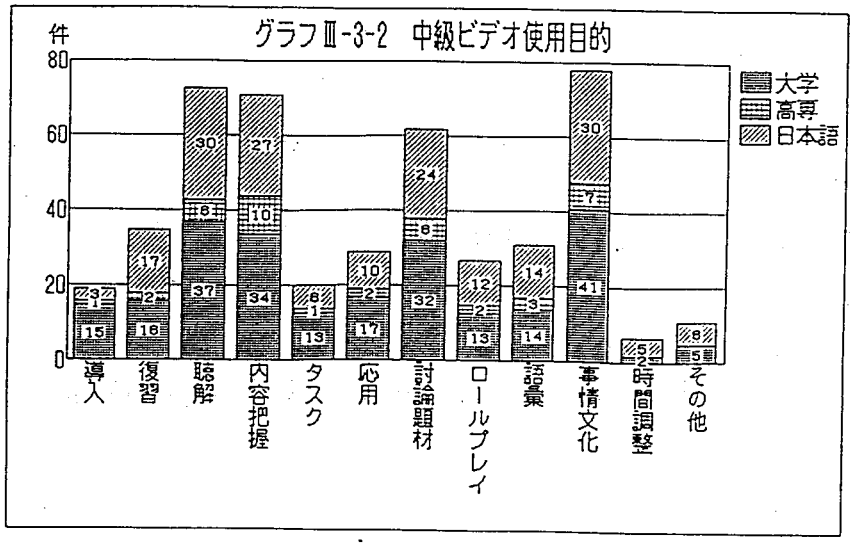
まずグラフⅢ－３－１の初級では、目立って多いのが「聴解」「復習」「内容把握」「事情文化」といったところで、「導入」もある程度高くなっている。それ以外は、項目間であまり違いはない。

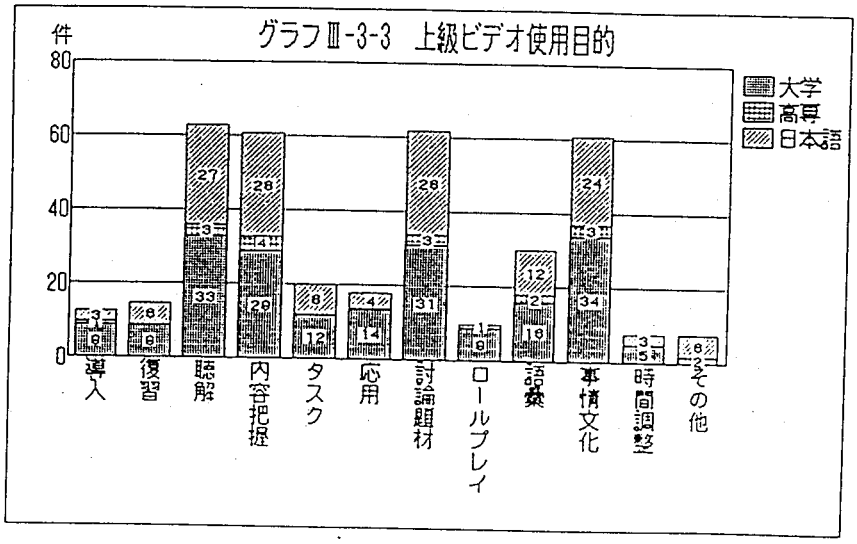
グラフⅢ－３－２の中級では、「聴解」「内容把握」「事情文化」は初級と変わらず高いが、初級に比べて「導入」と「復習」が低くなっている。「導入」「復習」にビデオを使うというのは、新出の文型の紹介や、その確認・定着が主になると考えられる。とすれば、初級でそれらの用途が多く、基本文型をほぼマスターした段階である中級で少なくなっていくのは、自然な流れといえよう。逆に中級になって大きく伸びているのは「討論の題材」としての利用で、「聴解」などに近い件数に達している。

次に、グラフⅢ－３－３で上級について見ると、全体的なパターンは中級とほぼ変わらず、「聴解」「内容把握」「討論の題材」「事情文化」の４つが高い。「復習」は中級に比べ、より低くなり、「ロールプレイ」も減っている。

３つのグラフから、レベルが上がるにつれてのビデオ利用の傾向の変化を見ると、初級では文型などを文脈つきで導入したり定着させたりすることによく使われ、日本語の表現力がついてきた中級以降では、討論など自発的な発話を促すきっかけや題材として用いられる、という志向性の変化がうかがえる。また、「聴解」「内容把握」「日本事情・文化の紹介」の３つは、レベルを問わずビデオの主要な使用目的となっている。

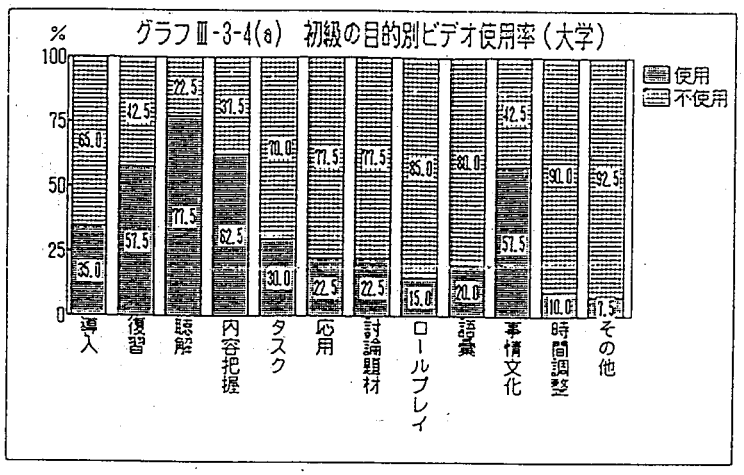

グラフⅢ-3-1 初級ビデオ使用目的
件
60
40
20
0
大学
高専
日本語
導入
復習
聴解
内容把握
タスク
応用
討論題材
ロールプレイ
語彙
事情文化
時間調整
その他

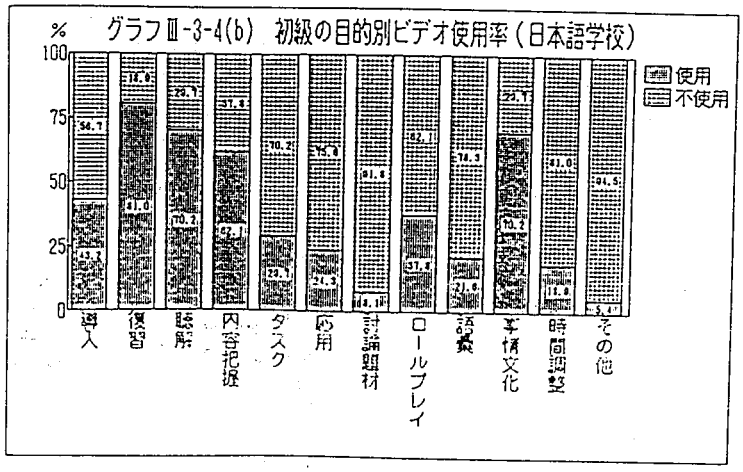

グラフⅢ-3-2 中級ビデオ使用目的
件
80
60
40
20
0
大学
高専
日本語
導入
復習
聴解
内容把握
タスク
応用
討論題材
ロールプレイ
語彙
事情文化
時間調整
その他


グラフⅢ-3-3 上級ビデオ使用目的
件
80
60
40
20
0
大学
高専
日本語
導入
復習
聴解
内容把握
タスク
応用
討論題材
ロールプレイ
語彙
事情文化
時間調整
その他

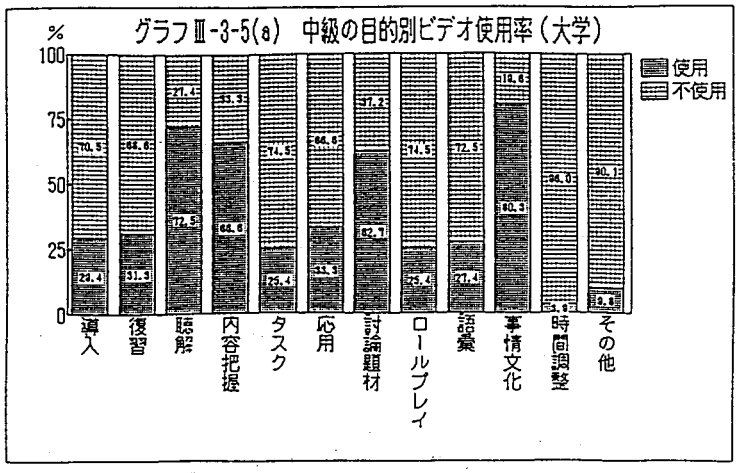
次に、機関の種類ごとの目的別使用率を見る。たとえば大学の初級では、ビデオを「導入」に使っている機関が14件、「復習」が23件、という風にグラフⅢ－３－１から知ることができるが、これらは初級にビデオを使用している大学40件（グラフⅢ－１－１参照）の何％に各々あたるのか。それを、機関種類別・レベル別で算出した。グラフはレベル別にまとめてあり、同レベルの中で各種機関の目的別使用率の差異を比較できるようにしてある。ただし、高専は初級と上級の件数がともに３件と極めて少ないので、中級に関してのみグラフ化した。

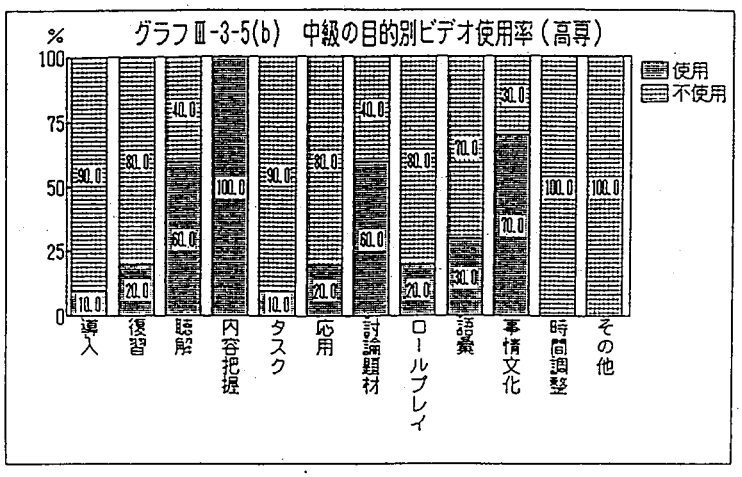
まずグラフⅢ－３－４で、大学と日本語学校の初級目的別使用率を見てみよう。「復習」「聴解」「内容把握」「事情文化」の率が高いことは両者に共通しているが、トップは、大学では初級の全体的傾向と同じく「聴解」であり、日本語学校では「復習」である。それ以外はあまり差がないが、「討論の題材」は大学の方が、「ロールプレイのモデル」は日本語学校の方が、使用率が高い。

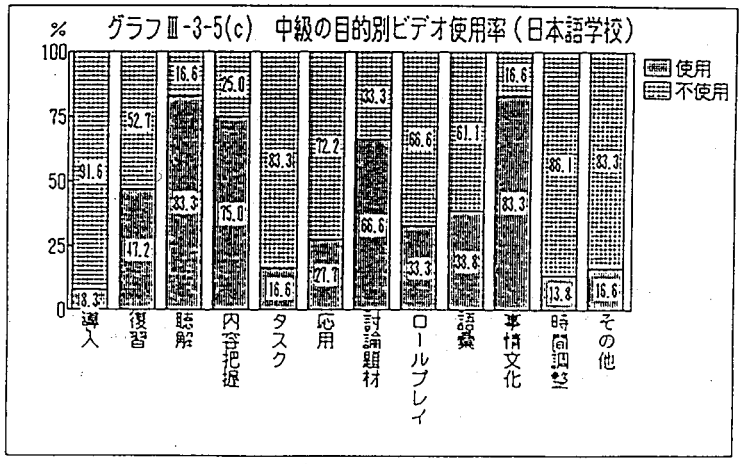




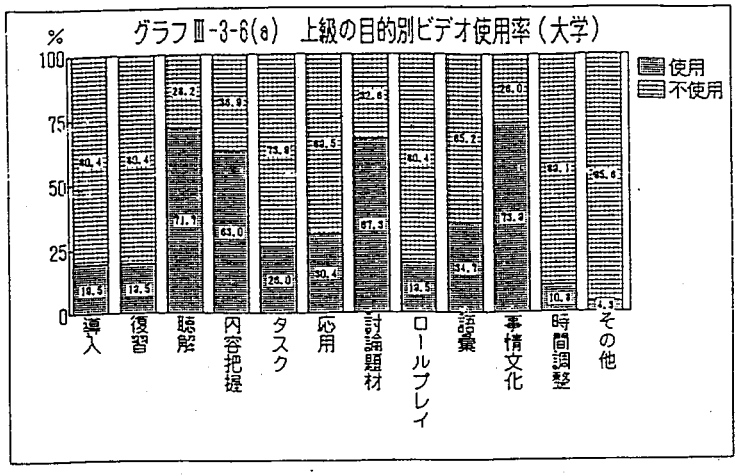
グラフⅢ－３－５の中級で使用率が高いのは、「聴解」「内容把握」「討論の題材」「事情文化」の４つになる。この点は、大学・高専・日本語学校で共通である。それ以外で特に機関の種類によってパターンの違いの目立つようなものはないが、日本語学校で「復習」の率が他に比べて少し高くなっている。

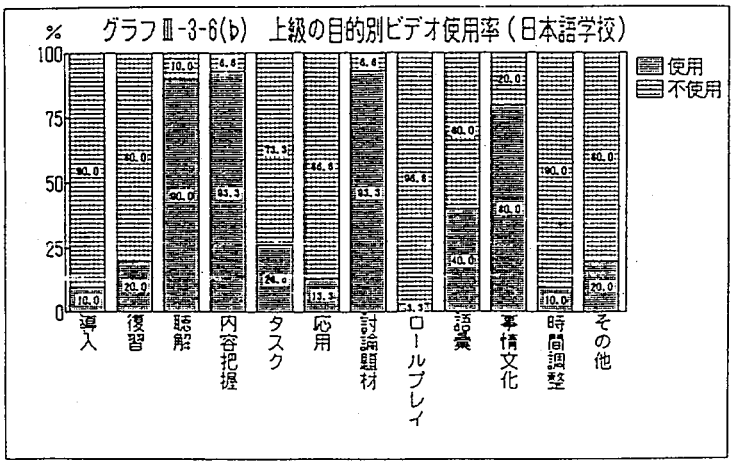






グラフⅢ－３－６の上級の使用率を見ると、大学と日本語学校を比べた場合、どの目的が多くてどれが少ないといった総体的なパターン自体は大差ないが、日本語学校の方が割合の多いものと少ないものの格差が顕著に出ている。





グラフⅢ－３－４からグラフⅢ－３－６までを通して見ると、初級では「復習」「聴解」「内容把握」「事情文化」の４つ、中級以降では「聴解」「内容把握」「討論の題材」「事情文化」の４つを目的とした使用率が高い、という全体的なパターンが、どの種類の機関についても言えることが確認された。日本語学校は、大学や高専に比べ、「復習」へのビデオ利用率が初級・中級に関して高い。

４．ビデオの利用の仕方

数値的なデータを補足する具体的資料を得るために、「（ビデオやＬＤは）どのような時に、どのような方法でお使いですか」という記述式の質問を設けた。寄せられた回答の一部を、レベル別、使用目的別に紹介する。

【レベル別】

＜初級＞

●教科書の会話をビデオ化したもの（自主制作）を導入で使う。（大学）

●幾つかの文法項目を学習した後、復習および内容把握練習にビデオ（国研、ヤンさんシリーズ）を用いる。（大学）

●教科書の内容に関連したテレビ番組を使用。（大学）

●実際に動きのあるものを見せ、文型の理解を深めさせる。（日本語学校）

●初級後半の比較的難しい文型を導入してから、実際に使われる場合を提示し、内容理解と、ロールプレイに用いる。（日本語学校）

●教科書の10課～15課を終えた段階から、導入、聴解、復習用としてタスクシートなどを用意して使用。（日本語学校）

＜中級＞

●応用会話で、生教材（ニュースなど）を見せて、聴解練習をかねて発話練習をし、会話の題材とすることもある。（大学）

●復習として「ヤンさんシリーズ」を、語彙を導入した上で生のニュースやテレビドラマを使用。（大学）

●初級用ビデオを表現練習として使用。中級用ビデオは、聴解、内容把握、ロールプレイのモデルとして。テレビ番組は、教科書の内容に関連したものなどを使用。（大学）

●ニュースの録画と、関連した新聞記事をとりあげ、聞き、読み、話し、書くための教材とした。（大学）

●テレビのＣＭを編集して見せ、広告について考えたり、実際に作成した。（大学）

●少人数のため沈滞した場合のクラスムードの活性化という点で使ったり、また講師の急病でクラスに穴があいた際、ドラマを見せてタスクさせるなど。（日本語学校）

●日常生活の中で敬語、ていねい体、普通体がどのように使われているか。また、内容を追ったり、日本事情文化の理解のため。（日本語学校）

●中・上級では長文読解の導入または発展、作文の動機づけ、討論の題材に使用するが、教師が学習者の意見に関係なく賛成側・反対側に分け、ビデオの内容について討論をさせることもある。また、画面を見せずに音声のみで判断させ、次に画面での確認をする方法も用いている。（日本語学校）

●中・上級では、教材用として作られたものより、一般のニュース、映画などを使用する。作文、新聞教材の時間が多い。（日本語学校）

＜上級＞

●自主製作ビデオを主教材として用いるクラスがある。（大学）

●特に学生の専攻分野の番組があれば、テレビを録画し、見せる。専門用語解説や討論に発展することが多い。（大学）

●全員で（通して、または少しずつ）見てから、質問や問題に答える／要旨をまとめる／自分の意見を言う／全文（や部分）を書き取る、など適宜。宿題や予習、復習のために音声のみを学生がテープに入れて持ち帰り、自宅で聞く。（大学）

●敬語学習の時、適切・不適切の例を編集したもので間違いを知り、使い方、場面に慣れるよう。（大学）

●少人数で中・上級の複式学級のため、新入生の実力の程度を把握するまでの手順として、ビデオ教材を使って指導している。（高専）

●テレビなどの録画を見せ、日本について、また科学、経済などの理解を深め、会話練習などの題材として利用する。（日本語学校）

●15分程度のストーリー物を見せて要約練習をさせる。（日本語学校）

【使用目的別】

＜導入＞

●教材の文型を紹介する時、適当なビデオ場面を使う。（大学）

●授業時間数の関係で、導入しきれない文型・表現の中で重要なもの（待遇表現、受身）を簡単に導入・紹介。（日本語学校）

＜復習＞

●国研ビデオは文型の復習として、特に主教材の面から判断して定着の悪いものだけを抽出して、使用している。（大学）

●各課の終りに使用し、文型の使われ方を確認させたり、発音に注意させる。（日本語学校）

＜聴解＞

●ニュース番組から始めて、ニュース解説→対談→討論へと段階をすすめ、実際に話される日本語に慣れさせるようにする。（中級：大学）

●ニュースを見て、書き取り、質問と答え（口頭）、討論などを行う。（中級：大学）

●上級前期の聴解にラジオ・ニュースを使用。まず話題を導入し、大意把握の為に同じ話題のテレビ・ニュースを1～3回見せ（その際タスクを出す）、その後、各自がＬＬのブースで能力に合わせて聞き取りをする。時間の終りにもう一度ビデオを見せることもある。後期は、より生の状態に近い教材としてテレビの報道番組、ニュース番組、討論会などを使用。5～10分程度の部分を通して見せ（その際タスクを出す）、その後各自がその部分を録音したものを能力に合わせて聞き取りする。（日本語学校）

＜応用＞

●あるテーマにそって、どんな語彙がどんな文型でどのように使われるか具体的に気づかせ、応用させる。（大学）

＜語彙教育＞

●ある範囲の話題によく出る語彙の導入をする。

●上級日本語クラスでは、専門用語取得に大いに役立っている。（大学）

＜ディスカッションの題材＞

●自国との対比などしてディスカッションのもとにする。（日本語学校）

＜日本事情文化の紹介＞

●日本の行事、風俗、習慣をテレビの録画したものを用いたり、能、歌舞伎、茶など文化の紹介に使用している。（大学）

●日本に着いてすぐの頃、生活オリエンテーションとして使う。（大学）

●日本の文化や行事など、時間的に、あるいは時期的に経験することが難しい場合、ビデオで擬似体験をさせる。（大学）

●地方都市のため、目にふれたり、手に入りにくいものについての新知識導入という面で利用する。（高専）

●日本の産業を主体にして、該当する産業に近いビデオを使用する。（高専）

●新・珍商品、社会問題、社会現象の紹介に。（日本語学校）

＜その他＞

●『日本語表現文型中級』の各課の学習項目に関連付けて、聴解・口頭表現・文章表現の練習用に使っている。（大学）

●ことばの聞き取りチェック、ある場面でストップさせての状況説明、ある人物のセリフあるいは次の場面展開の予測などにも使用。Ｑ＆Ａ、練習シートを使いながら、グループでさせることもある（小グループにわけて）。宿題として、会話の再現、感想、意見など書かせることもある。主に日本史の読み教材の補助として。（大学）

●年間スケジュールに合わせ、所定の教材を使用しているが、月一回位、「コントロールされない日本語の聴解、多聴（多読に対しての）、日本文化理解」を織り込んだ意味で、ドキュメンタリーや教養番組のビデオを見せています。（大学）

●事の内容を理解させるために実際の放映番組を見せる。作文の共通テーマとしても使用。１コマ100分授業の中で必要な部分を必要な時に見せる。見せっぱなしで、くり返して同じ所を見せることはない。学生が見たいと希望すれば貸し出す。（大学）

●ニュース解説、天気図の見方、地域の紹介等、日常生活に必要なことや理解を要すること等に適時利用している。またＮＨＫの「外国人による日本語弁論大会」等は長期の休日をあて、日本語の向上をめざしている。（高専）

●発音練習。（大学）

●入学時、夏休みの直前・直後など、親密さを増すため、共通の話題を必要とする時などに使用。（大学）

●留学生自習室に教材、機材を用意して、授業時間外に自由に使用させている。（高専）

●留学生が余暇をみて、楽しみながら日本語を覚えているようです。（テープを自分で、町の店から借りてくる。）（高専）

●大学の講義を聞く練習として、市民大学講座のビデオを見せる。（日本語学校）

●場面の中でどのような表情、所作を伴っているかを見せる。情報を聞き取る技術を教える時に、全体の話の構成、強調の仕方、息つぎなどを見る。（日本語学校）

●ビデオを見せて、感想文を書かせる。（日本語学校）

＜使う際の手順について＞

●短いものを時間の最初に見せ、その後常用語彙の聞き取り、解説を行い、最後にその中に出てくる日本の風俗・習慣他について必要に応じて説明を加える。（大学）

●日本事情の時間に日本地理のビデオを見せています。見る前に簡単な導入をして、部分ごとに聴きとるべきところを示した問題を出してから見せ、答えあわせをし、最後に全体を通して見せます。内容のポイントを記述させたり、学生の国について問う問題を宿題にします。（大学）

●語彙や文型を導入してビデオを見せる、あるいはその逆。聴解・内容確認を口頭または筆記で行う。時にはあらかじめタスクを課す。あるいは情報収集。場面ごとにロールプレイ、あるいは画像と共に再演させる。まとめとしてディスカッション、作文、ショートスピーチなどを行う。（大学）

●「会話」の時間に使う。まず見せる→内容について簡単に質疑応答→プリントで内容把握→日本事情説明、文型・語彙の練習→内容について質疑応答→再度見せる→応用練習。（大学）

5．使用しているビデオ教材

授業でどのようなビデオ教材が利用されているかを調査するため、以下のものを複数回答の選択肢として挙げた。

『日本語教育映画 基礎編』　（国立国語研究所）

『日本語教育映像教材 中級編』　（国立国語研究所）

『ヤンさんと日本の人々』　（国際交流基金）

『生活ガイドビデオ』　（海外技術者研修協会）

『VIDEO JAPANESE』　（新宿日本語学校）

『ビデオ講座日本語』　（東京書籍）

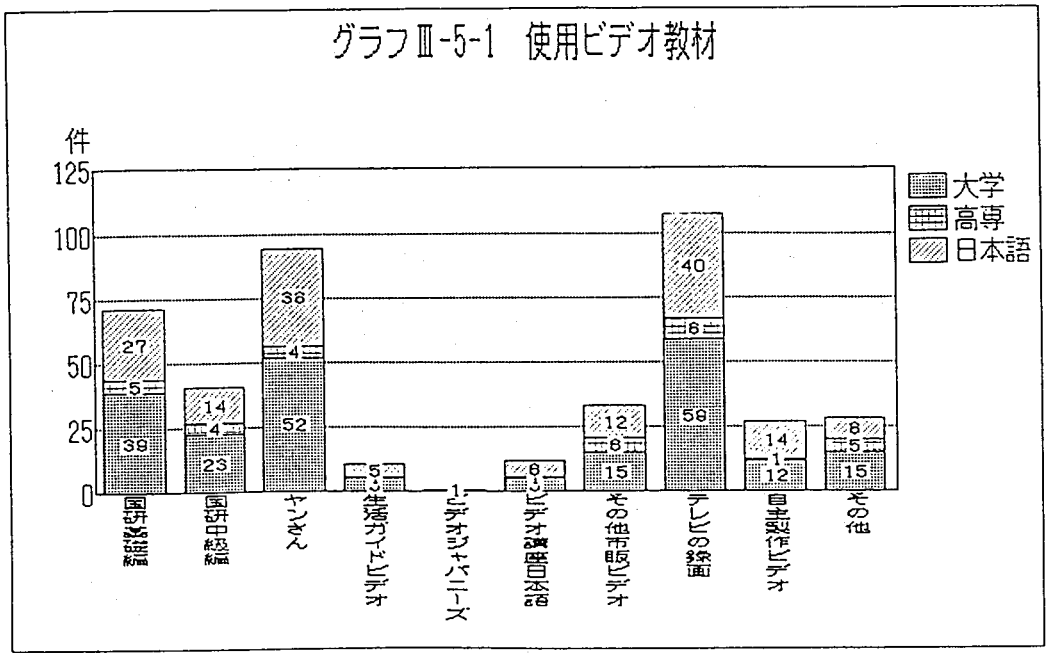
その他市販ビデオ教材

テレビの録画

自主製作ビデオ

その他

集計結果は、グラフⅢ－５－１の通りである。



最も使用が多いのはテレビの録画で、次が市販ビデオ教材の『ヤンさんと日本の人々』『日本語教育映画基礎編』である。これら３つは、特に大学と日本語学校で使用が多い。また、自主製作ビデオを使用している機関は、27件あった。

【『ヤンさんと日本の人々』】

市販ビデオ教材としては最も利用の多い『ヤンさんと日本の人々』については、以下のような意見が寄せられた。

- 音声スピードが少々速すぎるため、ききとりにくいとのことだが、ヤンさんの人物（性格）設定がおもしろく、生活習慣もわかり、興味を示している。（大学）
- 学生に人気がある。全体を通してのストーリー性と主人公のキャラクターが初級文型教材にありがちな不自然さ、退屈さを解消している。（日本語学校）
- かた苦しい、まじめなものはビデオの持つリアリティをなぜか消してしまいます。その点、「ヤンさんと日本の人々」の持つ雰囲気は、学生の中に自然と伝わっていくものがあって、学生もリラックスして言葉を聞き又発言でき、効果をあげられます。関連補助教材も整っていて使いやすいと思いますが、映像を伴ったものはどうしても早く古くなってしまうのが残念です。（大学）
- 様々な目的で利用でき学習効果があげやすいが、全体的には教材の種類が少なく、残念である。（大学）
- 「日本語初歩」と「ヤンさん」のスポットと学習項目を関連させて見せるように準備しています。（日本語学校）
- 第一話から全話を学習するようにしている。この場合、「初級の初級」の学習者にとっては語彙等が多すぎて詳細にすることは困難であるため、既習の文型及び既習の語彙それにヤンさんでの新出語彙（最重要と思われるものだけ）を使用して、場面の要約練習（口頭及び作文）を行っている。（大学）
- 会話のスピードが全体的に速過ぎる。又調子良すぎ悪ノリしすぎて最初は良いが２度３度と使う気になれない。登場する日本人、家庭もリアリティがなく、現状を知らない学習者に誤ったイメージを与えると思う。（日本語学校）
- ストーリーがあっておもしろいと思われるが、ヤンさんの発音の不明瞭さ、各話での文法の未整理から、使用が限定されると思われる。（日本語学校）

【『日本語教育映画基礎編』『日本語教育映像教材中級編』】

『ヤンさん』に続くのが、『日本語教育映画基礎編』、そしてその次が『日本語教育映像教材中級編』である。前者は、文型の導入・復習、後者は発話機能を各々テーマとしている。両者については、次のようなコメントがあった。

＜基礎編＞

●全ての部分は使用しないが、ノンバーバル以外にも、文型などの使用場面が具体的に理解できる。（大学）

●国研（基礎編）は「お勉強」の為、「ヤンさん」は楽しむ為のよう。（日本語学校）

●コミュニケーション・シラバスという最近の傾向もよいが、まず、文型を中心とする「日本語教育映画初級」の新作が作られることを期待する。（日本語学校）

●「基礎編」は作り変えられないだろうか。見ていて暗いし、楽しくない。優秀な俳優を使って楽しく自然なビデオ教材を作ってほしい。（大学）

●文法項目については整理されており、クラスでの使用も多いが、画面が暗く、おもしろ味にかけ、新鮮さに欠ける。（日本語学校）

●会話の不自然さ、限られた文型によって作られたわざとらしさ、人物の服装などの古さが不評である。画質も生撮りでない点に不満がある。（日本語学校）

＜中級編＞

●基礎編に比べて自然な日本語になっていると思うが、大学生（学部）がふれる生活場面ではないので、たとえば「敬語の練習」をしようなどと思うと丁寧すぎて使いにくい。（大学）

●復習に使うのによさそうです。（高専）

●ユニット２のセグメント９は、語彙・場面的に限られた範囲の人にしかあまり役立たない。セリフだけでなく、その内容を画面化するともっと分りやすい。（日本語学校）

【その他の市販ビデオ教材、など】

「その他市販ビデオ」としては、『日本語（JAPANESE FOR BUSY PEOPLE)』（アスク講談社）、『こんなとき日本語で』『美しく豊かな言葉をめざして』（ともに日本テレビ文化事業団）、『日本－その姿と心－』（ビーアンドシーアイ）、『JAPAN TODAY』『日本語へのいざない』（ともにインターコミュニケーション）『日本の地理』『日本の歴史シリーズ』（ともに学習研究社）などがあげられていた。

「その他」には、落語や日本の伝統芸能のビデオ、映画などの市販ビデオなどが含まれている。また、高専からの回答には、企業の会社紹介ビデオ（技術面で興味のあるもの）もあった。

【テレビの録画】

次に、機関種類別に、使用の多いビデオ教材を挙げる。

＜大学＞　1.テレビの録画（59件）
　　2.『ヤンさんと日本の人々』（52件）
　　3.『日本語教育映画基礎編』（39件）
＜高専＞　1.テレビの録画（8件）
　　2.その他市販ビデオ（6件）
＜日本語学校＞　1.テレビの録画（40件）
　　2.『ヤンさんと日本の人々』（38件）
　　3.『日本語教育映画基礎編』（27件）

いずれをとっても、使用の最も多いのはテレビの録画である。テレビ番組を教材化することについては、次のようなコメントがあった。

- 初級の段階では教材用のビデオでも興味を持つが、中・上級では一般用の方が反応が良い。（日本語学校）
- 学生のレベルか興味に合ったビデオ教材がないことから、テレビ番組を編集したりしているが、これには時間がかかりすぎる。もっと色々な視点からのリストが多量に作られるとよいと思う。（大学）
- 既存のものは初級や中級対象のものが多いので、どちらかというと、テレビの番組を録画して、その一部を使用するようにしている。当大学は上級程度の学生が多いので、彼らが関心ある分野のドキュメンタリーなどを見せるようにしている。（大学）
- 中上級用には、生番組を録画し、スクリプト、タスクシート、ディクテーション用シートなど、自主作成し、使用するため非常に時間を要する。しかし学生の評判は大変よく、さらに今後は、練習プリント付のビデオ教材が多数作製されることを期待する。（大学）
- 使用の理由：生教材の場合は、自然な日本語にふれさせるため。（大学）

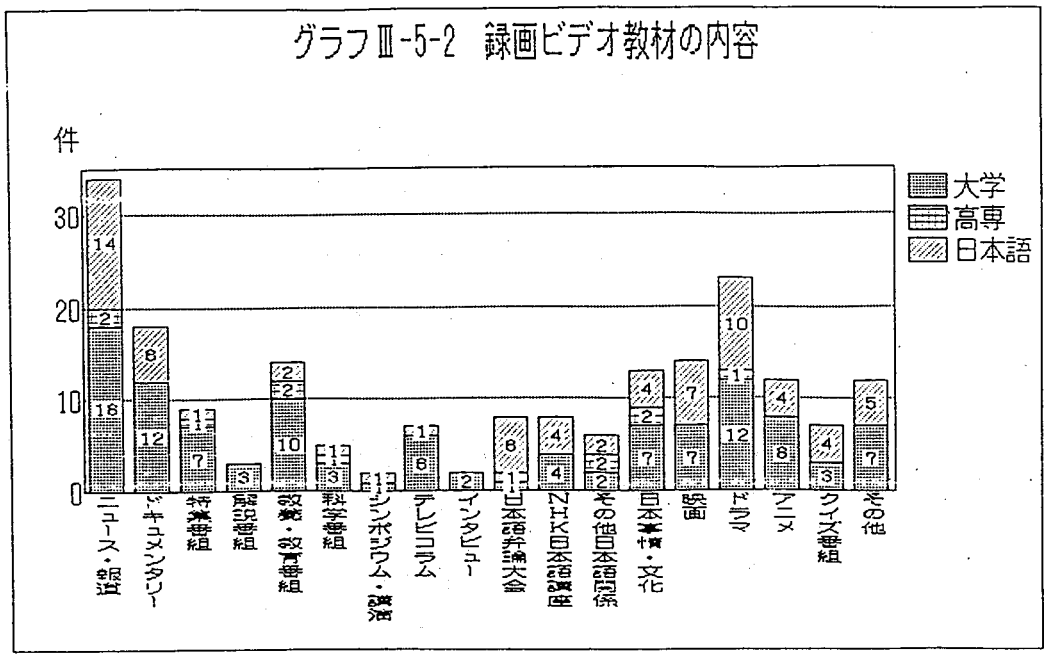
●テレビを録画したものについては、内容はおもしろいが語彙量が多すぎるとの指摘も多い。（大学）

●生の番組を少しでも理解できたことに喜びを見出しているようです。（大学）

●ニュース、ドキュメンタリー、ドラマいずれも好評である。（大学）

●生の番組を見せることで、教材に使われている表現、音調、スピードとの違いがわかる。日本の実情とか日本人の傾向などがわかって興味を覚えることが多い。（日本語学校）

ひとくちに録画といっても、様々な番組がある。そこで、内容についての回答を集計して、グラフⅢ－５－２に示す。



目立って使用の多いのは、ニュースである。前節のビデオの利用の仕方の中にも、ニュースを使った授業の例が幾つかあった。

●身近な話題のニュースをとりあげるので興味をもつ学生が多い。（大学）

●大学での講義、ゼミ、又将来の研究に備えた、あらゆる分野における基礎的な知識や教養常識など、日本語で運用していけるようになることを目標としているので、日本語のテキストで扱わなかった内容、最新のニュースなどのテレビ番組を録画したＶＴＲを使い、問題提起、語彙教育、内容理解、ディスカッション、作文などあらゆる学習に利用している。（大学）

●以前は上級聴解教材としてラジオニュースのみを用いていたが、その時よりも反応がビビッドになっているようだ。また、図やフリップが多用されているとわかりやすいと感じる学習者が多い。（日本語学校）

ニュースに次いで多いのは、ドラマ、そして映画、アニメなどである。

●ドラマなどでは一般会話に応用しやすく、語彙句などが定着しやすい。（日本語学校）
●じっくり見入り、「ハチ公物語」は涙を流して見ていた。ビデオを見て覚えた言葉は後々まで強く印象に残っている。（日本語学校）
●「サザエさん」などは初めは「たかがマンガ」という態度だが、次第に「されどマンガ」になって、それぞれのテーマに一応は従って追っている。（日本語学校）

教養番組やテレビコラム、解説番組、講演などは、ある程度まとまった、かたい内容の話を聞いて、理解する練習に使われるということである。大学の講義を聞いてノートをとる練習にも役立つ。科学番組も含めて、学習者の専門の興味に合えば、二重の効用となる。この種のものは、積み上げ棒の中の内訳で見ると、大学で使用が多くなっている。

日本事情・文化を紹介する番組も、旅行番組などを含めて数多く放送されているが、実際に行って見せられない事物の説明に効果的であろう。

●学習者が旅行好きなので、「日本の旅」関係のものをそろえるよう努めている。飛騨高山は好評であった。土木の学生は山車に興味を示した。（高専）

【自作ビデオ教材】

27件あった自主制作ビデオについては、次のような意見があった。

●上級自主制作ビデオにおいては、教材に対する学生の集中力を喚起できる。出演者が身近な教官であり、又、日本語教師がビデオ及び補助教材の作成者であるため、ビデオ及び教材を完全に使いこなすことができる。（大学）
●日本語研修生（予備教育対象者）の来日直後に主として生活ガイダンスのため自主制作ビデオを使い、その後、学習がある程度進んだ段階で、目的に応じ、自主制作、市販ビデオを使用している。（大学）

●上級レベルの自主制作ビデオ（専門教官の講義）については、聴解の訓練という点では好評であっても、内容が全ての学生にとって興味あるものではないため、好評・不評がはっきりわかれている。（大学）

●財団で制作の「日本の生活と習慣」というビデオは、生活指導を兼ねた授業の時に日本事情紹介として見せる。テキストも配付。（日本語学校）

●当機関作成のビデオには文型導入ビデオと会話ビデオがあり、前者は通常授業の導入時に、後者は復習の時間に用いている。（日本語学校）

●「あいさつコース」は当研修所で開発した名刺交換、訪問、招待等の際の待遇表現習得の為のテキストであるが、このコースのダイアログの導入・復習の為に、そのダイアログのビデオを使用。（日本語学校）

6．ビデオの補助教材

授業でビデオを利用するにしても、その補助として学習効果を高めるような教材・教具が必要である。ビデオとともにどのような関連教材が利用されているか、市販品と自作のもの（先生個人によって、あるいはその機関で作られたもの）とに分けて、記述回答形式で調査した。

【市販の補助教材】

市販の補助教材は、大きく２つに分けられる。ひとつは、『日本語教育映画基礎編』や『ヤンさんと日本の人々』など、市販のビデオ教材に関連して製作された各種補助教材（シナリオ、マニュアル、れんしゅうちょうの類など）である。これを、付属教材と呼ぶことにする。そしてもうひとつは、特定のビデオの付属製品ではない市販教材であって、授業でビデオと組み合わせて用いられているものである。

まず前者の付属教材について、教材の種類別に利用状況を見てみよう。補助教材の回答欄に記入のあった51件（大学25件、高専3件、日本語学校23件）のうち、10件が、何らかの市販ビデオ教材のドリル類（れんしゅうちょう、ワークシートなど）を回答した。シナリオ、指導用テキストは各６件であった。また、聴覚面の補強としては音声テープがあるが、こちらは10件の回答があった。ただし、10件の中には、ビデオ教材の音声そのものを入れたテープを使用している場合と、カセットブックや朗読ライブラリーのような独立したテープ教材をビデオと併用している場合の両方が含まれている。

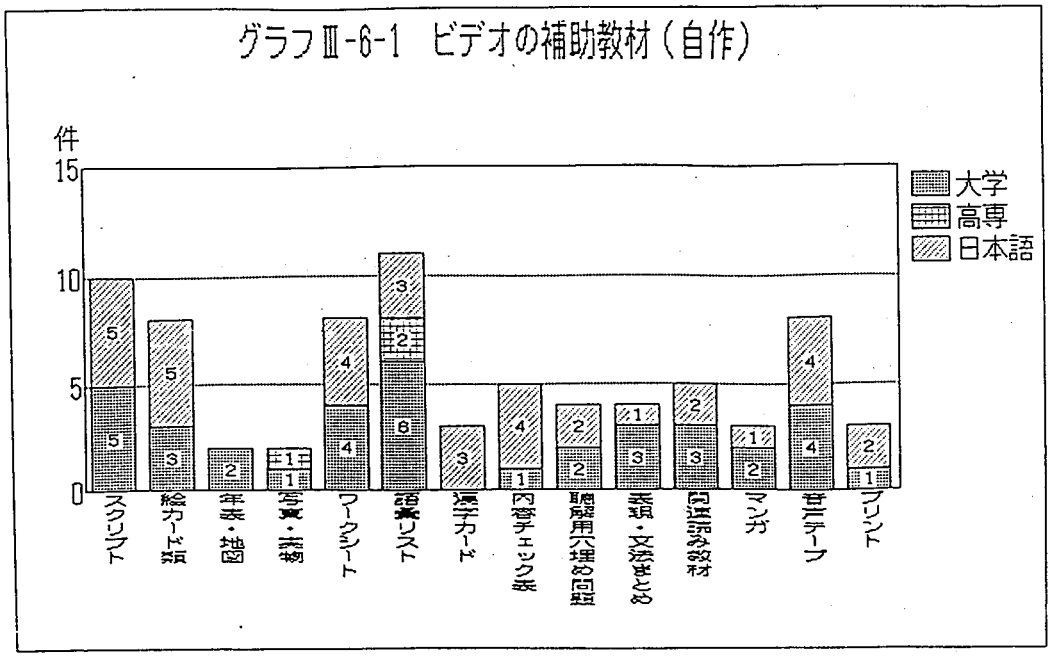
グラフⅢ－5.－１で見たように、『ヤンさんと日本の人々』は94件、『日本語教育映画基礎編』は71件の使用機関がある。しかし、それにもかかわらず、それらの付属教材の利用件数はごくわずかである。市販ビデオ教材は使われていても、付属教材の利用率は、極めて低いということになる。

後者の部類に入る市販補助教材としては、様々なものがビデオと組み合わせて用いられている。カード、パネル、スライドのような絵教材が10件、テキストをはじめとする文字教材が19件あった。その他で、視覚にうったえるものとしては、地図や模型、かるたなどがあった。参考資料的なものには、統計要覧や基本語用例辞典・副詞用例辞典などの辞書類があげられていた。

【自作の補助教材】

次に、自作の補助教材を見てみる。授業で使うビデオが市販品ならば、何らかの付属教材が存在する可能性は高い。しかし、その種類が少なかったり、学習者に適当でなかったりする場合には、教授者または教育機関がそれぞれのニーズに合ったものを用意しなければならなくなる。また、テレビの録画や自作ビデオを利用する場合には、補助教材はすべて教授者側の自作ということになる。

そういった自作教材について、回答を教材の種類別に集計し、グラフ化した。



これで見ると、「語彙リスト」「スクリプト」がまず多く、「絵カード類」「ワークシート」「音声テープ」がそれに続く。「ワークシート」は、特に内容が明記されていなかったものの総称としてまとめてあるが、これに「内容チェック表」「聴解用穴埋め問題」を一緒にすると、数字はさらに伸びる。

Ⅳ．ビデオに関する意見等

今回のアンケートでは、集計結果をグラフで示したような選択肢式の設問の他に、意見・感想を自由に述べる記述形式の質問も幾つか設けた。以下に、それらの内容を項目ごとにまとめ、代表的な意見を挙げる。

1．学習者の反応

ビデオやＬＤを授業で使用した場合に学習者が示す反応について調査した。特にレベル別で質問したわけではないので、全般的に見た回答ということになる。

まず、最も顕著な傾向として、学習者はビデオの利用を歓迎し、関心を示すということがあげられる。「反応は良好、楽しんでいる」という趣旨の回答が45件（大学26件、高専2件、日本語学校17件）、さらに積極的に「興味・（学習への）意欲を示す」というものは51件（大学27件、高専5件、日本語学校19件）にのぼり、機関の種類別で見ても、ほとんどかたよりがない。

- ●通常の授業よりはるかに生き生きとしているようだし、各自それぞれの関心を持つようである。（大学）
- ●興味を持って見ていて、分からない時は即、質問するので、時々観せて効果をあげていると思う。（高専）
- ●興味を持って、新しい語彙などをふやすことができ、ディスカッション、小論文なども前むきにとりくんでいる。（日本語学校）
- ●彼らの日常生活の中でぶつかったことばを軸にして授業をするので、彼ら自身でことばの採集をおこたりなくするようになってきた（メモ帖の作成など）（大学）

関心を示す理由の一つと考えられるであろうが、「ビデオの時間がよい気分転換になっている」（全体で11件）、「文字教材とはまた違った目新しさを感じているようだ」（9件）という回答もあった。

- ●ＬＬの授業において不定期にビデオを使用しているが、学習者にとっては一

種の息抜きの時間になっているようだ（普段の授業がかなり緊張を要するものになっているので、それもよいと思っている）。（大学）

●講義・説明的な授業に比べ、気楽な圧迫感のない授業の感じを持つようである。（高専）

●クラス内の口頭練習や、試験などの日常の勉強をはなれて、見る映像は新鮮で喜んでいるようです。（日本語学校）

視聴覚（特にビデオ）による学習の際、どのようなものに興味を示すかということでは、「日本事情・文化」（10件）、「教室の中では見られない様々な人々の動作や話し方」（4件）などがあげられていた。

●生き生きとした実際の日本語に触れられ、言語以外での日本人の文化、習慣も学習でき、興味深く観ており好評である。（日本語学校）

●教室内での先生との学習、また、日常の身のまわりの生活から抜け出た新しい日本と日本語に触れ、興味深く楽しんでいます。（大学）

●日本の生活事情や家庭の様子、親子の会話等にも触れることができるので喜んでいます。（日本語学校）

●登場人物、中でも普段の生活であまり触れ合う機会のない層の人々の動作や会話に興味を示した。（大学）

その他具体的な反応としては、生のもの（テレビの録画など）を理解できると非常に喜び、それがさらなる学習への励みになる、あるいは日常の生活で出会う日本語への関心・観察力が育てられる、という点があげられている。

学習効果の点でいえば、視覚と聴覚から情報が入ってくるというインパクトは強く、語彙や表現、あるいは日本文化など、学習内容が入りやすく、定着もいいという回答が数件あった。しかしその一方で、見ている時は興味をもってひきこまれているようだが、定着面では不安が残る、という意見も見られた。

●反応は悪くないが、学習の定着が見られるかどうかが問題。（大学）

好ましくない反応も、もちろんある。中でも「集中力が続かない。使いすぎると退屈する」という回答が9件（大学4件、日本語学校5件）あった。

●活用時期を間違えたり、活用のしすぎは、学生を退屈させる恐れがある。（大学）
●教材が面白い興味をひくものであれば学習者は注目するが、それでもビデオの画面そのものに集中できる時間はわずかである。（大学）
●文字教材と比べ、同じものをくり返し使用した際の学習者の集中力が著しく低下するため注意を要する。（日本語学校）
●同じものをあまりくりかえして見るのはよくないようです（１本2-3回までにしています）。（日本語学校）

件数は多くなかったが、ビデオが正当な学習手段として学習者に受け入れられなかったり、視聴覚教育の位置づけが理解されない場合もあるようである。

●勉強とは本を通してするものだという固定観念から、ビデオをお楽しみの時間的に考え、十分に活用しない学生もいる。（大学）
●学習者の中に「勉強」ということのイメージを狭くとらえている人がかなりいて、ビデオを使うと「遊びだから、まじめにやらなくてもいい」と考える傾向があった。逆に、熱心な学生からは、不満が見られることもあったが、回を重ねていくといくらかは解消されていった。（日本語学校）
●初級・中級では他の教材との関連がつかめず、学習効果に疑問を持つ学生もかなり居る。（大学）

また、見ることに夢中になって耳の方がおろそかになる、何となく受身にボーッと見ておわってしまう、という問題点もある。

●おもしろがるが、ボーと楽ができると思う人も何人かいる。（大学）
●視覚のみに神経が集中し、耳がおろそかになる傾向が見られる。（大学）
●対教師だけの単調さを軽減する一方受身になりやすい。（日本語学校）
●音声が十分に聞きとれなくても、映像を見れば大体の内容は理解できることが多いので、音声を正確に聞きとろうとする姿勢に欠ける場合があります。（日本語学校）

上述のように、ビデオは学習者に興味と意欲をひき起こす素材であり得るが、

反面、使い方によってはかえって集中力をなくさせたり、ただ「おもしろく見る」だけのものに終わりかねない。また、学習者の関心や意欲をそそるといっても、それはあくまで教材の内容によりけりだという条件つきの場合も少なくない。

- ●内容がよいと、言葉が聞きとれなくてもいい反応をひき出せますし、言葉がみんなわかったからといって、それで面白がるわけでもありません。（大学）
- ●ビデオ教材の題材によって興味の示し方が違い、あまり関心のない物もある。（高専）
- ●中上級では反応は様々で、取り上げた題材と学生の興味が一致するかどうかで違ってくる。（日本語学校）

そうした学習者の反応をふまえた上での提言としては、以下のような指摘があった。レベルや学習内容に合ったビデオを選ぶこと、事前の準備をしっかりすること、の二点に大きくまとめられるようである。

- ●読解教材とうまく組み合わせれば効果的で、学生も喜ぶようです。（大学）
- ●非常に積極的に関わる時と受身でいる場合がある。ソフトが学習者のレベルと、その時点の学習項目に合致した時にやはり良い反応が出る。（大学）
- ●むずかしすぎなかった時（適当な時期に使った場合）は好評で定着しているようです。（日本語学校）
- ●理解できない語彙が多過ぎると自信喪失につながるので要注意。（日本語学校）
- ●教材によっては生のため、理解が不十分になることもある。事前の準備などが十分におこなえればよいが、いつもというわけにはいかない。フォローアップのための練習問題は必要である（見っぱなしで終わらせないためには）。（大学）
- ●タスク、質問表などを使って、ただ見るだけでなく、それを材料に四技能の向上を図るべく工夫をしないと、受動的な授業になってしまうので準備が必要。（大学）
- ●学習効果をあげるためには教師の側の準備に時間をかける必要があるが、それを怠ると時間が無駄になることもある。（日本語学校）

2．ビデオの長所

次に、他の種類の教材に比べたビデオやＬＤの長所について質問した。学習者の反応の中でも、興味や意欲をひき出しやすいことがあげられていたが、こちらでは教授者の立場から見た長所、すなわち主に指導上・授業運営上の利点などをまとめる。

ビデオ教材の強味は、まず何といっても視覚（それも動画）情報が音声と共に与えられる点である。回答の中でずばぬけて多かったのは、やはり「視覚からの情報の確実性、具体性。理解が迅速におこなわれる。臨場感がある。」ということであった。この趣旨の指摘は、長所の欄に回答記入のあった111件中、62件（大学36件、高専6件、日本語学校20件）にのぼる。

- 授業者が口頭で話すだけではなかなかイメージを正確に伝えにくい場合がある。しかし、映像を見せることによって、具体的な形で学習者が理解できるものと考えられる。（大学）
- 目で見、耳で聞いて、手っとりばやく受けとめられるという点、又、説明する側も余分な労をはぶけるという点は長所といえるかと思う。（高専）
- 音と絵の両方から情報が得られるので、理解が早い。特に初級の段階で学習者の日本語の語彙が少ない場合は有効だと思う。（日本語学校）
- 絵カードや教師が実際にして見せる動作だけでは教えにくい表現や、顔の表情などを教えるのには好都合です。（日本語学校）

その次に多かったのは、「画面に現れる場面・状況、人の動作や表情などと共に語彙や文型を学べる」（27件）であった。語や表現の意味・用法を導入したり復習したり、あるいは実際の文脈でどのように使われるかを確認させるための格好の教材、ということであろう。

- 具体的な場面の中でさまざまな表現や語彙を確認できる点がよい。（大学）
- 場面設定が一目瞭然であり、その中でかなり自然な形で文型の用法をわからせることができる。（大学）
- 例えば「すみません」という言葉がどのような状況下で使えるかを示すには、ビデオが一番手っとり早い。（日本語学校）

●学習対象者が難民であるという関係上、まずシチュエーションに則ったことばの学習は大変重要であると考えられる。いわゆるいつ、どこで、どんな場合にどう発話するかということがビデオ教材使用の大きなメリットであると思われる。（日本語学校）

●状況設定や人間関係・動作の方向性等が複雑な文型（例：使役受身、受給表現、自動詞／他動詞など）にはそれぞれの状況を再現したものを見せて、印象づけるのが最も早くまた誤解も少ない。導入後、誤用の大幅な減少が見られる。文法説明が多くなりがちで、きらわれがちな文型も、映像で追体験させると、理解も早く、実際に使うタイミングもつかみやすいようだ。（日本語学校）

●音声テープとは違い（ことばだけの聞きとりではないため）場面がわかりやすく、興味・関心をもたせ、スムーズに学習に移行できます。又、学習者にとっては、その場に応じたことばの使い方を理解しやすいようで、自分だったら何というか、他にどんな表現をすればよいかを考えながら、発音も合わせて確認できる教材だと思います。（日本語学校）

「言語活動のモデル、あるいはコミュニケーションのなされるさまを総合的に提示できる」（17件）ということもある。それに関連したことでは、「自然な日本語、様々な日本語にふれさせられる」(14件）という意見もあった。

●言語活動をトータルな形でとらえられる。純粋に読むだけ、聴くだけということもあるが、これらの基本となっているのは他人とのコミュニケーションであるので、そのために必要な様々な要素（社会的背景、話者の関係、話し方、動作）はビデオ教材でなければ教えられない。（大学）

●文字情報からだけでは得られない情報が得られることを、ある学習者は「会話の状態・環境が見える」ということばで表現している。日本で学習する学習者のまわりには、そういう経験を直接に得る機会があるはずなのだが、なかなか見出せないでいるようだ。ビデオを使った授業でうまく橋渡しができれば、クラスの外でそれぞれの環境をうまく学習に用いることができるようになるのではないかと期待している。（大学）

●絵カードやテープ以上にその変化する映像と音声によって具体的な言語活動を再現し学生に提示できる点で有力である。（日本語学校）

●教師以外の人の日本語が聞けること。それが聞きとれた時、自信につながり、定着が促進される。（日本語学校）

また、臨場感とつながることとして、「大学の講義などの擬似状況を作り出したり、場面設定したりできる」（16件）といった場面提示力もあげられる。

●教育テレビのテレビコラムは、大学の講義と同じような状況を作り出すことができる。（大学）
●大学の講義を聞く練習として市民大学講座のビデオを見せる。（日本語学校）
●中級・上級で各種の場面を学習者に実体験に近い形で提示できることも、ビデオ教材の長所である。（高専）
●教室では体験できない場面や事物を見せてくれるのが最大の利点。当センターでは教師は教室だけで研修生と接するので、擬似場面を設定するのに苦労するが、ビデオ使用により、様々な場面を共有できて、会話練習に非常に有効。（日本語学校）
●代入練習の時のキーに相当するものを与えずに、状況の中からそれを引出すことができるので、機械的な練習では養えない応用力をつけさせる上で有利であると思う。（日本語学校）

ビデオを用いて指導すると特に効果的な項目としては、「日本事情・文化」（22件）、「口調や非言語伝達（表情、動作など）」（15件）をあげた機関が多かった。その他には、「聴解」（7件）、「語彙の拡大」（7件）、「待遇表現」（4件）、「会話の円滑な進め方」（3件）などがあった。

●例えば「門松」や「独楽まわし」などは、説明するよりは映像を見せた方がはるかに効果的。（大学）
●日本事情紹介でも教科書の朗読（させる）および説明だけでは単調になるので、変化を持たせる意味と、現在の日本企業における技術の進歩の概略を知らせるため（に使用）。ただし一時停止を繰り返し、説明を加える。（高専）
●日本文化を写真などで紹介しても、どのように使うかがわからない場合に使える。（日本語学校）
●教科書では理解しにくい声の調子や表情、態度が読みとりやすい。（大学）
●音声が人物の動きと同時に聞けるので、適切な言い方（敬語の使い方、イン

トネーション、発音、アクセントなど）が学習できる。（大学）

●視覚情報の多さ、特に対人関係の複雑さを明確に示せる点で待遇表現等の理解に有効である。（日本語学校）

●待遇表現の導入では、教師が発話するとその位置に発話が拘束されてしまうのでやりにくい面があるが、ビデオを使う時はその点自由である。（日本語学校）

●話すタイミング、相づち、動作など、会話を円滑に行なうためのテクニックを教えられる。（日本語学校）

次に、授業の運営面を見てみよう。こちらでは、「授業の多様化」（11件）というのが最も多かった。それと関係することで、おそらく録画教材が役立っているということかと思われるが、「題材が豊富に選べる」（5件）という点もあげられていた。

●学習者のレベルに合わせて、いろいろな使い方ができる点。（大学）

●教科書中心の学習に変化をもたせることができる。（日本語学校）

●音声、画面をうまく利用することによってバラエティに富んだ授業ができる。（日本語学校）

●幅広い分野のものが扱える。（大学）

●多種多様な題材が選べ、文字教材以上に短時間で幅広い展開が期待できる。（日本語学校）

その他、以下の様な指摘もあった。

●ビデオに出てくる登場人物を使って、いろいろな練習がしやすい（ドリル、ロールプレイ）。（大学）

●予定しない所に学習者が興味を示し、予期せぬ発展がおもしろい。（大学）

●話題が広がる。教案には組みこんでいなかったことや表現に思いがけず大きな関心が集まって、かえってよい授業になることもあります。（日本語学校）

●学習者の興味のある話題、ない話題で反応は様々だが、話題づくりは成功している。特に、「世界と日本と自国」を対比して考えるものには敏感に反応。それを各自まとめ、作文づくりはおもしろいようである。（日本語学校）

●全体把握させる場合、ドラマなどでの感情表現を理解させるにはビデオ教材

が特に有効に思われる。又学習者を同じ土俵の上にのせ発話させるのにも効果が出ているよう思う。（日本語学校）

●授業を通して学習者が日本のテレビ番組に興味を持ち、自宅でもテレビを見る機会が増え、それが結果的に日本語の学習にプラスになること。（日本語学校）

最後に、機械的な性能からくる点としては、「反復練習」（10件）、「一時停止」（3件）の利便性があげられている。

●比較的簡単に何度でも繰り返して見せられるので、学生のレベルに応じて繰り返すことができる。（大学）

●個人的に繰り返し復習できること。（大学）

●適宜反復したり、映像を止めて、話し合ったり、学習者自ら利用している。（高専）

●一時停止、スローが行えるので納得させ易い。（高専）

3．ビデオの不便な点

前節では、ビデオを日本語教育に利用することによってどのような効果が期待できるか、また実際にあがっているかを見たが、一方で問題も決して少なくない。今後より建設的な工夫をしていくためには、長所以上にそれらの問題点を確実に把握しておかねばならない。アンケートでは、既存のビデオ教材に対する不満、あるいはビデオを授業で使う際に不便を感じる点について、調査した。

【ソフトについて】

まず、既存の日本語教育用ビデオについての不満点を、内容面から見てみる。回答の中で目立ったのは、「場面設定や話し方などが不自然」（23件）、「内容が古い」（11件）、「いかにも教育目的という感じ。かたい、暗い」（8件）といったものであった。これらは、特に文型中心の初級用ビデオについて述べられていることが多かった。といっても、Ⅲ章で見たように、国際交流基金の『ヤンさんと日本の人々』は、場面やセリフも自然で、日本の生活がよく描かれている、という感想が多かった。一方、制作年度の古い国語研究所の『日本語教育映画基礎編』は、場面やことばづかいなど、今日のものとは違和感があって、学習者がとまどう箇所も少なくない。学習者の限られた語彙・文法の知識にできるだけ合わせつつ、生きた使用の場面・文脈とともに文型を効果的に提示していくことは、初級ビデオ制作における大きな課題である。

- 教材として作られるもののダイアログが不自然。生きた言葉をビデオにとり入れることは不可能なのだろうか。今後の教材開発の課題だと思う。（大学）
- 特に初級用教材に関し、会話や場面設定に多少不自然なところが目につく。当方では会話つきのビデオ教材を自主制作した経験があり、この点のむずかしさは十分に承知しているが、ビデオ教材の目的の一つは自然な流れの中での必要事項の修得という点にあるはずなので、今後少しずつでも改善されることを望む。（大学）
- 文法的に配列されたものは、不自然で使いにくい。場面主義と文型優先主義の両者のバランスがとれたものを作る必要がある。（大学）
- 会話がカタにはまりすぎて、「古い日本語」ということが、どうしてもぬぐえない。一定のカタにはまった会話が、どのように略されて、使用され、実

践されているかを示すようなビデオを望む。（大学）

●不便というのではないが、ビデオ教材の中の言葉の丁寧さは時に不自然さを観るものに与える。その点の指導は現場の教師の役割とは思うが、もっと自然な会話とかがあればと思う。（もちろん、わかりやすい良いビデオ教材もある。）（高専）

●教材用とはいえ、不自然なものが多く、学生の失笑をかうことが多い。（日本語学校）

●既存の初級用のビデオは、映像の古さ・表現の固さ・演技の不自然さが目立ち、本来ビデオの長所であるべき「見たい」「聞きたい」等の学習者の能動的態度を得にくくしてしまっている。初級段階の既習語彙・既習文型のみで自然なものを作るのは不可能だから多少の不自然さは目をつぶる、という態度は、文字化されたメインテキストのようなものだけで十分である。シナリオを全部文字化し、学習者に持たせるわけではなく、内容把握や重要項目を抜き出したタスクシートを用意すればよいのだから、むしろ、多少の未習語彙・未習文型には目をつぶっても、表現として自然で楽しいものの方がビデオとしてはふさわしい。（日本語学校）

不自然さ、かたさ、暗さといった欠点を補い、同時に時事的な話題も取り入れられるものとして、テレビの録画が盛んに利用されているのであろう。しかし、中級後半から上級になれば、そういったいわゆる生教材が使えるものの、初級から中級前半の学習者にとっては、未習の語彙や文法項目があまりに多く含まれた教材は負担が大きすぎる。初級レベルを教える先生方からは、学習者のレベルあるいは進度に合ったビデオ教材が少ないことを嘆く声も聞かれた（11件）。

●市販のものは語彙・表現に未習のものが多く、使用の妨げとなっている。（日本語学校）

●国研教育映画にしても他の教材にしても、本校（だけでなくどの学校でも同じことが言えようが）の教材の語彙と合わない点が不便である。（日本語学校）

●入門期は語彙も表現も制限されているため、ストーリーをもたせた会話を作ろうとすると、未習項目が多くなってしまう。学習項目をなるべく細かくワンポイント化し、動きを見ることによって理解しやすいものに限定（例えば

「走ってくる、降ってくる、飛んでくる」などの類）し、多くの例を示した方が使いやすいのではないかと思われます。（大学）

この点については、ビデオ制作において、特定の教科書を念頭におきながら、つまりその教科書と連動して用いることをはじめから目的として、内容（語彙・文法など）決定がなされる方針がもしとられるようになれば、かなりの面で解決されるかもしれない。自作ビデオに関する回答の中で、教科書の会話の部分をビデオ化したものがあげられていたが、これもそういった方向での実践といえよう。

その他には、「一般にビデオ教材の種類が少ない」（8件）、「補助教材が充実していない」（6件）、「知的興味をひくような内容のものが少ない」（6件）、「場面のバリエーションが少ない」（4件）、「全般的に欧米系の学習者向けのものにかたよりすぎている」（6件）などがあった。

- 全体的に教材数が少ないので安価で広範囲に開発していただけたらと思う。（日本語学校）
- 補助教材、特にビデオをみて、それに関する種々の教室作業を含んだ補助教材の開発（が望まれる）。（大学）
- 補助教材は、量的に不十分であるし、質的にも視聴覚教材の特性を十分活かしていないものが多いと思われる。（大学）
- 補助教材として、ワークシートなどがもっと整えられていると、使い易い。特に復習用に使う時は必要になる。クラス作業の中で使うものの他に、学生の自習用としてしっかりした補助教材のついたビデオも利用されるのではないか。（日本語学校）
- かなりいろいろな形のビデオ教材が開発されているが、中・上級の学生の知的欲求を満足させるような、高度な内容のものは少ないと思う。（大学）
- 知的刺激を喚起するようなものでないと、研究生や院生には興味が持てないので、既存のものはあまり役に立たない。（大学）
- 日常会話などの上達も欲しているが主目的が学会発表等である研究留学生にとっては、日常的にも知的興味にひきずられて日本語を読んだり、聞いたり、話したりすることが望ましいわけで、それに合った教材を捜すのが苦労。既存の日本語教材にはそういう意味ではあまり適当なものが見つからないので、自主教材を作らざるを得ないという状況である。（大学）

●補助教材で語彙表を作る時は、できるだけ英語ではなくてやさしい日本語で言い換えてほしい。（大学）
●英語圏向けのビデオは多いが、中国語・韓国語圏向けのものが少ない。（日本語学校）
●日本文化を紹介するビデオが英語版ばかりでは困ることがあります。（中国人学生はたいていわかりませんから。）（大学）

ソフトについては、もう一つ、非常に大きな問題点がある。価格である。ソフトの値段に関する不満は、25件（大学13件、高専2件、日本語学校10件）にのぼった。

●とにかく値段が高すぎる。（大学）
●テープの値段が高く、教材として揃えにくいのでテレビ等の録画にたよることが多い。（高専）
●市販ビデオの値段を、もう少し手頃なものにしていただきたい。（日本語学校）

【ＶＴＲ機器について】
ハード面での不便な点といえば、やはり操作上の繁雑さ、特に頭出しに手間がかかるということがあげられる。この点を指摘した機関は23件あった。

●必要な部分へのアクセスに時間がかかる。（大学）
●必要箇所が複数ある時に頭出しに手間どる。（大学）
●くりかえし見る時、巻きもどしが不便である。コンピュータで簡単に出来ると学会で聞いたが、そのような機材が安く入手できるようにしてほしい。（高専）
●レーザーディスクと異なり、スピーディーな検索ができない。そのためにどうしても授業の流れの妨げになってしまう。（日本語学校）
●機器の扱いに不慣れだと、巻き戻しによる時間のロスが大きく、ビデオを使いたがらない人もいる。（日本語学校）

音声面では、次のような問題が指摘されている。

●大きい教室で映写する場合、音声がこもって聞きにくい点。（大学）
●一時停止にした場合、再生にしたとき、音声が一部消える。（日本語学校）

また、「設備がなかなか使えない」「授業の前に教室にビデオを運び入れたり、また出したりするのが大変」ということもある。ビデオ機器が設備としてはあるものの、それを実際にクラスで使う段階で、困難が出てくるということであろう。

●ＬＬ教室や図書館のＡＶ室の授業での利用度が高く、留学生が個人的に使える時間が限られる。（大学）
●設備等の関係で学習の場が限られる。（大学）
●ビデオ機材の運搬に人手が必要で、ビデオ使用のクラスが同時間帯に多くなると支障が生じる。（大学）
●クラス毎に見る設備もないし、操作も繁雑なので、忙しい進学コースでは敬遠しているようです。（日本語学校）
●ビデオ教室（１室）でないとできない。各教室につけるのは理想であるが、管理しきれない。（日本語学校）

４．今後のビデオ教材に望むこと

今後開発されるビデオ教材への要望には、ビデオの問題点もふまえて、それらを改善してほしい、あるいは、こういった教材があれば便利だろう、など、様々な趣旨のものがあった。

【市販ソフトの充実】

今後さらに充実が望まれるのはどのレベルの教材か、希望のあった件数を示す。

初級用　13件（大学 5件、高専 0件、日本語学校 8件）
中級用　25件（大学18件、高専 1件、日本語学校 6件）
上級用　18件（大学15件、高専 0件、日本語学校 3件）

レベルによる使用教材の違いに関しては、次のような指摘がなされている。

- ●中級後半・上級向けには生のテレビ番組を録画することによって、なんとか教材が得られるものの、初級・中級前半は生のもので使えるものが非常に限られてくるため、日本語学習用に作成されたものに頼らざるをえないのが現状である。（日本語学校）
- ●上級には生のものを（テレビの録画など）教材化するのがよいと思いますが、中級にはどのような使い方をしたらよいのかが課題だと思います。（大学）
- ●上級については生教材が活用できるが、初級後半および中級レベル用のＶＴＲ教材の開発が望まれる。（日本語学校）

既存の市販教材を見る限り、初級用のビデオが他のレベルのものより多少多いように思われる。また、これまでにも見た通り、上級ではテレビの録画がかなり利用されている。しかし、中級はそのはざまにあって、初級のものではもの足りないし、さりとて生教材も能力的に少し荷が重いという中途半端な立場に立たされているのではないだろうか。その意味では、ビデオ教材に関してしかるべき手当てを最も必要としているのは中級かもしれない。また、そういったことが、中級用教材へのニーズが他よりやや多くなっている一つの理由といえるかもしれない。

次に、内容についての要望を挙げる。分野に関しては、「日本事情（文化、生活、習慣、風俗、行事など）」（24件）、「専門の内容のビデオ」（11件）の充

実を望むという回答が、多かった。特に後者は、大学・高専によく見られた。

- 日本紹介をやさしい日本語で要領よくまとめたビデオ（内容の新しいもの）の開発を望みます。日本語中級のビデオも、学生の生活をテーマにしたようなものがあれば有難いのですが。（大学）
- 日本事情シリーズの充実。特に、日本人なら常識的に知っているものを視覚的に見せるもの。（例．日本の山、鳥、花、天然記念物など地理関係）（大学）
- 現在の日本の社会、経済、庶民生活を理解させるビデオ教材を。（大学）
- 日本の地方ロケや祭りなど、クラスの中では説明しにくいものや提出しにくいものを作ってもらいたい。（日本語学校）
- 日本の冠婚葬祭や年間行事が短いドラマ（2～3分）仕立てになっていたり、日本人の家庭生活・会社生活・学校生活等が短いドラマ（3～5分）仕立てになっていて楽しく紹介できるビデオ教材があるとよい。（日本語学校）
- 留学生の多くは限られた年月で専門分野の研究または技術習得をするため来日し、手段としての日本語を効率よく身につけることを望んでいます。特に上級の教材について専門分野に関わりの深い内容のものを用意する必要があると考えています。（大学）
- 学部留学生の専門分野の導入となるようなビデオ教材の開発が望まれる。本学の場合では、工学部（電気、土木、建築、機械、経営工学）、経営情報、国際言語文化関係に留学生がいるが、視聴覚教材を併用しての日本語教育はぜひ行いたいと思っている。（大学）
- 理工系の学生に対する専門分野に応じた教材がないことが問題。現在の日本語教材は生活一般に関する内容がほとんどで、試験の問題すら読めるようにならないような日本語教育を１年余り受けるようなことは学生にとって意味がないと思う。（高専）
- 工学系の学生のために科学性のあるもの、工学実験、コンピューター、最新技術など日頃学生が関わっている分野で行われている実際的な作業の紹介や先生の解説がついているものがあればよいと思う。（高専）
- 既存の教材は主に日本の日常生活や文化などの紹介が多いが、もう少し理工系の学生のために科学性のあるビデオがあってもよいように思う。（高専）
- 一般的には、留学生向けのビデオがほとんどであるため、技術研修生向けの

教材があればよいと思う。（日本語学校）

企画上の留意点として希望の多かったのは、「目的を明確にしたもの、学習内容を細かくしぼりこんだもの」（11件）、「トピック別、ジャンル別、場面別などの構成になった教材」（10件）であった。このようなものは、先生が教材を選択しやすい、授業で使う時にも能率が良い、学習者も学習項目とビデオの内容との結びつきを理解しやすい、などの利点がある。

●一般を望むあまりどこでも使えないという結果になっているのではないか。使用目的にあわせて作るべきだろうから、もっと目的を明確に主張した少々くせのあるものが増えるとよいのではないか。（大学）
●文法、表現法、文字（漢字）、敬語など、それぞれの目的（学習内容）に応じ、しかも学習者が興味をもって見ることのできる教材がほしい。（大学）
●中級以降は、学習者の学習目的によって教材が変ってくる時期なので、その点をはっきり打ち出した教材（たとえばビジネスマンのための中級視聴覚教材）があってもいいと思います。（大学）
●内容だけを提供してあとは現場の裁量に任せる、というのも一つの方向であろうが、話すという技術の養成を目ざしたもの、聞くためだけに開発されたもの、などがあってもいいように思われる。（大学）
●会話ディスカッションのテーマとなるもの、単に文型導入や復習を目的としたもの、内容理解だけを目的にするものなど教育の目的に応じた種類に分け、製作がなされるのが望ましい。（日本語学校）
●中・上級用にトピック別（日本の世相、社会問題など）、形式別（講演、ニュース、インタビュー、記録映画など）の5～10分程度のビデオ教材があれば、日本語教育用にも日本文化紹介用にも使え、大変役立つ。教師の数の少ないところでは、これらのものを既成の教材や、テレビ等から録画したものを所定の時間内に編集するような作業はなかなかできないと思う。（大学）
●文型別・機能別・内容／ジャンル別の短時間教材が低価格で次から次へと選択できればいいと思っているのですが。（大学）

ビデオ教材の問題点として「不自然」「古い」「かたい、暗い」などがあったが、それらを改善してほしいという要望は強い。「自然な日本語、現実の言語使

用を提示したもの」（18件）、「明るい、ユーモアのあるもの、センスのあるもの」（16件）、「知的興味をひくもの」（12件）、「時代に即したもの、時事的な話題を扱ったもの」（6件）といったところに意見が集まった。

- ●当センターの研修生が研修先で最も困ることは、教室内日本語と現場工場（会社）での日本語の差である。日本が多くの技術研修生を受け入れる今日、工場・作業場での普通体による会話のビデオを作っていただけるといいのですが。（日本語学校）
- ●少しはデザインや音楽のセンスのある人に作ってもらいたいと思います。（大学）
- ●より新しいもの、学生の興味をつないでいけるもので、できれば部分使用にとどまらず、一貫して使用し得る内容のもの。（日本語学校）
- ●テーマが明確で、内容が簡潔で、興味をひくもの、全体的には明るいイメージのものがいいと思います。（日本語学校）
- ●教科書にある時代遅れ的なものは少ないと思われるものの、生活性（特に、学生達自身の）の大きな違いや、また、広い社会性のあるものが、タイムリーにあれば有益です。（製作上、難しいでしょうが。）（日本語学校）
- ●日本の文化、習慣は目まぐるしく変化しているので、その時代に合うよう、なるべく多く編纂してほしい。（大学）

ビデオの長さは、「短時間のもの、一回の授業で使いきれるようなもの」への希望が13件あった。

- ●現在の教材は、1コマ（当別科では50分）で使うという時間的制約を考えて作られたものは少なく、結局実際に使用するための教材化に、担当者はかなりの時間を費やしている。（大学）
- ●大学の教養での教材を作る場合には、90分で仕上げるという形で作っていただくと助かります。（大学）
- ●初級の前半レベルにおける場面設定にビデオは欠かせないが、その段階では場面の短いものが望ましい。（日本語学校）
- ●5～10分程度で学習とか、続きものにする（1つのストーリーを切って）などの方が先生にも学生にも無理がないと思う。（日本語学校）

その他、こういったビデオ教材が欲しいということでは、「教科書などと連動して使える視聴覚教材」（7件）をはじめとして、様々な希望があった。

●読解・作文・会話教材との連係がはかれるものがほしい。（大学）
●教科書、テキストと関連づけられた、あるいは副読本的にそれらを掘り下げた視聴覚教材があればよいと思う。（大学）
●各教科書に即した視聴覚教材があれば、教材の準備に手間がとれて教材内容の研究の時間がとれ、ありがたい。（日本語学校）
●学習者の様々な反応を生かしたビデオがあればと思う。各自の反応に従って、それぞれに話題が発展・深化するようなビデオが作られれば、おもしろいと思う。（大学）
●受身ではなく、参加できるビデオ教材を作る必要があろう。ビデオでドリルができる。ビデオ画面の合成ができれば、ＬＬのテープのように参画して、自分の解答を全体の場面で再生してみることができるビデオ教材ができるであろう。（大学）
●学生側からのはたらきかけが、教材の進行に反映される双方向型のシステムが理想といえるのでは。（日本語学校）
●学習者対ビデオ（プログラム）で練習できるもの（会話の疑似体験ができるもの）がほしい。（日本語学校）
●初級用には、現在導入用に用いられている絵カードをビデオ化したような短いスキット集があったら喜ばれるのではないか。（大学）
●家庭、学校、会社、街頭、役所、銀行、交通など、日常生活に必要な場面を想定し、5分位のスキットにして、練習できるようにしたい。教師が必要とする場面（言語主体を含め）がすぐ検索できるよう工夫してほしい。（大学）
●既製のビデオを現行のカリキュラムに合わせると、無理が生じるので、ビデオの時間として完結できるような、独特の教材を開発してほしいと思います。例えば、日常生活・ビジネスの場での礼儀作法、式典や会社の正式の場でのスピーチの話し方と聞き方、くだけた場面でのジョークのやりとりなど。（日本語学校）
●主に中級を対象とした、副詞表現を扱ったもの、擬音語・擬態語をまとめたもの、ができるといいと思います。（日本語学校）
●文型の学習を目的にするビデオはもっと単純化を。アニメ化も考えられるで

あろう。学習者の創造性を高めるもの。「すべてを与えてしまう」ビデオではなく、最少情報をヒントにして学習者がそれを応用して、次の行動への対応を広げていけるようなものを。「話しことば」特にアクセント、イントネーション、プロミネンスなどを独習できるような音声中心のビデオを。（文単位が望ましい。）（大学）

●経費的な問題かもしれないが、もっとアニメーション（幼稚なものではなく）を使ったビデオ教材があると色々立体的にイメージできるものが多いと思う。役者が演じたものの場合、余計なものに気をとられることもあるし、かな文字や漢字の導入などにはアニメが欲しいと強く思う。（日本語学校）

●実写による映画は情報密度が高く、多目的に使用できるが、情報密度が高すぎると注意が分散するおそれもある。抽象度の高いアニメなどで、文型と表現意図の関係のみを扱うようなシーンと組み合わせるとよいのではないか。（日本語学校）

●中級レベルの簡単な連続ドラマ、上級レベルのテレビドラマ、映画、ニュース、マンガなどを適当に組んだもの。日本の文化、習慣、スポーツなどを日本語で解説したもの。（日本語学校）

●現在 HiFiビデオが主流となっており、ア）主音声、イ）副音声、ウ）ノーマル音声にそれぞれ、ア）初級レベル、イ）中級レベル、ウ）上級レベルのことばで録音したビデオ教材（特に日本事情関係）が製作できるのではないか。（日本語学校）

●ＣＡＩとビデオ画像が連結した教材の開発がどんどんされるべきだと思う。その場合、専門別の留学生のニーズを想定した場面設定、文型などを盛り込んだ教材があればよいと思う。（大学）

●国内学習者の場合、初級段階のビデオでは、教師の教室作業で十分できるようなことではなく、もう少し抽象的な概念を扱ってもいいのではないか。抽象的なものを初級の文で入れるのは大変だが、学習者が母国語で持っていることは多い。初級教材全般で子供扱いされていると感じている学生にとっては、不満を解消することになるかもしれない。（日本語学校）

●ビデオ教材を使って日本語を説明するというよりも、ビデオを使った学習経験を通して、生の日本の生活の中で、一人一人が日本語学習につながる生活ができるようになる。そのような学習活動を手助けするビデオ教材および関連補助教材があればいいなと考えています。（大学）

【補助教材について】

●画面、内容に即した先生用の本がなく、学生用の本もあまりよくない。（日本語学校）
●ビデオを見た後での学習材料を充実してほしいと思います。（内容確認のＱＣシート、文法項目の整理、プリントできるような語彙のリスト、など）（日本語学校）
●カセットテープ、主な場面を抜き出して紙芝居のようにした絵カード、生徒用の練習帳などの充実が期待されます。（日本語学校）
●シナリオ、指導用マニュアル等はある程度完成しているが、学生の教室作業用の教材が不足している。（大学）
●補助教材として、ワークシートなどがもっと整えられていると、使い易い。特に復習用に使う時は必要になる。（日本語学校）
●ビデオの音声だけをカセットテープに入れたものを作り、各自の復習用に渡したこともあります。カセットテープがあらかじめ用意されていれば、かなり活用されるのではないかと思います。（大学）
●サウンドトラックテープ、スライド、ＯＨＰも併用できるとよい。（大学）
●ビデオ教材には必ず音声テープをつけてほしい。（高専）
●単語リストをつける場合は、中国語・韓国語訳もあるとよいと思います。（大学）
●メーカーの作る補助教材は、キャラクターの顔や重要場面が切り貼りできるような仕組みになっていると教師にとってありがたいと思う。（日本語学校）

【操作性について】

ビデオの非常に大きな問題点は頭出しの面倒であったが、それを解決するための希望も次のようにあげられている。

●ビデオは頭出しの問題があり、レーザーディスク化が望まれる。（大学）
●飛び越し及び繰り返し再生に時間がかかり、また一時停止（静止画像再生）後、再生をする際に音声がわずかに切れてしまう。そのために、レーザーディスクの教材を多く出してほしい。（日本語学校）
●ＣＤロム形式の、音も絵も出るパソコン、つまりすぐに頭出しができ、くり

返しても、とばしても、自由自在にできるようなものがほしいです。（大学）

●ＣＡＩを利用した、ランダムアクセスによる教材の開発を。（日本語学校）

●ビデオを操作する時の教師の不手際でうまく「学習するところ」の頭出しができないで、授業の流れを中断してしまうことがあるので、カウンター表示がしてあればと思います。（日本語学校）

【ビデオの利用をとりまく状況、制度について】

●英語教育において多数開発され、本として出版されている視聴覚教材ハンドブックのようなものが日本語教育の現場でもあればいいと思われます。例えば、文型（表現）別、品詞別、五十音別などの索引から目的とする略画が探せたり、いろいろなヒントが得られるようなもの。（大学）

●開発されたビデオ等の教材の内容がどんなものなのか、詳しく知りたい。本等は書店で見ることができるが、ビデオ類についてはできない。日本語、日本事情等に関する様々の教材が１ケ所に集められており、そこへ行けばビデオであれば試視、視聴できるという公の場がほしい。（高専）

●ビデオはカタログでは内容がよくわからない。内容を紹介したビデオがあると便利。（日本語学校）

●ビデオ・ライブラリーが充実して、いつでも貸し出しが受けられるようになればと願っている。（大学）

●ビデオ教材の製作、及び使用方法についてのセミナー、ワークショップを企画していただきたい。（日本語学校）

●ビデオ教材をどう利用するかについてのワークショップを行い、できれば貸与してモニターとなってもらい、実践報告を提出させるなどはいかがでしょうか。（大学）

●ビデオの利用に関して、日本語教育の各機関でいろいろな試みが行われていると思うのですが、その経験が共有されていないように思います。著作権の問題もからんでいるのかどうか、勉強不足でよくわからないのですが、「ビデオ教材」という形で教材化するだけでなく、ビデオの利用に関して、もっと開発が進められたらいいのではないかと思います。（大学）

5．その他、ビデオ教材についての感想

【ビデオの利用を困難にしている諸条件について】

●教材器具を扱う技術が身についていない。学校全体視聴覚教育の重大さに気づいていない。雰囲気がない。（大学）

●視聴覚教材というものは、授業中の学習効果を高めるものであり、教師の補助的役割をも果たしうるものである。しかし、それは視聴覚教材の十分に整った教室と、複数のスタッフがあってはじめて成り立つものであって、当大学のように5～6人用の留学生演習室はあるものの、あとはすべて研究室から遠く離れ、一般教育の机・椅子が固定されている大教室で授業が行なわれ、しかも、そこに備えてある機材を使うには前もって事務官に連絡が必要であったり、準備を行なうにも、他の授業（日本語とは全く関係のない）が続いて行なわれていれば十分にできないという状況では、十分に教材の良さを考えた授業は行ないにくいし、教官の負担が増すばかりで、積極的に利用していく気になれない。テレビなどからとったビデオ教材も編集などをしたいが、現状（教官１名）では無理である。（大学）

●カリキュラムの中に取り入れて、うまく使いこなすのが難しい。従って、他の教材との関連がつかめず、学習効果に疑問を持つような不満が出るものと思う。（大学）

●ビデオ、ＯＨＰ、テープなどは、多くの点で大変すぐれた教材になり得るが、残念なことに、それを使う教師側に苦手意識を持つ者が多いため、充分生かされていないのが現状ではないだろうか。何につけ、それを使う者の手際の良し悪しが、効果の大小を大きく左右する。学校など、各機関がトレーニングをする場を設け、しっかりしたマニュアルを作ると同時に、教師側も苦手意識（あるいは「機械蔑視」）を捨て、取り入れようという積極的な態度で取り組むことが望まれる。（日本語学校）

【ビデオ利用に関する見通し】

●ビデオ教材の充実とともに、生番組からの録画の活用（一層の）、各機関でのそれぞれの状況に合った自主ビデオ製作なども考慮の余地があると思われる。（大学）

●中・上級以上のレベルの読解指導の補助教材として、視聴覚教材が利用できないかなどと考えています。（特に、ＶＴＲ、ＯＨＰ等ですが）例えば、短編小説などの原作に忠実にドラマ化したものを、速読練習の理解の正誤のチェック等に活用できたら面白いと思います。（大学）

●テープレコーダー、ビデオ、パソコン等のそれぞれの特色を活かしたカリキュラムを組み、効果的な日本語指導をしていきたい。（高専）

●クラスや教師によって、使っているものや使い方がまちまちなので、まず効果的だったものについて教師の勉強会等でとりあげ、紹介及び考察を深めていきたいと思っています。ビデオ等視聴覚教材については、定期的に視聴覚の時間として位置づけた方が良いのかどうか検討し、全学生が均等に視聴覚教育を受けられるよう使用についても考えたいと思います。（日本語学校）

●難民対象の日本語教育を行う場合、文化、生活、習慣、価値観等が違うため、それらを早く日本の風土になじませ社会生活に適応させるためには視聴覚教育は大変重要であり、不可欠のものであると考えられる。それがためには既存のテープではどうしても当方のニーズには合わないものが多い。従って、既存のテープの長短を考えながら自作のテープを作っていくことが望ましいと考える。（日本語学校）

●視聴覚教材といっても、読本・ハンドアウトといった従来の教材と別個のものではなく、大きな教材群の中の一領域であるから、従来型のものとの連続性を考えながら、教授法全体を豊かにしていくような可能性を追及していきたいと思う。今後は、大人数の学習者に同時に同じ内容を与えるのではなく、選択個別、相方向型の教材が視聴覚の領域でも開発されていくものと思うが、設備・クラス編成の制約を考えながら、こうした動きにも対応していきたい。（日本語学校）

●現在当海外技術者研修協会では、ＣＡＩの開発にも取り組んでいる。開発を始めて日も浅く、現在試行段階であるが、どのようなコースウェア、使用方法が考えられるか、可能性を模索中であるので、今後他機関の既存教材等を参考にしながら、研究を進めていきたいと考えている。（日本語学校）

●予め、視聴覚という時間を設定していないせいか、長期的に使用し、その効果を確かめるということができていないので、ある程度教材もしぼって指導したり、独自の教師用マニュアルも作っていきたいと思います。新しく発売されるものについても検討し、経済的に許せる範囲で取捨選択し、購入した

いと考えています。（日本語学校）

【今後対処していくべきと考えられる点】

●著作権の問題があるので、テレビ番組や映画などを教材化しても、自由に他機関と交換ができない。（大学）

●日本の内外を問わず、若い世代は優れたメディアと共に育ってきています。とすると視聴覚教材の占める位置も変化してくるものと思われます。無論主要教材となることはないと思いますが、補助教材としての活用としても、語法等の言語の主分野ではあまり伸びていかないのではないでしょうか。むしろ言語が乗せて伝える物、文化、社会等の補助教材としての使命に比重を置いた視聴覚教材ならば、触手を伸ばしたくなるし、ぜひ開発を望みたいです。つまり言語的側面からではなく、文化的紹介という観点に立脚した視聴覚教材を望むということです。動機とか興味とかの言語教育上の重要な側面をフォローしてくれるものと信じています。（日本語学校）

●現物に近づけば近づくほど情報量が増えてしまうという宿命がある。つまり誤解の可能性が高くなるわけで、何を見た時、どんな文化の人はどんな誤解の可能性があるか、といった研究がもう少しあってもいいのではないかと考える。（大学）

【その他】

●あくまでも補助教材として、短時間の使用は適当であるが、メインではないということを銘記すべきである。講義に疲れた先生が、例えば「坊ちゃん」のテープを見せて、2時間休むことがあるが、教師は presentation の技術に磨きをかけるのを忘れてはならない。（日本語学校）

●使い方次第でどの教材もその意図されたところが生きたり死んだりするのではないでしょうか。全く同じビデオでも、クラスによってうまく使える場合もあれば、単なる時間調整に終わってしまう場合もあります。（日本語学校）

Ｖ．ビデオを使用していない機関の意見等

「日本語教育にビデオは使用していない」と回答した機関には、不使用の理由、ビデオの問題点、および今後への要望を調査するための設問を用意した。

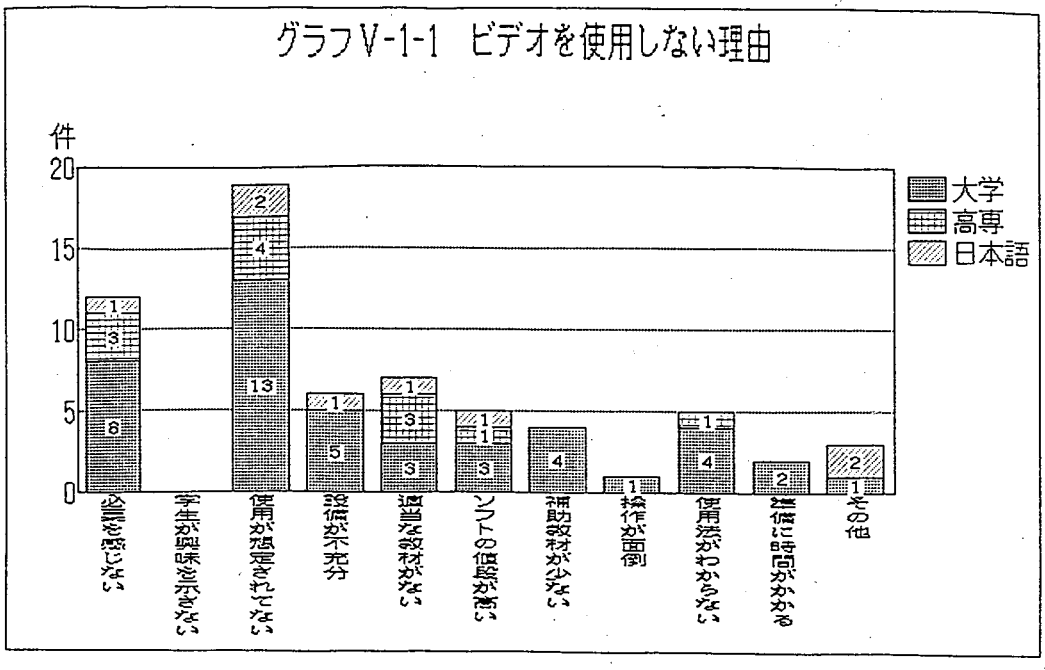
１．ビデオを使用しない理由

ビデオが使われない理由になると考えられるものを選択肢として幾つかあげ、複数回答形式で質問した。選択肢は、以下の通りである。

・教師の側でビデオ教材利用の必要を感じない。
・学生が興味を示さない。
・カリキュラム上、ビデオを使うことが想定されていない、または時間的余裕がない。
・ビデオを利用するための機器・設備が充分でない。
・適当な教材がない。
・ソフトの値段が高い。
・教師用のマニュアルなど、補助教材が少ない。
・授業中にＶＴＲを操作するのが面倒だ。
・どう使ったらよいかわからない。
・授業の準備に時間がかかりすぎる。
・その他

集計結果を、グラフＶ－１－１に示す。

最も回答の多かったのは、「カリキュラム上ビデオの使用が想定されていない、時間的余裕がない」であった。それに続くのは、「ビデオ利用の必要を感じない」である。回答件数自体も少ないが、それ以外はたいして回答数に差はないようである。ビデオが学習者の興味・関心をひきつける教材だということは既に指摘されているが、「学生が興味を示さない」という回答は、１件もなかった。



「その他」については、2件の内容記入があった。

- 視聴覚教室が別にあり、他方語学の教室が決まっているために、移動、もしくは、他語学学習者が利用している場合もあり、調節が難しい。（教室変更の周知徹底など）（大学）
- 「カリキュラム上、ビデオを使うことが想定されてない」という項目にあてはまりますが、これが「または時間的余裕がない」と同列にしてあるので記入しませんでした。当校の伝統的方針によるもので。（日本語学校）

また、次のようなコメントもあった。

- ビデオ教材の問題点・不便な点という立場からではなく、日本で日本語教育をする立場にある、地の利を最大限に活用する姿勢を貫くために、できるだけ教室活動（広義の）で教師の肉声を聞かせることと積極的な社会接触を奨励・援助することが、本校の創立以来の一貫方針です。少人数制（5～8人）のクラスと教師の家庭的触れ合いが重視され、課外活動での生の体験をしたり、それ以外の私的文化接触を聞き、話題とすることに重点を置いているので、今まではビデオ等の是非もあまり話題になりませんでした。（日本語学校）

2．ビデオの不便な点、今後に望むこと

ビデオを使用していない機関から寄せられたビデオの問題点、今後のビデオに対する要望には、次のようなものがあった。

【不便な点】

- まだビデオを使用するための機器・設備が教室内に設置されていて、限られた時間にすぐ、簡単に使用できるようになっていないこと。又、各機関で、多様なニーズに合うビデオをなかなか全部揃えられないこと（経費の面で）。初級、中級に比べ、上級レベル、特に学部留学生以上のレベルに達している学生へのビデオ教材はなきに等しいと思います。しかし、上級ほど対象によって内容が変わってきますので、使用する場合は教師の側で準備するべきでしょう。（大学）
- 本課程のように完全な直接法による日本語教育をしている現場とそうでない現場とでは、入門期の教材のとらえ方が当然異なるため、どちらにもうまく利用できる教材にはおのずから限界があるのではないかと思われます。（大学）
- 教材については、どのようなものが出来ており、内容がどう云った学生に標的をあわせたものであるか等、情報不足。（大学）
- 理工系専門課程の学習者に適したビデオ教材がない。（高専）
- 不自然な日本語を使っている教材がある。（日本語学校）
- 現在ではハードもかなり高品質になり価格も安くなっているので、先生方と検討をして導入を考えている段階です。今まで導入しなかった理由は、①高価格なものに対し学生の数が少ない、②当時老教師が多く操作するのにいやがる人が多かった、③学習に対しまじめに語学を学ぼうとする学生が少ない（アルバイト目的が多数）です。（日本語学校）

【今後のビデオ教材に対する希望】

- 値段をもう少し下げてほしい。（大学）
- 作成にあたって若い世代（20代）の発想、思考回路などを十分参考にしてほしいと思います。（大学）

Ⅵ．日本語教育における視聴覚教材の利用：分析とまとめ

この章では、前章までにあげたアンケート集計結果をもとに、日本語教育における視聴覚教材、特にビデオの利用状況をまとめる。

１．視聴覚機器の保有と活用

179件の回答機関中100件以上が保有している視聴覚機器は、保有件数の多い順に、ＶＴＲ、テープレコーダー、ワープロ、スライド映写機、ＯＨＰ、パソコンであった。

中でも、ＶＴＲが158件とテープレコーダー以上の数字を示していることは、注目される。しかし、ここでの「保有状況」がそのまま日本語教育の現場への「普及状況」と読みかえられるかといえば、そうではないであろう。今回の調査ではその機器が（１台でも）あるかどうかを質問したのであって、実際の台数でいえば、価格の点からも設備に要するスペースの点からも、ＶＴＲよりカセットテープレコーダーの方が数多く備えられていると推測できる。ＶＴＲを使用する上での問題点として、「設備が（台数が）少なくて不便」という回答もあった。ＶＴＲの保有機関数が各種機器の中でトップであるとはいえ、そういった現実の問題は依然として存在する。

ＬＤＰは、現在のところ保有率は低い。教育用ソフトもなく、録画・編集もできないということで、現場ではまだ敬遠されているようである。しかし、ＬＤの場合、ビデオと違って頭出しの面倒や、反復再生による画質の低下がないのは大きな魅力であり、今回寄せられた回答の中にも教材のＬＤ化を望む声が少なくなかった。今後ＬＤの教材ソフトが世に出ていくようになれば、ＬＤＰの導入も進んでいくのではないかと予測される。

教育機関の種類別で見ると、日本語学校は大学や高専に比べ、保有率の高い機器と低い機器の差が著しかった。ＶＴＲやテープレコーダーに関しては極めて高い保有率が出ているが、その一方で、ＯＨＰや実物提示装置など、非常に保有率の低い機器もあった。

機器の活用率をテープレコーダー、スライド映写機、ＯＨＰ、ＶＴＲ、ＬＤＰ

の５種類について調べた。その結果、活用率の高かったのは、テープレコーダーとＶＴＲである。この２つは、保有率が高いだけでなく、実際に日本語教育によく使われていることが確認された。スライドは、部屋を暗くしなければならない点が不便なせいか、日本文化・日本事情その他の用途でも、ビデオが急速にとってかわりつつあるようである。ＯＨＰも、役割のほとんどが板書や絵カード類で足りるということであろうか、利用率は低い。

機関の種類別に活用状況を見ると、日本語学校は大学や高専に比べ、保有している機器に関しては活用率が高い、すなわち備えてある機器はよく利用している。それに対して、高専の場合は活用率が一様に低い。これは、専門の授業を中心としたカリキュラムとの関係か、あるいは日本語学習者の人数が少ないためかと考えられる。

２．各種視聴覚教材の利用

今回の調査の結果、日本語教育で最もよく利用されている視聴覚教材は、音声テープとビデオであった。これら２つは、大学・高専・日本語学校を通じて使用率が高い。三者の中では最も使用率の低い高専でも、音声テープとビデオは他の視聴覚教材に比べて目立って利用が多くなっている。

次に利用が多いのは、絵カードとフラッシュカードである。テープやスライド、ＯＨＰなど他の視聴覚教材と比較した場合、絵教材の類は使用の際に機材や電源が必要なわけではなく、どこへでも持ち運びできて手軽に使えるという強味がある。また、手作りの教材を用意しやすい。絵カード・フラッシュカードは、初級学習者の多い日本語学校で特に、極めて高い使用率が見られる。

目立って利用が少ないのは、ＬＤである。使用率が伸びていない理由は、前節の機器の保有・活用のところでも幾つか述べた。しかし、ビデオの大きな欠点（頭出しなど）を補う有利な特性もあるので、それらをいかした指導内容・指導方法を盛り込んだソフト、および付属教材が開発・整備されていけば、今後の教育メディアとしては極めて大きな可能性を持っている。これから数年のうちに最も大きな変化が期待できる素材だといえよう。

大学・高専・日本語学校の機関の種類別に見ると、高専では全体的に視聴覚教材の使用が少ない。使用率が40～50％台に達しているのは音声テープとビデオのみで、他は多いものでせいぜい20％台である。絵カード類の利用が少ないのは初級の学習者がほとんどいないためかと思われる。が、その他のものも大学や日本語学校に比べて使用率が低いということは、やはりカリキュラムとの関係（時間的余裕など）から日本語教育における視聴覚教育が全体的に少なくなっていると考えるべきなのであろうか。

大学と日本語学校の大きな違いは、日本語学校で絵カード・フラッシュカードの使用率が著しく高い点である。それ以外の視聴覚教材に関しては、音声テープ、ビデオの使用が多く、ＬＤが少なく、ＯＨＰシート、スライド、パソコンソフトがその中間という、よく似たパターンになっている。

3．日本語教育におけるビデオの使用状況

（1）レベル別使用率

大学と日本語学校では、初級・中級・上級の3つのレベルを通じて、当該レベルのクラスのある機関の75%、すなわち3/4以上がビデオを授業で利用している。ビデオの機器としての活用率が高いことは既に見たが、それが各レベルの学習者に対して利用されている。

大学は全体的に高い使用率が見られるが、レベルごとの推移では初級より中級の方がやや使用が少なくなり、上級でまた高くなる。すなわち、上級、初級、中級の順にビデオの使用率が高い。日本語学校は、初級より中級、中級より上級と率が高くなり、レベルが上にいくほどビデオがよく使われている。しかし、数字的には大学と日本語学校は大体似通っているといえる。

高専の場合、まず初級については、初級クラスのある機関数が3件で、パーセンテージで見ることは、ほとんど意味がない。中級では62.5%、そして上級では半数をきって37.5%（8件中3件）と、上のレベルにいくほどビデオ使用率が低くなる。日本語学校とちょうど逆のパターンである。V章1節で見た「ビデオを使用しない理由」では、高専からの回答は「必要を感じない」（3件）、「カリキュラム上、使用が想定されていない／時間的余裕がない」（4件）、「適当な教材がない」（3件）というところに主に見られた。高専は、留学生の数自体が非常に少なく、また日本人学生と同様に正規の専門のカリキュラムをこなす必要があるので、日本語教育そのものにそれほど多くの時間をあてられないのであろう。また、「ビデオ教材の内容に、高専留学生にふさわしい科学性のあるもの、専門的なものが少ない」という意見が、何件もの高専から寄せられていたが、そういったことも、高専で日本語教育にビデオがあまり用いられない原因になっているのではないかと思われる。

（２）使用時間数

ビデオの定期的な使用時間数に関しては、記入があった件数があまり多くなかったため、一般的な傾向として述べるまでにはいかないが、次のような結果が出た。

全体的には、「週に１時間以上２時間未満」使用すると回答した機関が、初級から上級までどのレベルをとっても最も多かった。

機関の種類別では、高専は、「ビデオ使用は週に１時間未満」と回答した機関が中級で２件、「１時間以上２時間未満」というのが中級と上級で1件ずつと、使用時間数は少ないところでおさまっている。

大学は、「１時間以上２時間未満」「２時間以上３時間未満」がピークだが、各レベルを通じて「１時間未満」から「５時間以上」まで、すべてのカテゴリーにあてはまる機関が１件はある。学習者レベルによる使用時間数の傾向の相違は特にないといえる。

一方、日本語学校は、初級・中級では「１時間未満」から「２時間以上３時間未満」までの間でほぼ均等に回答が分布しているが、上級になると「３時間以上４時間未満」「５時間以上」にも回答が見られるなど、時間数の多い方向に比重が移っている。しかし、なにぶん回答件数そのものが少ないので、日本語学校は中級と上級で使用時間数の全体的パターンが違う、と今回の調査結果から判断することはできない。

現在の使用頻度についての感想としては、学習者からの要望も含めて、「もっと時間数を増やしたい、しかしカリキュラム等の事情があってむずかしい」という旨の意見が何件か見られた。また、「ビデオは、教科書の学習項目と合わないので組み入れにくくて不便だ」という指摘もあった。教科書の内容に即したビデオ教材が製作されるようになれば、教科書と連動しながらという形で、利用時間がもっと増える可能性も出てくる。

使用時間数は、カリキュラム全体での位置づけの中で考える必要があるが、今回の設問は、単に使用頻度をたずねる形にしかなっていなかった。より意義のある議論をするためには、日本語教育のカリキュラム内容および時間数についての調査も、併せてすべきであった。

（3）使用目的

ビデオ教材による指導項目として、レベルを問わず、また機関の種類を問わず高い率を示したのは、「聴解」「内容把握」「日本事情・文化の紹介」であった。

「聴解」の指導には音声テープが従来から活用されてきたわけだが、音声テープと比べたビデオの利点として、「視覚情報と合わせながら、ききとりの訓練ができる」ということが何件もの機関からあげられていた。聴解訓練に視覚情報の助けが入ることがよいかどうかは、意見の分かれるところであろう。しかし、実際にビデオは聴解訓練に盛んに用いられているわけであるし、「目と耳からトータルに情報を得るのが、自然なコミュニケーションの形だ」というビデオ支持のコメントもあった。

「内容把握」や「日本事情・文化」への利用においても、視覚と聴覚からの情報提示というビデオの特性がいかされ、学習者のトータルな情報収集能力が養われる。特に後者では、視覚情報があることで、日本語能力の低い学習者から高い学習者まで、レベルに応じてそれなりの使い方ができる、という点も指摘されていた。

レベルによって著しい違いが見られるのは、「討論の題材」である。この項目は、初級から中級になったところで、大きな伸びを示す。討論が行われるためには、内容の把握がまず前提となるし、日本と自国の比較などがよく選ばれるトピックだということから、日本事情や文化の紹介と密接に結びついていることも、容易に推測される。このように、他の主要な指導項目をふまえて、学習者の表現力の伸長とも歩調を合わせつつ、中級以降にビデオの使用目的が発話・表出を促す方向へと発展していくことがわかる。

一方「導入」「復習」は、初級ではビデオの使用目的として大きな割合を占めるが、レベルが上がるにつれて目立って少なくなる。導入や復習の際の学習項目は文型が主なので、基本文型を習得する時期が過ぎれば、この用途が減るのは当然と考えられる。

「語彙の拡大」は中級以降、多少ながら回答が増えている。日本語教育用ソフトよりもむしろ、テレビの録画（ニュース、特集番組など）から特定の題材を選ぶことで、あるテーマに関連した語彙の知識をふくらませたり、専門用語を学習させたり、という利用もなされているようである。

（４）利用の仕方

ビデオの具体的な利用方法について、Ⅲ章４節であげたような様々な記述回答から確認できた点とは、ビデオが幾つもの指導項目に同時に関わりながら用いられる、ということである。たとえば、１本のビデオを使って授業をする際には、まず語彙や文型を導入して、見せて聴解訓練や内容把握が行われ、その後で応用練習やロールプレイをさせたり、内容によっては討論や作文にもっていく。同じビデオ教材でも、教育現場によって活用の仕方が異なることも十分あり得る。このように、いろいろな指導項目に関しての切り口が必要であり、また可能である点が、ビデオの大きな特長である。

ビデオ教材についての希望の中には、「聴解なら聴解、ロールプレイならロールプレイ用、というように、用途を限定した、いわば特定の目的のためだけのビデオ教材を」という声もあったが、現実問題として、そういった使われ方はまずされないと考えられる。仮に制作者側が文型学習用のビデオを作ったつもりでも、実際に教室で使われる時には、背景に含まれる事情・文化的なことも、登場人物（俳優）の身振りや口調なども、すべて学習素材としてとりあげられる可能性がある。教材用のビデオソフトは、もりこまれる言語形式の生きたコミュニケーションとしての適切性から、非言語的要素、場面・背景に含まれる文化的事項に至るまで、すべてが日本語使用および日本社会の現実の姿を的確に提示したものでなくてはならない、ということをあらためて痛感する。

しかしながら同時に、語彙や文型の面で学習者のレベルや教科書の内容と合ったものを、というもう一つの大きな要望も考え合わせると、極めて深刻なジレンマにおちいることになる。両者のかねあいをできるだけ図る方向で努力するべきか、あるいはどちらかをいかしたものを両方用意して、教育機関や教授者の判断で使いわけていただくようにするべきか、どちらがよいかは一概に決められないが、今後ソフトの開発が行われる際には、この点についての検討がなされ、明確な方針に基づいて具体的な企画がなされるべきであろう。また、教材に付随する解説などの形で企画・作成の方針を明らかにし、教授者側が教材を選択する際の目安とすることも必要であろう。

（５）使用教材

まず、最もよく使われているのは、テレビの録画であった。内容で見ると、ニュースやドキュメンタリーといった報道番組が非常に多い。ニュースは、聴解や内容把握の格好の材料であることはもちろんだが、特定のテーマに関連した語彙を教えたり、日本事情や時事問題をとり入れる際にも便利である。どうしても内容が古くなりがちな市販教材の不足面を補うことにもなる。また、短いまとまりごとに使えるという長所もある。時事的・社会的なテーマを追った学習に役立つという点では、ドキュメンタリーや特集番組も同種のものであろう。

次いで多いのは、ドラマである。こちらは、アナウンサーの「お手本」的な発声・発音で書きことばが語られるニュースに対して、様々なタイプの声、話し方による話しことばのやりとりにふれる機会を提供してくれる。声の調子や口調、顔の表情やものごし、身ぶりといった非言語的伝達手段を学ばせることもできる。また、日本の風俗や文化、日本人のメンタリティについても話題を提起することになる。ドラマに類するものとして、映画やアニメも用いられている。

教養・教育番組、テレビコラム、講演などは、独話を聞く練習、それもあまり視覚情報の助けを借りずに、ある程度の長さの、かたい内容の話を聞いて理解する訓練に使われる。大学の留学生、あるいは大学受験を目指す留学生のノート・テーキング用の素材に向いている。また、教育番組や科学番組は、学習者の専門に合った教材を選びたい時にも、用いられる。

日本事情・文化関係の番組は、日本の歴史をおりこみながら各地の名所や行事、工芸品などを紹介したり、華道や歌舞伎などのいわゆる日本の伝統文化を説明する材料となる。市販教材でもこういった題材を扱ったものはあるが、種類を豊富に、手軽に集めるということで、いきおいテレビの活用へと向くのであろう。

また、当然ながら日本語そのものについての番組も、利用される。「外国人による日本語弁論大会」は、まとまった話をする練習、日本語によるプレゼンテーションの技術を学ぶ一種のモデルとして、特に日本語学校に人気があるようだ。

市販のビデオ教材では、『ヤンさんと日本の人々』が使用が多い。『ヤンさん』は、初級向けではあるが、話し方の速度なども加減せず、自然さに重点をおいている。そこから出てくる弊害（速度が速すぎる、ことばが聞きとりにくい、など）も指摘されたが、一般に学習者の意欲・関心を喚起しており、人気は高い。

次に使用が多い市販教材は『日本語教育映画基礎編』である。こちらは文型中心で、学習項目に合わせて部分的にも使えるという便利さはある。しかし、それでも教科書の語彙や文法項目と合わない部分は当然出てくる。また、制作年度が古いため、背景や場面などが現代の日本の生活と比べて古い感じがする、初級学習者に合わせたことばづかいやセリフまわしも不自然だ、などの指摘が多かった。

自作ビデオは、内容も会話、文型練習、文化・習慣の紹介と、多岐にわたる。身近な先生が出演するので学生が喜ぶ、教授者も自分たちで企画・製作したものなので使いこなしやすい、といったメリットがあげられていた。昨今では、ビデオ周辺機器もいろいろ出まわり、撮影や編集も手軽にできるようになっているが、教材用のものを作るとなると、照明や音声などの技術面、また製作にかけられるだけの費用、人員、時間的余裕など、困難な問題も多い。すべての機関が自作教材を使うことは、現状ではとうてい無理であろう。

録画、市販教材、自作教材の三者を考えると、まず録画は魅力的な素材ではあるが、話し方の速度や語彙・文法面などからも、中級後半から上級の学習者にほぼ利用が限られる。また、ただ録画して見せればよいというものではなく、短く編集したり、文字化してスクリプトを作ったり、教室作業用のプリントを用意したりと、教材化までの準備に要する労力は多大なものである。加えて、著作権の問題も指摘されていた。国際交流基金から何本か出ているドラマの教材化のようなものを、という要望も見られた。しかし、ストーリー性を中心にしたものはまだしも、ニュースのような時事性・社会性の強いものをリアルタイムで教室にもちこむには、やはり録画、ということになろう。

一方、市販教材は、そのまま使えて付属教材もあるという利点はあるが、「教材くささ」があり、でき合いのものなので個々の現場の学習者にふさわしいとは限らない。今後の教材開発の大きな目標は、録画教材の持つ「生」の部分、自然な部分をいかに加味していくか、そして学習者の多様化に対応するべくバラエティーに富んだ利用法の可能性をいかにもりこむか、である。また、利点をさらにいかせるように、付属教材を種類・内容ともに充実させていくことも不可欠であろう。自主製作については、「やってみたいが、どのようにしたらよいかわからない」という声もあった。実際に自主製作された機関でも、そこから出てきた疑問や意見をお持ちかと思われる。独自のビデオ教材製作についてのマニュアル類や、研究会・意見交換会などが、今後増えていくことが望まれる。

（６）補助教材

市販の補助教材と自作のものとに分けて、まず市販教材について見ると、市販ビデオ教材の付属教材の利用が非常に少ない。『ヤンさんと日本の人々』だけでも使用機関が100件近くあるにもかかわらず、練習用教材（ドリル、れんしゅうちょう、などの類）、シナリオ、教師用マニュアルなど、いずれも10件以下しか回答がなかった。しかも、それは『ヤンさんと日本の人々』の付属教材だけでなく、『日本語教育映画基礎編』などその他の市販ビデオ教材のものと一緒にしての数字である。

このように利用が少ないのは、どういった要因によるものなのであろうか。付属教材の種類や内容に関する情報流通が不十分なのか、あるいは情報はいきわたっているが、教えている学生に合わない、やりたい教室作業に合ったものがないなど、使い勝手がよくないので採用されないということなのか。この点については、さらに調査が必要であろう。前節でも述べたように、市販ビデオ教材が提供し得る大きなメリットとは、スクリプトやドリル、指導書などもあわせて準備されていることである。その部分が現在あまりいかされていないのであれば、改善を図り、本当に活用されるような付属教材を整備していかなければならない。

自作の補助教材では、語彙リスト、スクリプト、絵カード類、ワークシート、音声テープといったところが主にあげられる。これらは、市販ビデオの付属教材としても、ぜひそろえるべきものと考えられる。特に、ビデオ機材の数や教室の都合などで、毎回ビデオを使用するわけにいかないことも多いであろうから、その場合には、絵カード類や音声テープが、文型練習などの教室作業の補助として、あるいは聴解練習の助けとしてなど、重要な役割を果たすはずである。

4．ビデオに関する意見

記述回答の形で寄せられたコメントの主な内容を、以下の一覧表にまとめた。

	よい点	問題点	希望	備考、その他
ビデオ教材一般 学習者の反応	○良好。楽しんでいる ○興味・意欲を示す ○文字教材とは違った目新しさで、気分転換になる	○集中力が続かない ○正当な学習手段と認めない ○耳がおるすになる受身になりがち		○反応の良し悪しは、内容による
教材としてのビデオ	○視覚情報の具体性、臨場感。理解促進 ○インパクトが強く、定着もよい ○言語活動を総合的に提示でき、文脈の中で語や文型を学べる ○日常出会う日本語への関心が養われる	○見る時はひきこまれているが、定着面が不安	○補助教材の内容と種類の充実 ○教室作業用の素材・補助教材を	○絵カードよりも絵が鮮明。動きもある ○文字教材や音声テープより場面提示力が優れている
授業運営面	○授業内容の多様化 ○題材を豊富に選べる ○ロールプレイなど、教室作業がしやすい ○予期せぬ発展がある	○頭出しに手間どると授業の流れが止まる ○事前の準備が大変		○レベルや学習内容に合った教材を選ぶことが重要 ○授業前に充分に準備することが不可欠
＜市販教材＞	○文型の学習に便利 ○場面や状況とともに文型や語彙を提示できるので、効果的	○設定や会話が不自然 ○内容が古い ○かたい、暗い ○語彙など教科書と合わない ○値段が高い	○自然で明るいもの、時事性のあるもの、知的興味をひくもの ○教科書との連動性 ○目的の明確な教材を ○ソフトを安価に ○種類を豊富に	○ものによって、自然なもの、不自然なものなど、いろいろ
＜録画教材＞	○生のものを理解できた喜びが学習意欲につながる ○時事的・社会的なものをとりこめる	○語彙量が多すぎる ○話し方の速度が速い		○中・上級になると、生教材への方が良い反応を示す
＜自主製作教材＞	○製作意図を把握しており、使いこなせる ○教師が出演していると、学生が喜ぶ	○製作に費やす労力が多大	○自主製作に関するセミナー、ワークショップなどの開催	
ハード、操作面	○繰り返し再生、一時停止、スローなどの機能が便利	○頭出しや巻き戻しに時間がかかる ○一時停止の後、再生した時に音声が一瞬消える ○大教室での音声不良 ○画質の低下	○操作が簡単な機器の開発 ○教材をＬＤ化し、コンピュータと連結してアクセスを速やかにする	
ビデオ利用をとりまく環境・状況		○設備が少なく、なかなか使えない ○教室への運搬が大変 ○学校側が視聴覚の重要性を認めていない ○人員・予算の不足	○ビデオの内容などの情報流通 ○貸し出し制度 ○利用に関するセミナーなどの開催 ○利用に関する研究の促進	

5．ビデオを使用しない理由

ビデオを使用しない理由には、以下の２種類が大別される。

①機関やカリキュラムの方針上の要因

②ビデオ利用そのものに関わる要因

①にあたるのは、ビデオの使用がカリキュラムの中で想定おらず、そのためにビデオを使う時間的余裕がない、あるいはビデオを使う必要性を感じない、などの場合である。必要性を感じない理由としては、日本で日本語教育をする以上、教師との接触や実生活での体験などから生の日本語・日本文化を学ばせるべきだ、という意見が見られた。すなわち、基本的な教育方針としてビデオという教育媒体そのものを考慮の対象にしない、ということになるので、ビデオを利用するかどうかを決める際の原則に関わるかなり決定的なポイントといえる。

②は、利用に関わる現実的な問題である。その中には、教材自体の問題点（適当な内容のものがない、価格が高い、補助教材が少ない、など）、設備やハードの問題点（ビデオ設置数など設備が不十分、機器の操作が面倒、など）、授業運営上の問題点（使用法がよくわからない、準備に時間がかかる）など、複数の種類が含まれる。ただし、これらの点は、どれも使用機関から寄せられた問題と共通している。ビデオを使用していない機関の回答を見ても、ビデオの不便な点やビデオ教材に対する希望など、使用機関から寄せられた意見と違いはない。

このようにしてみると、ビデオを使用していない機関と一口にいっても、①の理由によるのか、あるいは②の要因だけが問題なのかによって、分けることができよう。今回の調査で「ビデオを使用しない理由」という選択肢式の設問に回答を記入した機関は30件であった。そのうち、複数回答で選んだ中に①にあたる選択肢が入っていた機関は23件あった。従って、30件中23件は、ビデオを使わない理由が基本的方針のレベルで存在すると考えられる。一方、それ以外の７件は、ビデオそのものの必要性を認めないわけではないが、利用に関わる現実的な困難から、使用に至らないケースと見ることができる。そして、そういった問題点は、上述のようにビデオを用いている機関のものと共通している。つまり、ビデオを使っている機関も、同じ悩みを持ちながら使っているのであって、諸々の問題点とビデオへのニーズをはかりにかけた時の比重によって、使用・不使用が分かれているということになる。こうしたケースについては、教材や設備の改善によって、ビデオが導入される可能性も少なくないであろう。

（補）教材一般についての感想等

今回の調査では、視聴覚教材以外に、日本語教育の教材一般についての意見・感想の欄を設けた。最後に、補足資料としてその欄に記入された回答の一部を紹介する。

【教材に関しては、こんな風にやっている】

●教材は時間の経過とともに内容が必ず古くなるので、市販の教科書から適当と思われる箇所を選ぶとともに新聞記事などの最新ニュースで補いながら授業を進めています。参考書からの抜粋や学習レベルに合わせた自作の例文、練習問題、自作教科書などを使っています。準備に時間がとられすぎると思うこともありますが、学生のレベルに合わせるのが第一条件と覚悟しています。（高専）

【こういう教材がほしい】

●当大学では今のところ教官１名が実は初級レベルから上級レベルの学生までの日本語・日本事情教育を担当しており、他の講義（日本人対象）もあって、とても自主教材の作成まで手がまわりません。ですから、市販教材が多様であればあるほど選択の余地も広がって、末端としては授業がしやすくなります。ビデオ・テープ・教科書・副読本、何でも歓迎です。選ぶのは楽しい作業ですから。（大学）

●日本語の論文記述能力を養うための材料があればよいと思う。論文はある程度、文章論的にパターン化もできるので、記述力を高める方法が合理的に工夫されてよいと思われる。（大学）

●英語教材（Oxford Press, Cambridge Press）のもののように、もっと教材自体をカラー化し、写真等を多く使用した、視覚的に楽しめる教材の開発。教材と視聴覚教材の一体化したものの開発。（大学）

●外国人留学生の専攻と関連のある語学教材があればと思います。彼らは専門書が読みたいのです。（大学）

●聴解能力を高める教材が、学習者の必要性に合わせて選択できるぐらいの豊富な種類が欲しい。教材一般について言えば、非漢字系の学習者、特に中級

から上級レベルの、又、日本の教育機関で学位を取得していくような学生を対象とした漢字語彙の運用能力を養う教材の開発を望みたい。（大学）

●読解力、作文力を伸ばすよい教材があれば教えてほしい。（大学）

●今後はぜひ上級の教材（特に読み教材）開発に力をいれてほしい。週に２時間(100分）で読みおわる長さの教材を望む。高専留学生は、実験・見学があるので、日本語の授業にくいこむため、１週毎に読みおわるものがふさわしいと考える。（高専）

●学部留学生の場合、1～2年で予備教育の日本語で大学の講義・生活全般に対応しなければならないのが一番の問題だと思う。教養の諸科目のキーワード調査ができて、語彙表があればありがたい。（大学）

●日本語学習者用辞書を充実させていただけたらと思う。（日本語学校）

●ＣＤ版のパソコンで見られる辞書が欲しいです。文字情報ではなく、絵と音で出てくるような。アニメーションをもっと使ってみたらどうでしょう。中身をもっと面白く、大人が読める物、いろいろ考えさせ、創造力を刺激するようなもの、何か自分も言いたくなるもの。それについてもっと調べたい時に道すじのついているもの。（大学）

【もっとこういうことをすべきだ】

●視聴覚教材に限らず、読解、聴解教材などについてもいえることですが、大学の場合、分野別の日本語教育をすすめるにあたって教材研究の不足から、教材そのものが絶対的に足りません。日本語教師がどこまで踏み込めるのかという問題もありますが、学部生、大学院生に必要な日本語力というのは何なのか、予備教育も含めて、検討する必要があるのではないでしょうか。（大学）

●学習者の目的、ニーズ、レベルが多様化し、現場の教師は対応に苦慮している。その現状の正確な把握が先決と思います。（大学）

●教材だけが独立して存在するのではなく、学習活動、教育活動との結びつきの中で考えられ、開発が進められるべきではないかと考えています。（大学）

●最近の世界情勢や、世界、地球、科学その他変化が非常に激しい。日本の特殊事情だけでなく、世界共通のテーマやニュースを扱った新しい中級・上級の教材開発がもっと盛んになってほしい。テレビ・ラジオ、新聞、出版社な

どのミディアとのタイアップなどで、より迅速な対応も考えられるのではないか。（大学）

●他の語学テキスト（例えば英語、フランス語）では献本の制度があるが、日本語のテキストにはその制度がないので、新刊テキストの採用にふみきれないところがある。教師自らが新刊案内にたえず気を配り、採否を決定するしかないのだろうか。（大学）

●視聴覚教材をはじめ、教材は教室内で効果を発揮するものが売られているとは限らないと思います。出版側は学校単位だけではなく、個人で購入することまで計算に入れて出しているようですが、日本語教師の数が増えるとともに全体のレベルが低下し、発売される教材も「広げやすい」「学習者の能力を上げるのに効果的」というのものより、「新人でも使える」「説明をするのに高度な技術を要しない」というものが多くなっているのではないでしょうか。特に聴解練習用のテープにその傾向が強いように感じます。コピー文化が問題となっている現在、一冊でも、一本でも多く売れるものを出すという考え方に対しては何も言えませんが、作る側が「こだわり」を持ち、より効果が上がる教材を作っていくことが大切だと思います。（日本語学校）

おわりに

視聴覚教育が外国語教育における重要な、そして非常に効果的な手段であることは、従来誰もが認めてきたことである。その中で、ビデオも、近年の機器の普及や教材の多様化に伴って、主要な日本語教材の位置を占めるようになったことが、あらためて今回の調査で確認された。しかし、ビデオの利用に関わる問題点は、回答の多くに見られたように、決して小さなものではない。また、適切な教材内容、利用方法、用途などについても、現場の先生方のそれぞれが様々な形で模索を続けておられる様子がうかがわれた。

今後のビデオ教材を考える上で押さえておくべき要点の一つは、教室での指導用のビデオと、学生の自習用のビデオとの区別であろう。回答で寄せられたビデオ教材への希望の中にも、従来の教室用教材に対するものと、学生が各自のペースやニーズに合わせて使えるような教材についてのものとが、どちらも含まれていた。ビデオの場合、機材の問題もあり、個々の学習者が自分の家で自習するための教材としては難しいが、そのあたりはＬＬ教室の利用や、音声テープとの組み合わせで効果的な分業を考えることもできよう。また、コンピュータによる映像素材の操作・検索技術が急速に発達し、一般に普及し始めている現在、語学用ビデオをＣＡＩ的に活用する可能性も大きく広がっている。今後、教材の種類や内容を充実させる方向に加えて、様々な視聴覚素材の利用法に関しても、検討や意見交換の場が増えていくことが強く望まれる。

［資料　アンケート調査票］

視聴覚教材の利用に関するアンケート

機関名：

記入者名：

記入日：　　年　　月　　日

（お答えは、この日現在の状況をご記入下さい）

国立国語研究所　日本語教育センター

日本語教育教材開発室

Ⅰ．貴機関の学生や授業について、おうかがいします。

(1) 全体の学生数と、学習者のレベル・内訳についておうかがいします。

全体で_____人　　初級：_____クラス（計_____人）
中級：_____クラス（計_____人）
上級：_____クラス（計_____人）

(2) 学習者の出身国と、その内訳についておうかがいします。

中国____人　台湾____人　韓国____人　その他東アジア____人
東南アジア____人　南アジア____人　オーストラリア____人
その他オセアニア____人　アメリカ____人　カナダ____人
中南米____人　イギリス____人　フランス____人　ドイツ____人
その他ヨーロッパ____人　ソ連____人　アフリカ____人
中東____人　その他（　　）____ 人

(3) 学習者のタイプについて、あてはまるものにすべて○をつけて下さい。

語学留学生（　）　就学生（　）　大学受験者（　）
技術研修者（　）　中国帰国者（　）　難民（　）
帰国子女（　）　ビジネスマン（　）　在日外国人家族（　）
その他（　　）

(4) お使いになっている教科書をお教え下さい。

初級：_____　_____
中級：_____　_____
上級：_____　_____

(5) 全体の教師数はどの位ですか ……

常勤：_____人　非常勤：_____人

Ⅱ．教材の使用状況についてうかがいます。

(6) 貴機関で保有しておられる機器に○をつけて下さい。

オーディオテープレコーダー（　）　スライド映写機（　）
８ミリ／１６ミリ映写機（　）　ビデオテープレコーダー（　）
レーザーディスクプレーヤー（　）
ビデオ周辺機器（ビデオ・プリンター、テロップマシン、編集機器、など）
（　）
オーバーヘッドプロジェクター（ＯＨＰ）（　）　実物提示装置（　）
ＬＬ教室（　）　パソコン（　）　ワープロ（　）
その他（　　）

(7) 文字教材以外の教材として、実際にどのようなものをお使いですか。共用のものとして学校側で用意なさるか、先生個人が用意なさるかに分けて、あてはまるものすべてに○をつけて下さい。

	学校が用意	個人が用意
絵カード		
フラッシュカード		
ＯＨＰシート		
音声テープ（ラジオ放送を含む）		
スライド		

	学校が用意	個人が用意
ビデオテープ（テレビ放送を含む）		
レーザーディスク		
パソコン上のＣＡＩソフト、ワープロソフトなど		
その他（　　）		

ビデオあるいはレーザーディスクに○をつけた場合は１、つけなかった場合は２にお進み下さい

１．ビデオあるいはレーザーディスクに○をつけた場合にお答え下さい。

①ビデオあるいはレーザーディスク教材は、どのレベルの学生にお使いですか。あてはまるものにすべて○をつけて下さい。

初　級（　　）　　中　級（　　）　　上　級（　　）

②どの位の時間数お使いですか。学習者のレベル別にお答え下さい（例．週に１時間、月に２～３時間など）。不定期の場合は、不定期の欄に○をつけて下さい。

	使用時間数	不定期
初級	に　　時間	
中級	に　　時間	
上級	に　　時間	

③視聴覚教育のみの時間が設けられていますか。あてはまる方を○で囲んで下さい。

いる　　いない

④ビデオおよびレーザーディスク教材をどのような目的でお使いですか。学習者のレベル別に、あてはまるものにすべて○をつけて下さい。

	初級	中級	上級
導入			
復習			
聴解			
内容把握練習			
タスク練習			
応用練習のモデル			
ディスカッションの題材			

	初級	中級	上級
ロール・プレイングのモデルまたは契機			
語彙教育			
日本事情文化の紹介			
時間調整			
その他（　　）			

⑤どのような時に、どのような方法でお使いですか。（自由にお書き下さい）

⑥どのようなビデオ教材をお使いですか。お使いになったことのあるものに○をつけて下さい。

日本語教育映画基礎編（国立国語研究所）　（　）
日本語教育映像教材中級編（国立国語研究所）（　）
ヤンさんと日本の人々（国際交流基金）　（　）
生活ガイドビデオ（海外技術者研修協会）　（　）
VIDEO JAPANESE（新宿日本語学校）　（　）
ビデオ講座日本語シリーズ（東京書籍）　（　）
その他の市販ビデオ教材（　　）
テレビを録画したもの（番組の種類：　　）
自主制作のビデオ　（　）
その他（　　）

⑦どのような補助教材をお使いですか。

市販の補助教材：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

自主制作の補助教材：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

⑧ビデオおよびレーザーディスク教材をお使いになる先生は何人位おいでですか。

＿＿＿人

⑨学習者の反応はいかがですか。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

⑩ビデオ・レーザーディスク教材をお使いになる理由、他の教材と比べて長所と思われる点などをお聞かせ下さい。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

⑪既存のビデオ教材および関連補助教材について、お考えになっていることをお聞かせ下さい。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

⑫ビデオ教材の不便な点、今後のビデオ教材に望むことをお聞かせ下さい。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

⑬今後、また御連絡させていただくこともあるかと思いますので、貴機関で視聴覚教育を主に担当なさっている方のお名前をお教え下さい。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

３．にお進み下さい

2．ビデオあるいはレーザーディスクに○をつけなかった場合にお答え下さい。

⑭ビデオ教材をお使いにならない理由をお聞かせ下さい。（あてはまるものにすべて○をつけて下さい）

－教師の側でビデオ教材利用の必要を感じない。（　　）
－学生が興味を示さない。（　　）
－カリキュラム上、ビデオを使うことが想定されていない、または時間的余裕がない。（　　）
－ビデオを使用するための機器・設備が充分でない。（　　）
－適当な教材がない。（　　）
－ソフトの値段が高い。（　　）
－教師用のマニュアルなど、補助教材が少ない。（　　）
－授業中にＶＴＲを操作するのが面倒だ。（　　）
－どう使ったらよいかわからない。（　　）
－授業の準備に時間がかかりすぎる。（　　）
－その他（　　）

⑮ビデオ教材の問題点，不満な点、今後のビデオ教材に望むことをお聞かせ下さい。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

3．その他視聴覚教材、または教材一般についてお考えのことがあれば、何でもお聞かせ下さい。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご協力ありがとうございました。

79575

視聴覚教材の利用に関するアンケート　結果報告書

部内参考資料（非売品）

発行　平成３年（１９９１年）３月５日

編集　国立国語研究所 日本語教育センター
日本語教育教材開発室
〒115　東京都北区西が丘３－９－１４
電話　０３－３９００－３１１１